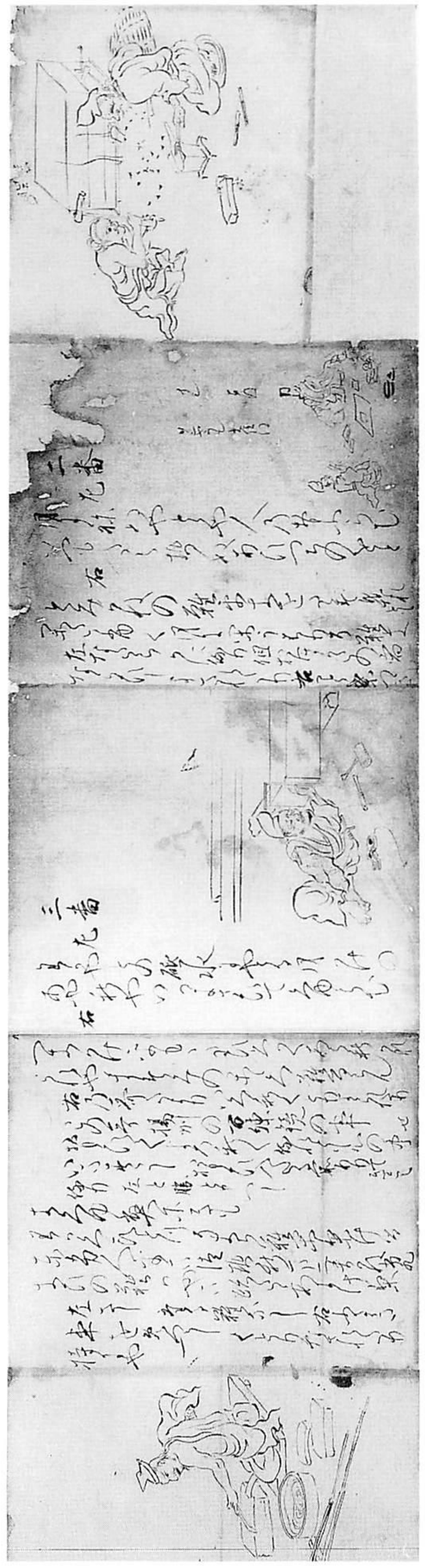
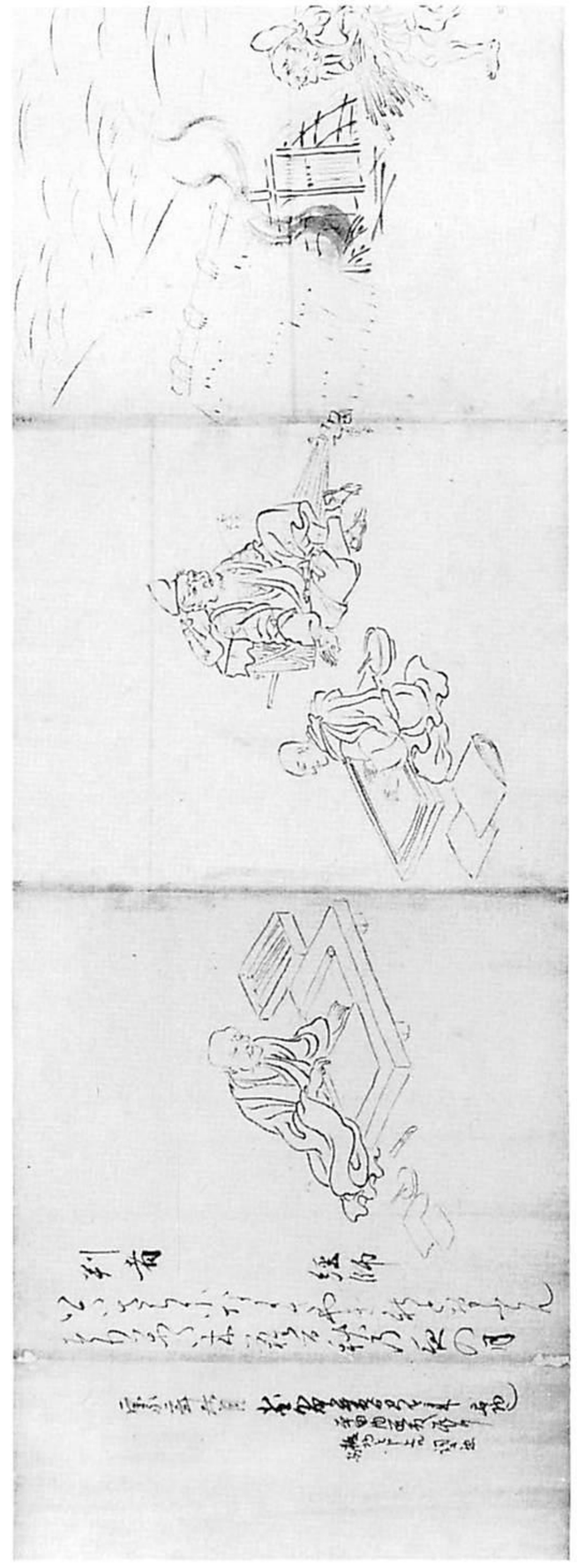




1　東北院職人歌合　（二七二）

紙本墨画　一巻　三二八×三四〇五

宝永二年（一七〇五）

十三紙継

［本文別録］

（第二紙右墨書）イシ　古図」ヲンヤウシ光信図」

（第四紙右上墨書）九」

（第五紙右上墨書）八」

（第六紙右上墨書）七」

（第七紙右上墨書）六」

（第八紙右上墨書）五」

（第九紙右上墨書）四」

（第十紙右上墨書）三□不□読」

（第十一紙右上墨書）□不□読□ち」

（第十二紙右上墨書）頭」

（第十三紙墨書）宝永二年六月」小出加賀守殿より見遣ニ来　ニセ物也／平田内匠殿承り／拵（拵）物と申上ル　詞モ惣」

［画中色指示］

（第一紙鍛冶）火」スミ」スミク」ウス」かち」此男／有同」

（第三紙番匠）文六」

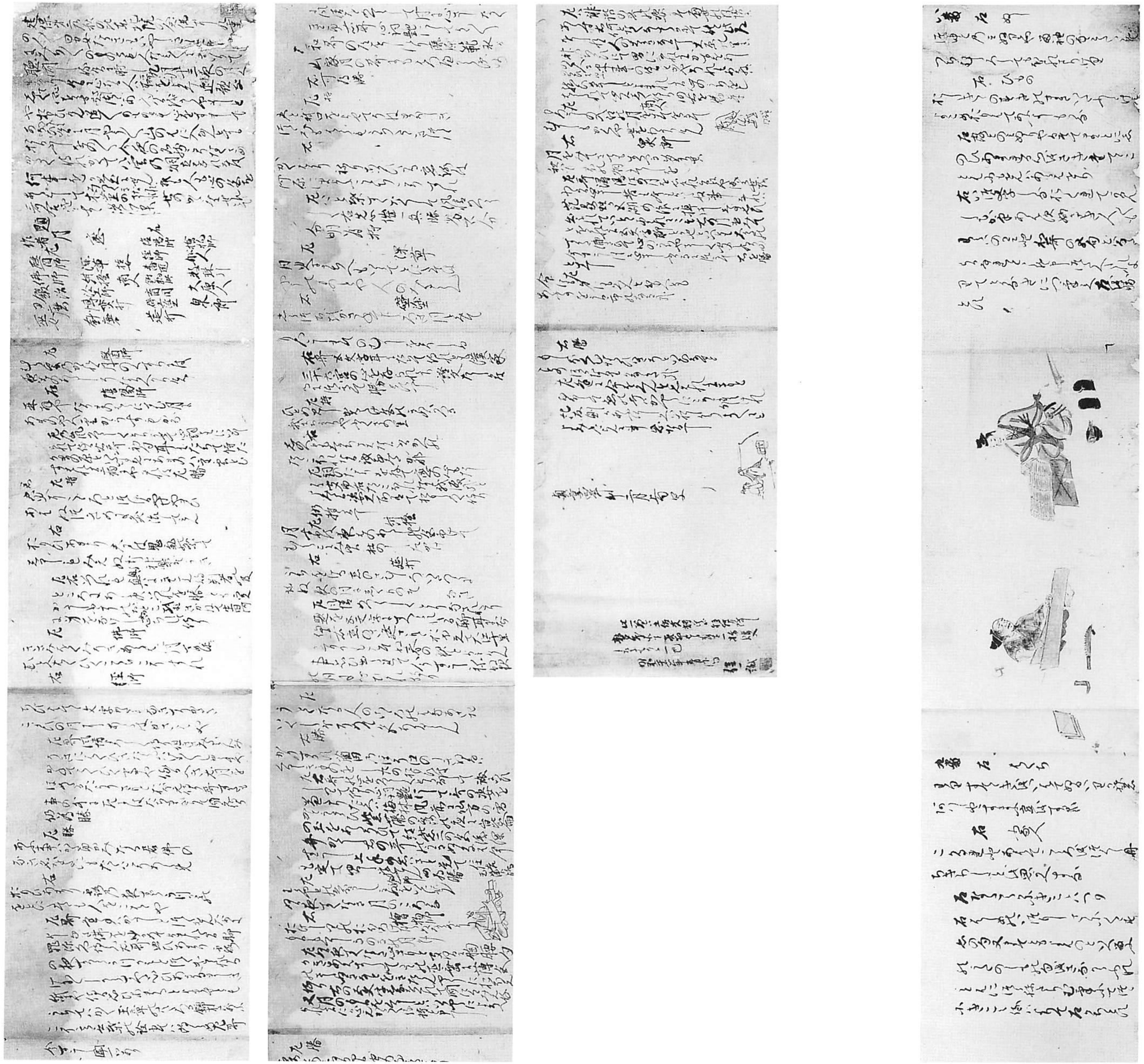
（第五紙鋳物師）カヘ」カヘ」

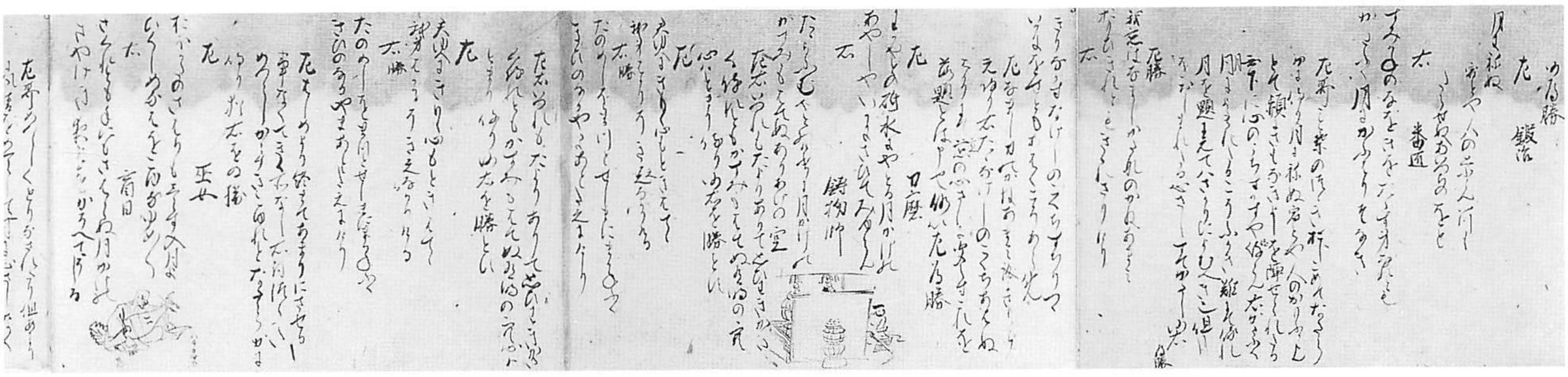
（第六紙鋳物師）カスリ中スミ」

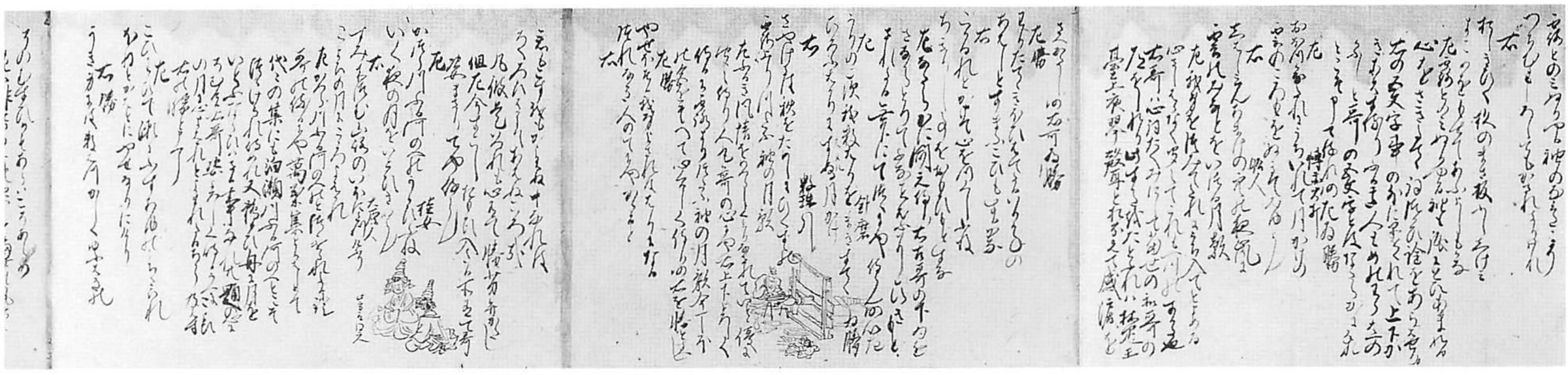
（第七紙巫）白」朱」六（文）クサ（着）」白」

（第十紙海人）アイクマ（スミケシ）斗」白」白」朱スミ」

（第十一紙商人）地アサ／文コン」コン」コン」コンクマ」シト」丹」六」ワト」







2　東北院職人歌合　（別一）

紙本墨画　一巻　二四〇×四七二

貞享四年（一六八七）

（第一紙右下朱文方印）欣魚／洞蔵」

（第十四紙左下白文方印）欣魚／洞」

十四紙継

［本文別録］

（第二紙右上墨書）二」

（第三紙右上墨書）三」

（第四紙右上墨書）四」

（第五紙右上墨書）五」

（第六紙右上墨書）六」

（第六紙盲目図墨書）ハチ尋ルカ」

（第七紙右上墨書）七」

（第八紙右上墨書）八」

（第九紙右上墨書）九」

（第十紙右上墨書）十」

（第十一紙右上墨書）十一」

（第十二紙右上墨書）十二」

（第十二紙桂女図墨書）此方有二人」

（第十三紙右上墨書）十三」

（第十三紙商人図墨書）此方／有／同」

（第十四紙右上墨書）十四」

（第十四紙中墨書）貞享四年卯二月上旬写」

（第十四紙左墨書）此一巻八土佐光輝氏が移転に際し／襲蔵品を売却せしものを一括購入／したるもの、一也」昭和二十六年五月下旬　佳一識」

3　東北院職人歌合　（二七三）

紙本淡彩　一巻　二五五×二四五〇

元禄五年（一六九二）

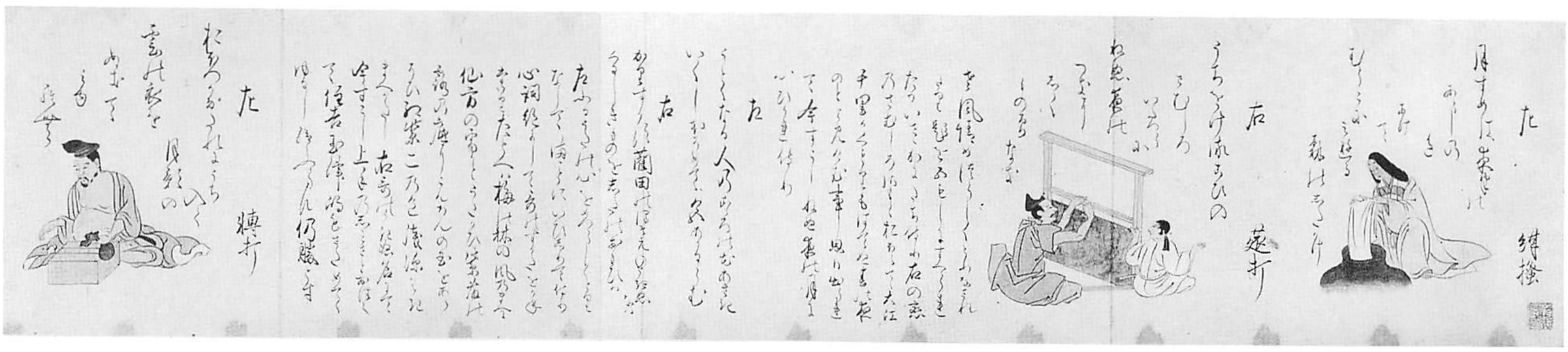
八紙継

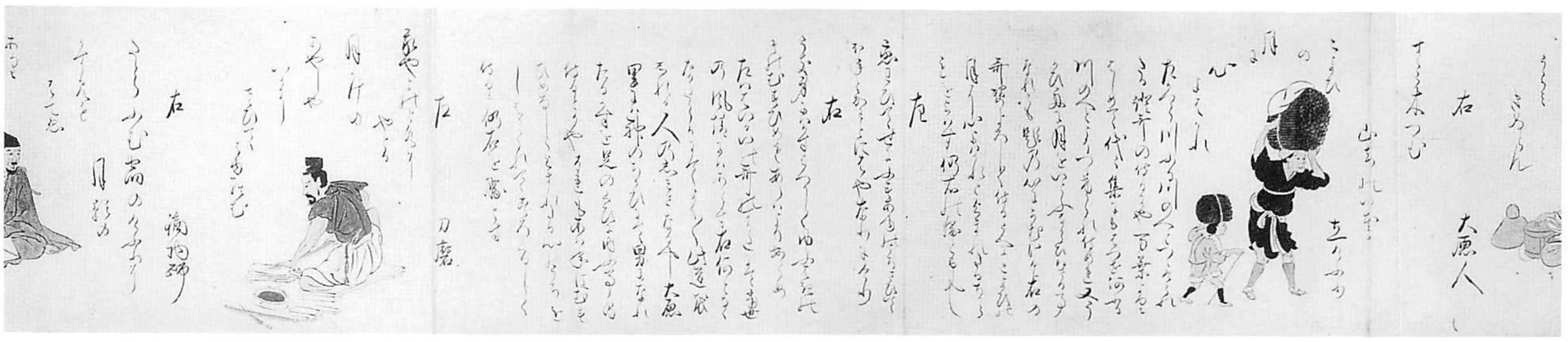
［本文別録］

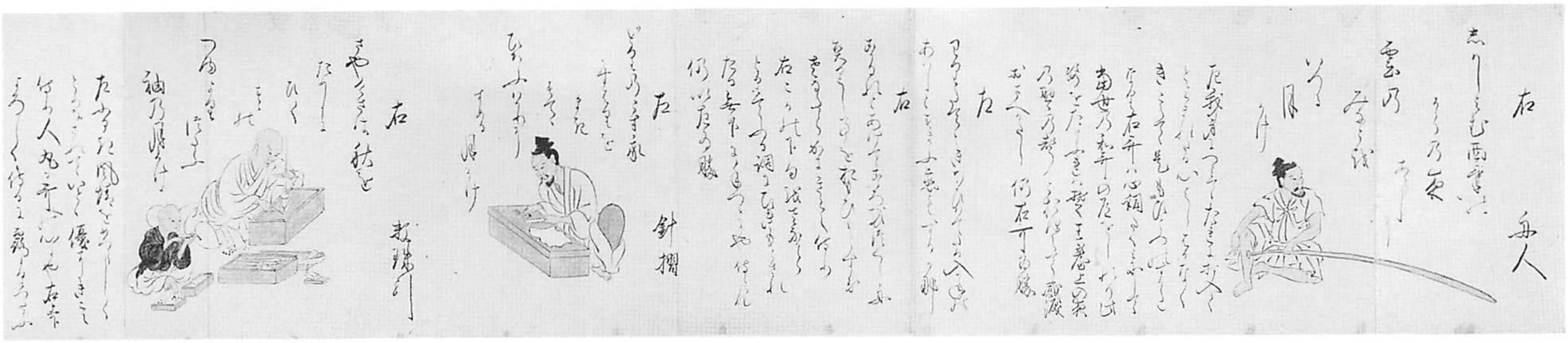
（第八紙墨書）元禄五年壬申九月下旬寫　山田嘉兵衛殿所持／土佐權守經隆と申遣／詞書光厳院ノ由」

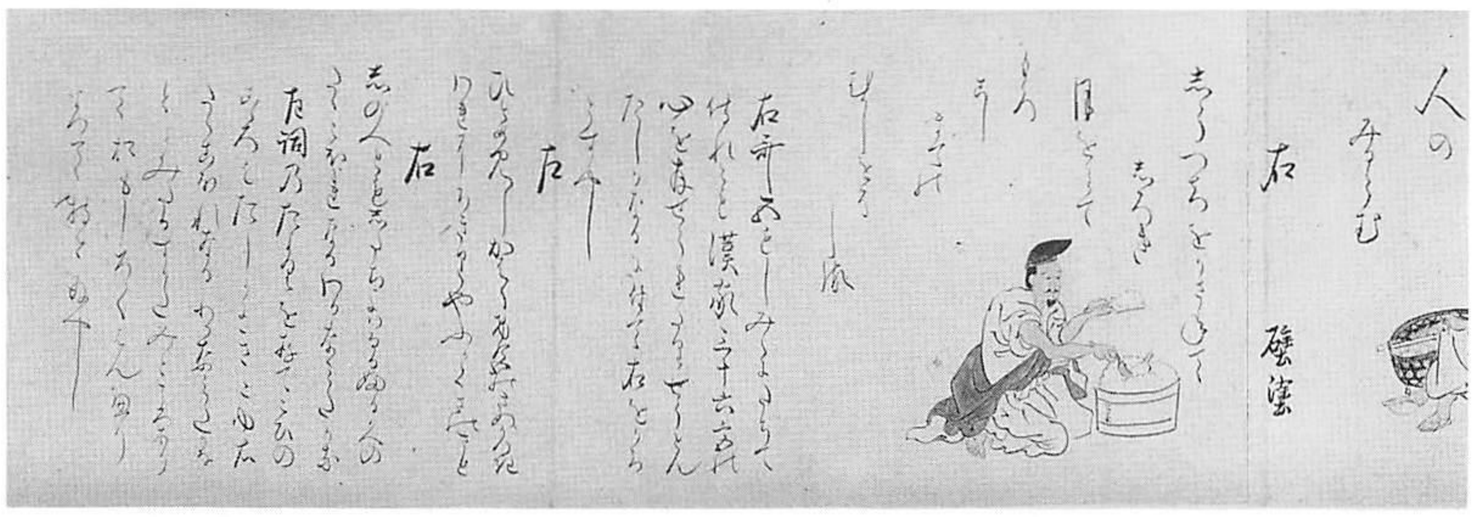
［画中色指示］

（第七紙数珠引図）白」









4　東北院職人歌合　（別二）

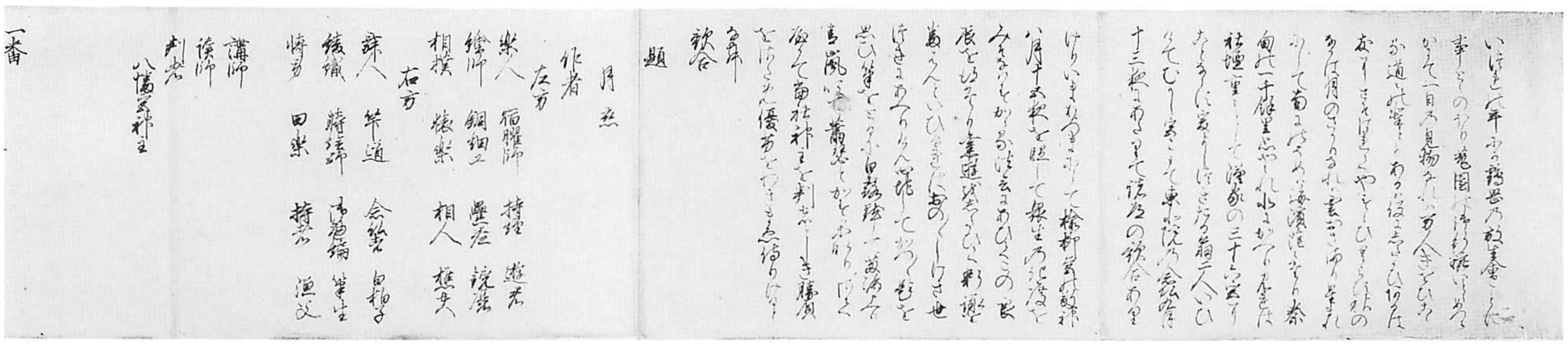
紙本着彩　一巻　二六五×一二二二二

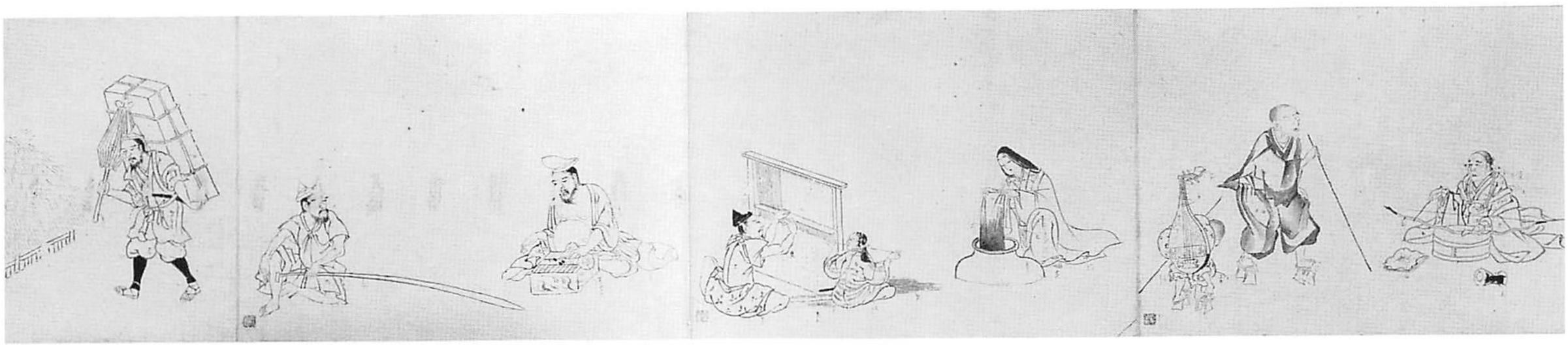
（第一紙右下朱文方印）欣魚／洞蔵」

三十四紙継

［本文別録］

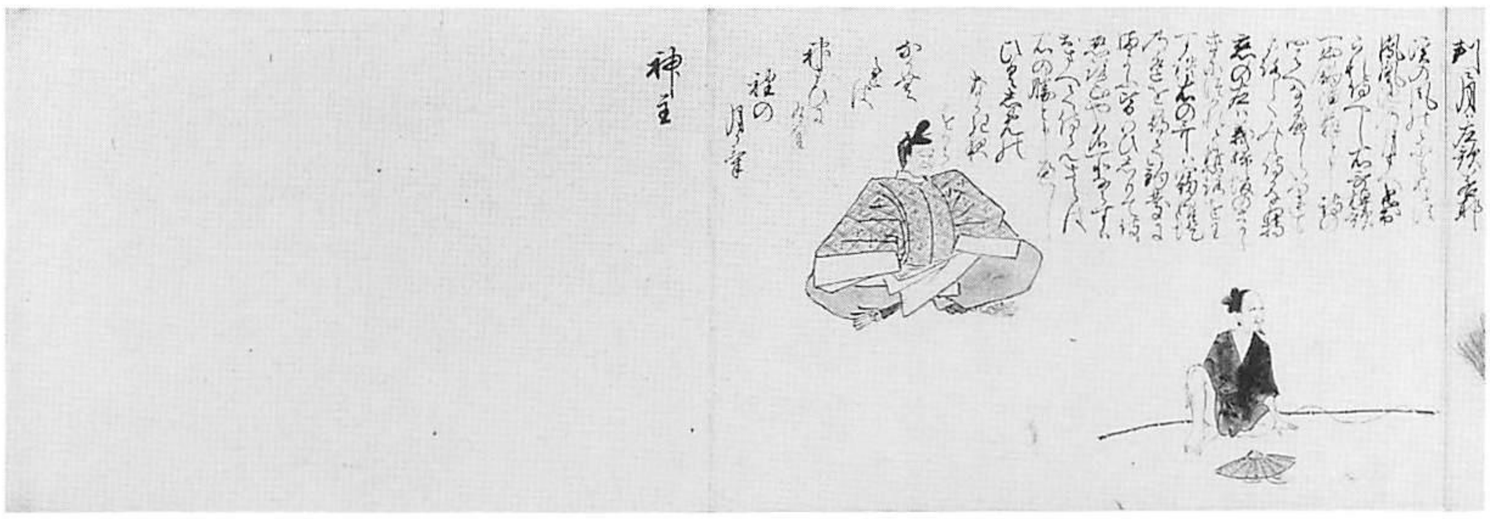
5　東北院職人歌合　（一四三）
紙本墨画　一巻　二八四×三二八四
土佐光文
（第一紙左下朱文長円印）画所預」
（第二～九紙左下白文方印）土佐」
九紙継



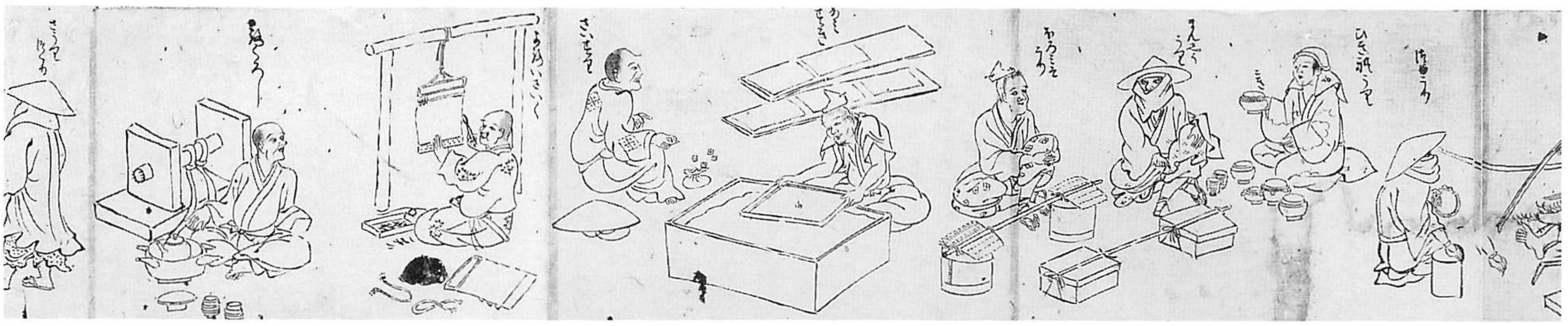


（第一紙墨書）職人盡押画八枚之寫　光文
（武）藏」

［画中色指示］
（第二紙右人物）六」コン」白」
（第二紙中人物）白」クン」
（第二紙左人物）六」青シツ」エン」白」六」
（第三紙右人物）六」クロ」白」六」
（第三紙左人物）文コン」六」白」白」ワト」
六（コ）シ」六」朱スミ」
（第四紙右人物）白」白」シト」青シツ」六」
（第四紙左人物）青シツ」白」白」ギン」ギン」朱スミ」
（第五紙右人物）文金」白」六」朱」シド／スミ」六」六」朱」白」シド」白」
（第五紙左人物）白」ワド」白」白ケタル／シド／スミ」六／文白」白」朱ノグ」
（第六紙右人物）白」六」白」グン」白」コン」生エング〈スミケシ〉朱ノグ」朱」ウラ／コン」文茶」朱ズミ」
（第六紙中人物）白六」文グン」白」コン」金ククリ」
（第六紙左人物）白六」白」コン」朱／ズミ」文／コン」
（第七紙右人物）朱ズミ」ワド」白」アイ／グ」朱グ」金ノシマト二」六」
（第七紙左人物）ワド」六」
（第八紙右人物）白」六」ワド」コン」コン」白」グン」シ（ワ）ド白ケタル」グン」コン」朱ズミ」
（第八紙左人物）ワド」六」グン」グン」グン」白」グン」ワド」
（第九紙右人物）地シド／文シトズミ」銀」
（第九紙中人物）白キシドズミ」
（第九紙左人物）白」白」白」グン」白」



6　鶴ケ岡放生会職人歌合　（二七五）
紙本着彩　一巻　二八〇×七四一〇
十九紙継
［本文別録］



7　七十一番職人歌合　（別三―一）

紙本墨画　一巻　二六二×七六六五

慶長一四年（一六〇九）

土佐光吉

（第一紙白文方印）［不読］

（第一紙朱文方印）欣魚／洞蔵」

（第二十紙白文双龍文郭方印）画院待／詔之印」

（尾紙白文方印）欣魚／洞主」

二十紙継、尾紙（二六二×一一〇）

十四・十五紙に補紙

（第一紙墨書）一まき／人数四十八」はんさう」かち」

（第二紙墨書）かへぬり」ひはたふき」とき」

（第三紙墨書）ぬし」こん屋」

（第四紙墨書）はたおり」

（第五紙墨書）ひ物し」くるまつくり」

（第六紙墨書）なへうり」さかつくり」

（第七紙墨書）あふらうり」もちいうり」筆ゆひ」

（第八紙墨書）むしろうち」すみやき」

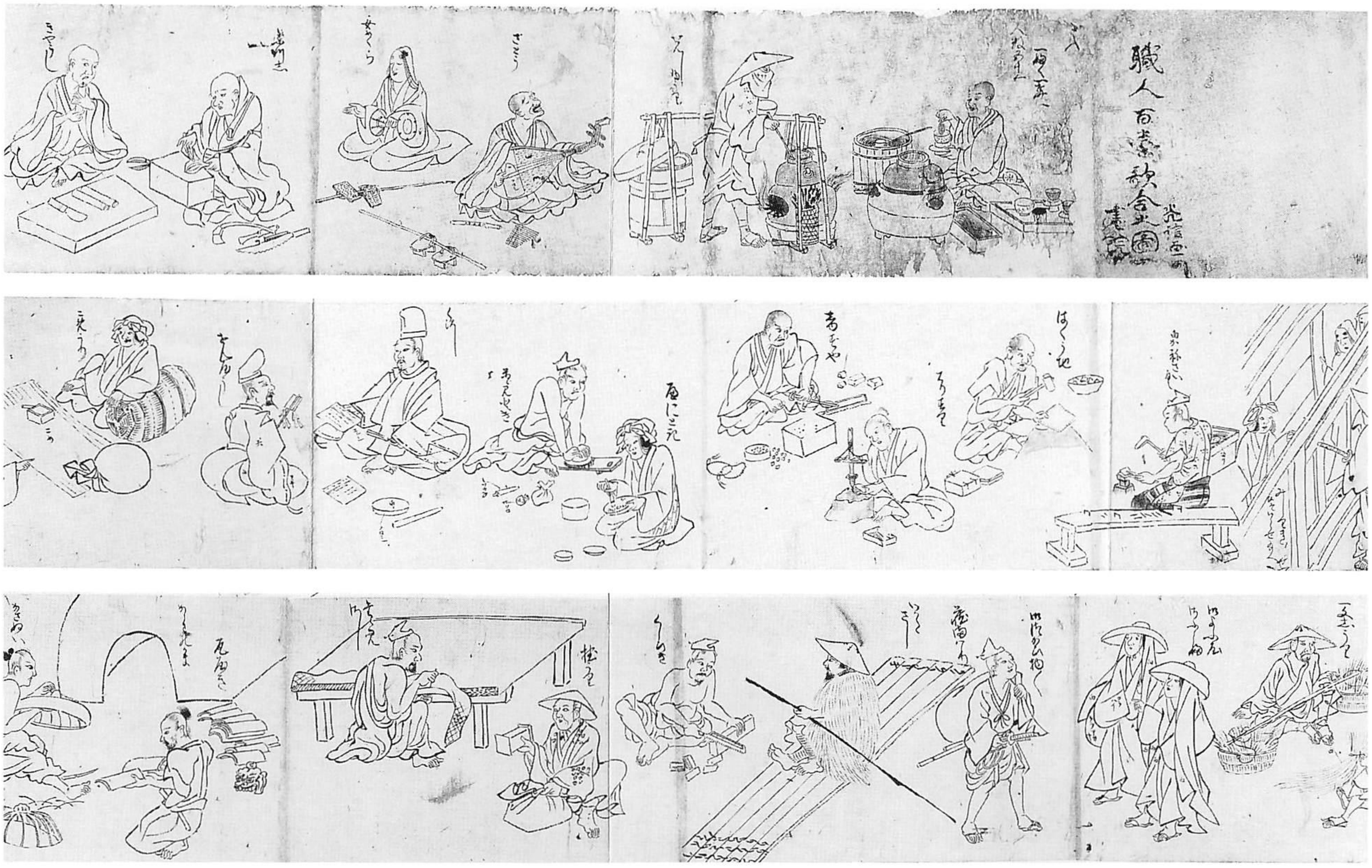
（第九紙墨書）をはらめ／をはらめ（スミケシ）」むまつかい」白」かはうり」

（第十紙墨書）山人」浦人」

（第十一紙墨書）木こり」草かり」かはらけうり」

（第十二紙墨書）えほし／おり」あふきうり」
（第十三紙墨書）おひ／うり」白い物うり」
はまくりうり」
（第十四紙墨書）いおうり」ゆミつくり」
（第十五紙墨書）つるうり」ひきれうり」ま
んしう／うり」ほろミそ／うり」
（第十六紙墨書）かミ／すき」さい／すり」
（第十七紙墨書）よろいさいく」ろくろし」
（第十八紙墨書）さうり／つくり」ゆうわう
は、き／うり」かさはり」
（第十九紙墨書）あしたつくり」みすあミ」
（第二十紙墨書）からかみ／し」土佐久翌」
とり／慶長拾四年　九月吉日二これヲウ／
ツス也」
（尾紙墨書）この一巻ハ土佐光輝氏が移転／
のため襲藏品を處分せし／ものを一括して
購入せしもの々一／也／昭和二十九年十二
月／表装に際して／佳識」

［画中色指示］
（第三紙塗士）モン／カリカネ」
（第四紙機織）シン／スミ」
（第五紙檜物師）ソテ」ハカマ」
（第五紙車作）上下／青」
（第六紙鍋売）ヲモタカ／スチモン」
（第九紙小原女）スミ／スミ」スミ／スミ／
スミ」
（第九紙馬飼）白」
（第九紙皮売）白／ケスミ」
（第十紙山人）白」
（第十一紙樵）白」
（第十四紙魚売）モンミル」
（第十五紙挽入売）こき」白」
（第十六紙紙漉）白」
（第十九紙御廉編）アサキ」



8　七十一番職人歌合　（別三―二）

紙本墨画　一巻　二六二×七九一七

慶長一四年（一六〇九）

土佐光吉

（第一紙白文方印）［不読］

（第十九・二十紙継目白文双龍文郭方印）画院待／詔之印」

（尾紙白文方印）欣魚／洞主」

二十一紙継、尾紙（二六三×一一九）

（第一紙表書）光信画圖／職人百番歌合之圖

□（ヤブレ）／畫院□（ヤブレ）」

（第二紙墨書）□（不読）人」一ふく一せん」人数五十一」

（第三紙墨書）せんし／物うり」ざとう」女めくら」

（第四紙墨書）ふつし」きゃうし」

（第五紙墨書）まき繪し」貝すり」繪（スミケシ）、所」繪所」

（第六紙墨書）かむりつくり」まりくくり」

（第七紙墨書）くつつくり」たち君」けし／からすや」よく見申／さむ」きよれにて／いらせ／給へ」

（第八紙墨書）つし君」や上らふいらせ給へ」ゐ中人にて候」みしりまいらせて／候そいらせ給へ」白かねさい／く」

（第九紙墨書）はくうち」はりすり」しゆずや」

（第十紙墨書）へにとき」か、みとき」くすし」

（第十一紙墨書）おんやうし」こめうり」まめうり」

（第十二紙墨書）いたか」なかれかん／ちゃうそとは／と申ハ大日によい乃／さまやきやう」えつた」

（第十三紙墨書）たうふうり」

（第十四紙墨書）そうめんうり」しほうり」

かうし／うり」
（第十五紙墨書）とうしみうり」一文しうり」
御よふや」さふらふ」
（第十六紙墨書）藏まハり」御つかひ物〳〵」
いかた／さし」
（第十七紙墨書）くしひき」枕うり」たたみ／
さし」
（第十八紙墨書）瓦やき」か、わのかま」か
さぬい」さやまきり」
（第十九紙墨書）くらさい／く」玉すり」
（第二十紙墨書）硯きり」此かさほこわい／
此人にツき候也」とう人」土佐久翌」
（第二十一紙墨書）とり」慶長拾四年　九月
吉日これヲウ／ツス也」三まきの内」
（尾紙墨書）この巻ハ土佐光輝氏之御蔵品
の／一也／昭和二十九年十二月／佳一記」

［画中色指示］
（第三紙煎じ物売）アサキ」
（第三紙座頭）クロシ」
（第五紙絵所）白」アサキ」
（第六紙冠造）スミ」アサキ」
（第八紙銀細工）ハカリ」
（第十紙鏡研）サクロ」ミツカネ」
（第十紙薬師）白」クロシ」
（第十一紙陰陽師）アサキ」六」白」
（第十一紙米売）こめ」
（第十二紙豆売）まめ」
（第十二紙いたか）アサキ」白」
（第十四紙索麺売）白」
（第十四紙麹売）ウスシ／ワウ」カウシク
サ／ノシルニテ／ツク」
（第十五紙燈心売）クサノシル」白」
（第十五紙一文字売）白／白／白／白」白／
コラ／ハイ」ウラ／アサキ」
（第十九紙玉磨）白」
（第二十紙暮露）白／コン」

9　七十一番職人歌合　（別三―三）

紙本墨画　一巻　二六二×七四一七

慶長一四年（一六〇九）

土佐光吉

（第一紙・第十九紙白文双龍文郭方印）画院待／詔之印」

（尾紙白文方印）欣魚／洞主」

十九紙継ぎ、尾紙（二六二×一二二）

（第一紙裏墨書）□□人」（不読）

（第一紙墨書）人数四十一」文者」弓とり」

運は天に有／命ハ儀によりて／かろし」

運ハ天にあり／命ハ義に（スミケシ）／よりてかろし」

（第二紙墨書）しらひやうし」ところ〳〵にひく水ハ／山田の井と／のなはし／ろ」くせまい」しら、ひやうし（スミケシ）、」舞／月にはつらきをくら山その名ハ／かくれさりけり」

こんしやうの／すいかん下／小袖ハ／すかすなり」

（第三紙墨書）はうか」うつつなの／まよひ／や」はちたたき」昨日見し人／けふとへは」てんかく」

（第四紙墨書）猿かく」あけまきや／とんとうひろ／はかりやとんとう」ぬい物し」ぬい物ハそめ地に」ぬふほとに／をそくて」くみし」

（第五紙墨書）すりし」梅の花／はかり／するほとにやすき」たとうかミ／うり」手はこ賣」

（第六紙墨書）かはこつくり」矢さいく」えひらさいく」さかつらかなくて／柳えひらに／する」

（第七紙墨書）ひきめくり」一尺にあまる／御ひきめハくり／にくくて道か／ゆかぬ」むかはき／つくり」けいろも／よし」

（第八紙墨書）金ほり」水かね／ほり」はうちゃう」

（第九紙墨書）ちゃうさいまん」布賣」たか／はかり」ひたゝれうり」

（第十紙墨書）をうり」わたうり」たき物うり」

（第十一紙墨書）くすりうり」山ふし」これは出羽／のは黒山」地しや」あらおんかな〳〵／二所みし／まも／御らん／せよ」

（第十二紙墨書）ねき」たかまのはらに／神と、まり／まし〳〵て」かんなき」柳はや／たち／まふ／袖乃／をひ／風に」けいはくみ」

（第十三紙墨書）すまふとり」禅しう」口を／ひらかすしてとひ来」律家」念佛宗」南無とへハ／なにのうたかひか／あらん」

（第十四紙墨書）法花宗」日れん上人の御時」れんかし」いまたこの／なもくにハ花か／たゝす候」

（第十五紙墨書）うたいゝ、」ひくに」へちてん／にてハ／そろはし」にしう」くわん念と申／すは」山法師」

（第十六紙墨書）ならほうし」けんごんじゅう」

（第十七紙墨書）くしやじゆう（スミケシ）」楽人」

（第十八紙墨書）伶人」れん人（スミケシ）」すつくり」心ふとうり」土佐久翌」

（第十九紙墨書）とり／慶長拾四年九月吉日これヲ／ウツス也」三まきの内」

（尾紙墨書）この巻ハ土佐光輝氏の襲蔵／品之一也／昭和二十九年十二月表装に／際して／佳識」

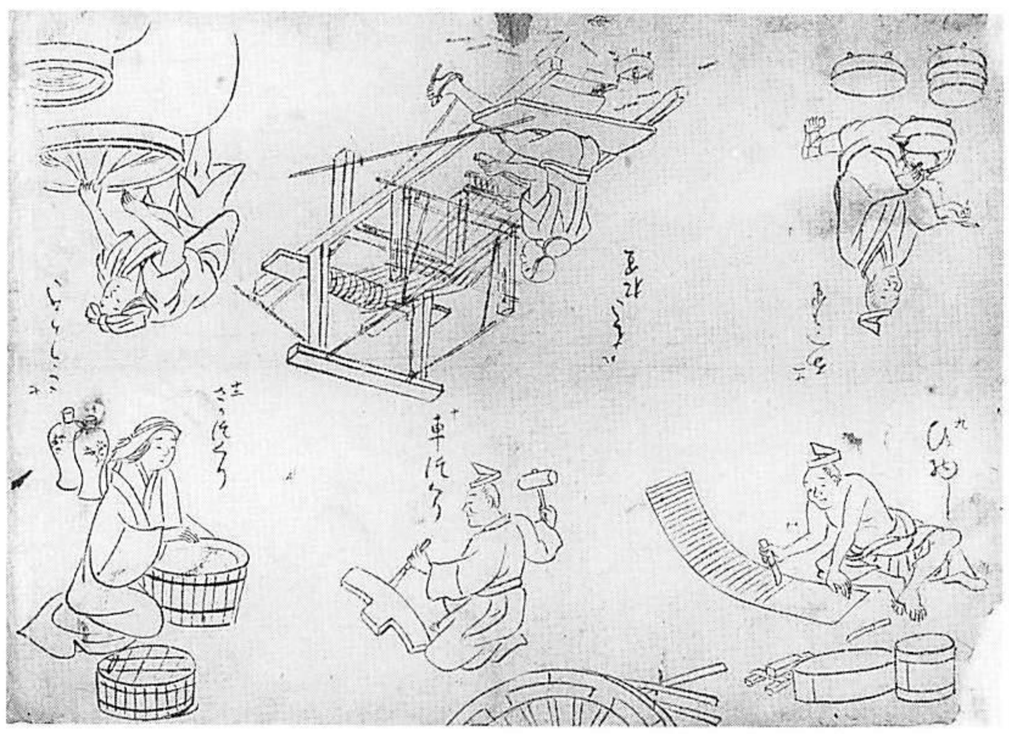
［画中色指示］

（第一紙文者）アカシ／六／こん／白」こん／スミ」

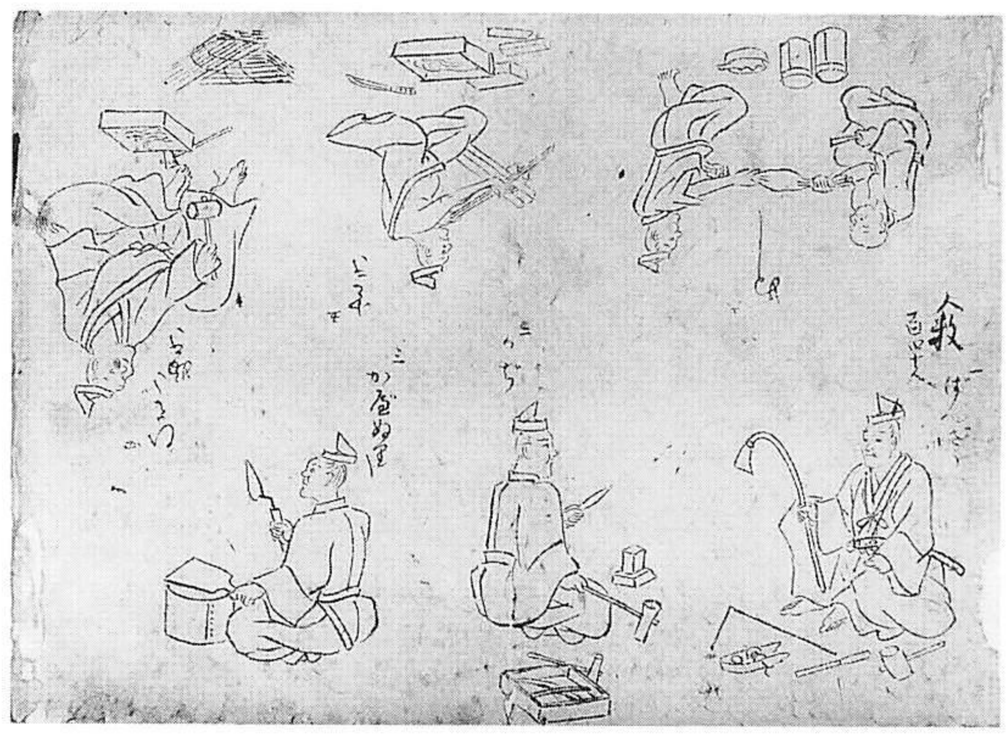
（第一紙弓取）エンシ／コン上／エンシ」つるぬり」

（第二紙白拍子）アカシ」

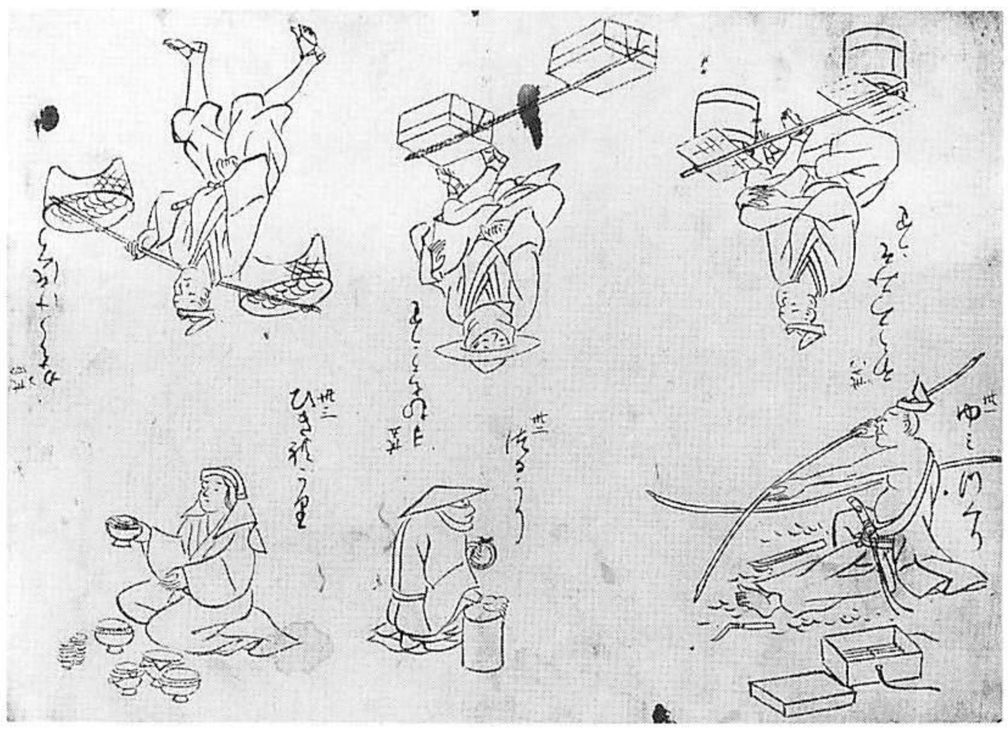
（第二紙曲舞々）白」
（第三紙放下）六」モンリウコ」ハカマ／アカシ」
（第三紙鉢叩）アサキ」
（第三紙田楽）白／アカシ／わうとく／エンシ／アカシ／白／白」
（第四紙猿楽）ムラサキ」
（第四紙縫物師）白」
（第四紙組師）ハシラ」コモン／アサキ」
（第五紙摺師）白／白／白／白」此もん／ろう／さう」ろうさう」
（第六紙箙細工）」こん上／しゆ」こん」しゆ」しゆ」
（第七紙行縢造）白」こん」白」
（第八紙金堀）白」
（第八紙水銀堀）白」
（第八紙包丁）アサキ」
（第九紙布売）白／白／白／白」
（第十紙綿売）白／白／白」
（第十一紙薬売）はかり」
（第十一紙山伏）カキイロ」こん」
（第十一紙地者）アカシ／白泥／白」
（第十二紙祢宜）ヲヒ」
（第十二紙競馬組）スチ／六／コン／白ト／三イロ／ニテ候」アカシ」朱」ホシスミ」タン」
（第十三紙相撲取）白」
（第十三紙禅宗）白」ろうさう／ひく」
（第十三紙念仏宗）シハウ」白」
（第十四紙法華宗）ふんたい／すミ」泥」ウスア／サキ」白」
（第十五紙比丘尼）色スミ／モンモ」コロモ上／ろうそうヒク」白」
（第十五紙尼衆）あさき」白」
（第十五紙山法師）白」白テイ」白」
（第十六紙奈良法師）白」
（第十六紙華厳宗）イシヤウニミナスミタミアリ」朱」シワウ／スミ／アカシ／スミ／アカシ」
（第十七紙倶舎宗）白／白／白／アサキ」
（第十八紙伶人）アカシ／六／タン」此ヒシ／キンテ／イ」コキエンシ」ハタウスエンシ」白」アカシ」アカシ」クロシ」白」アカシ／六／白」



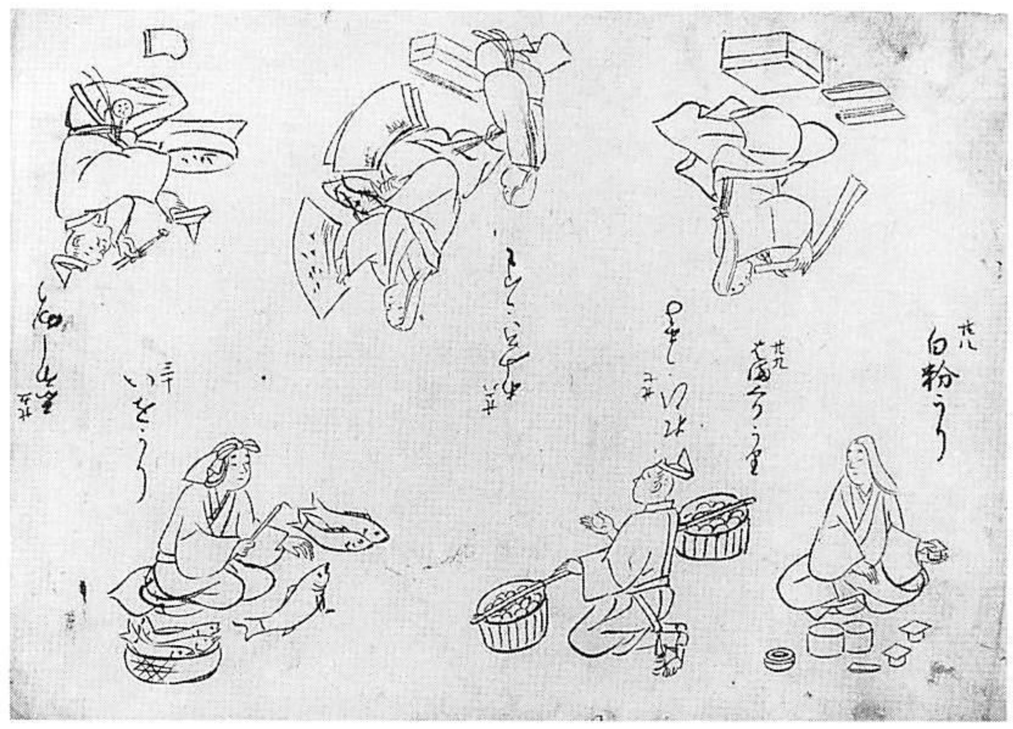
(第二紙)



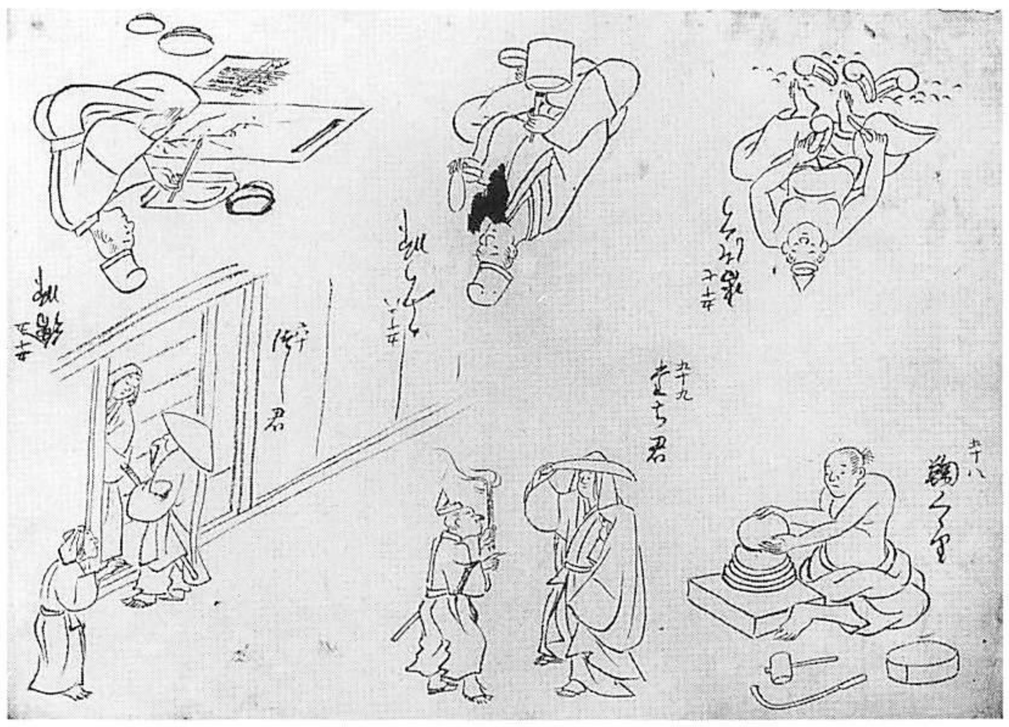
(第一紙)



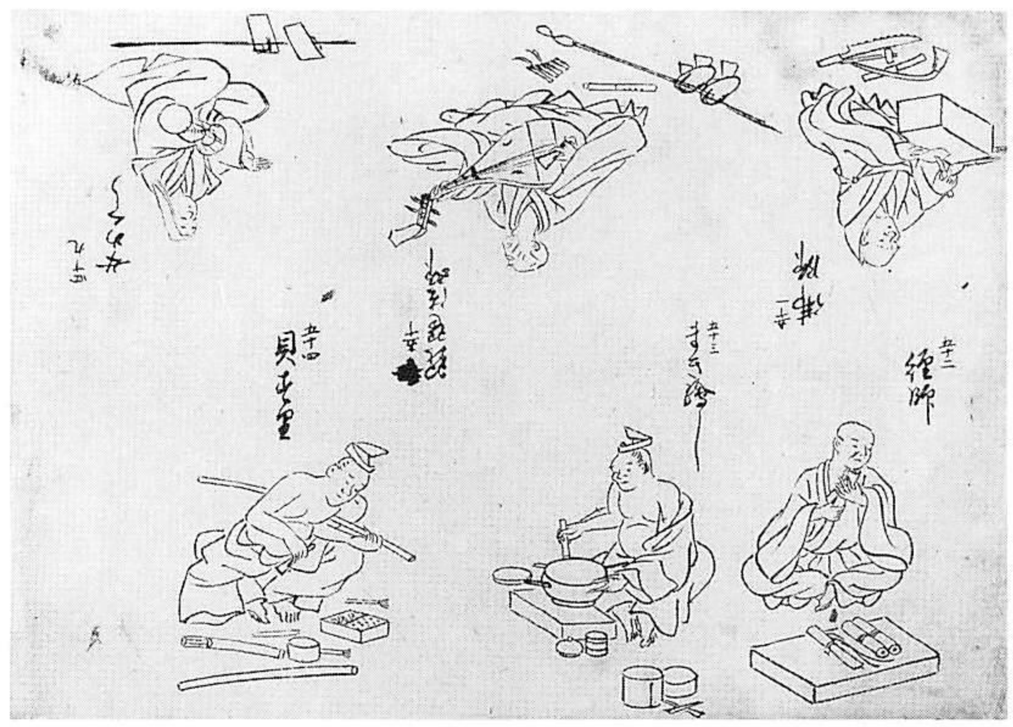
(第六紙)



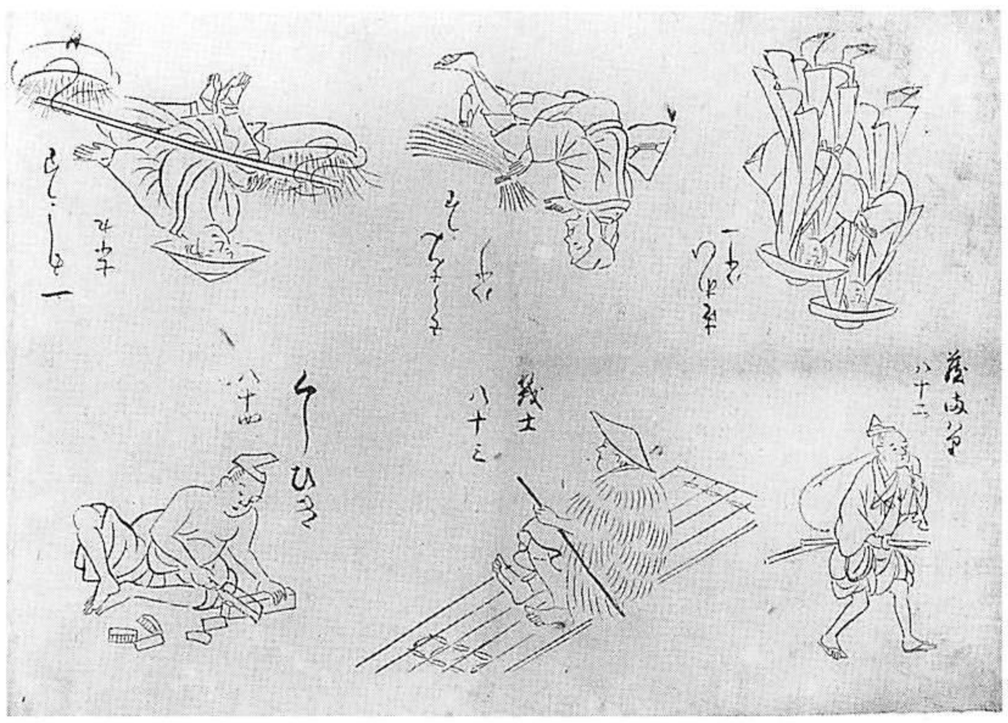
(第五紙)



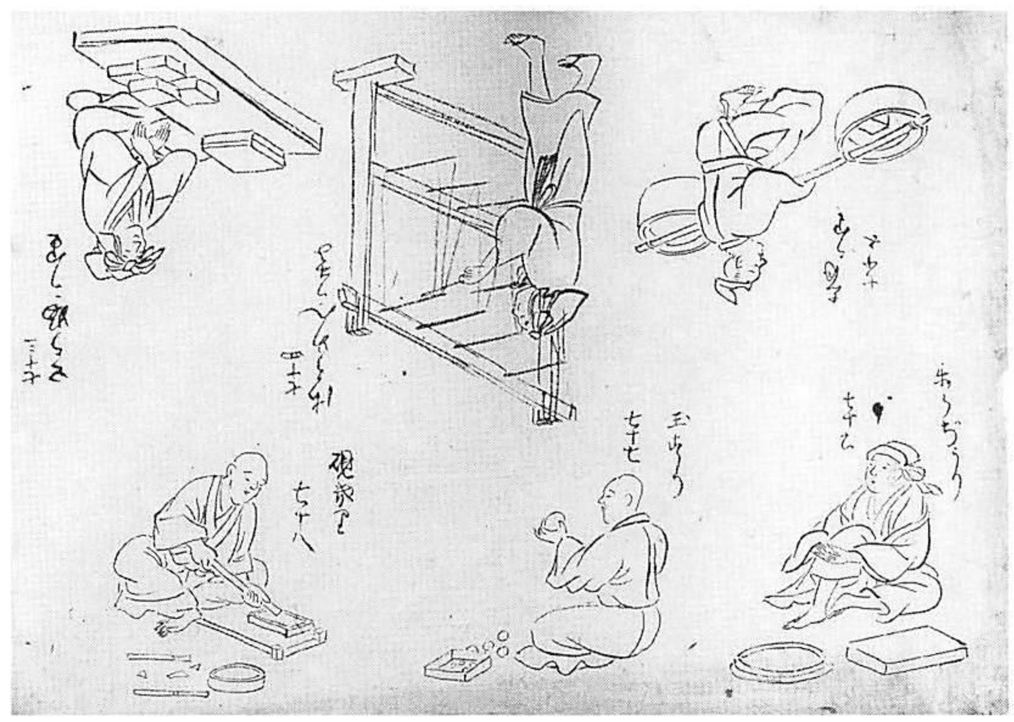
(第十紙)



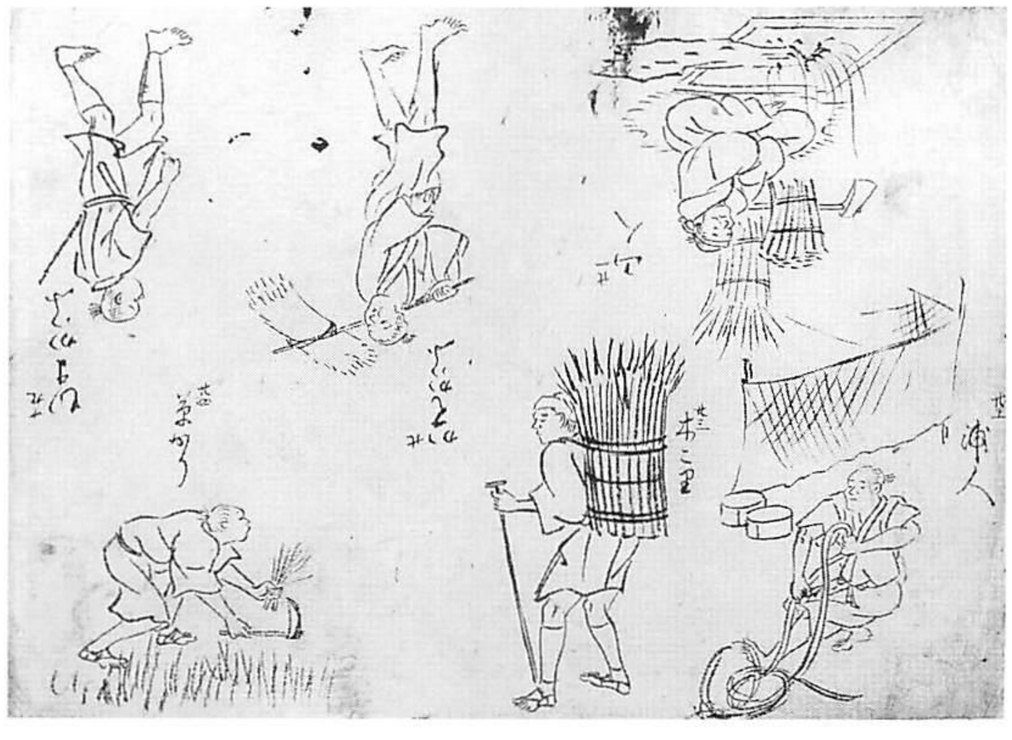
(第九紙)



(第十四紙)

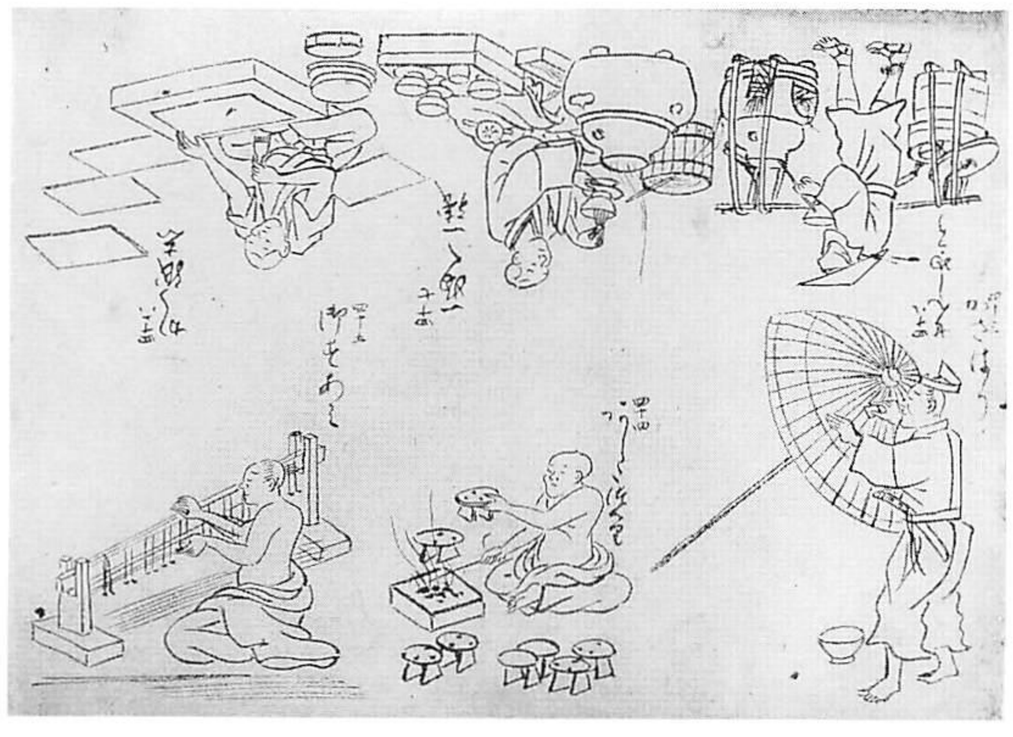


(第十三紙)

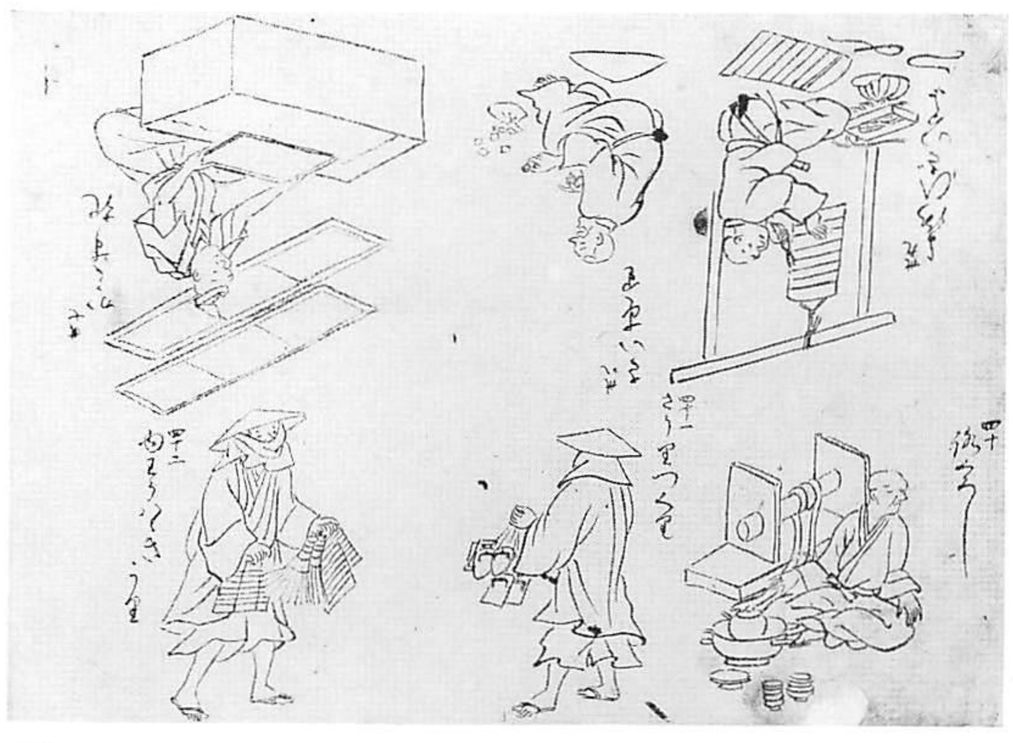


(第四紙)

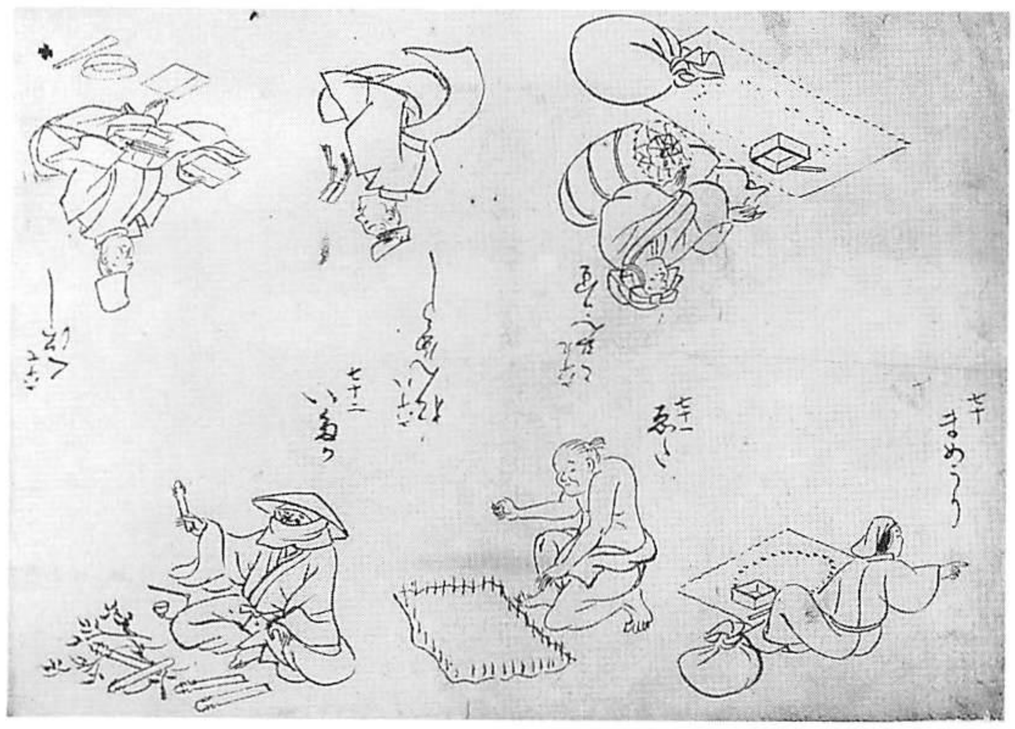
(第三紙)



(第八紙)

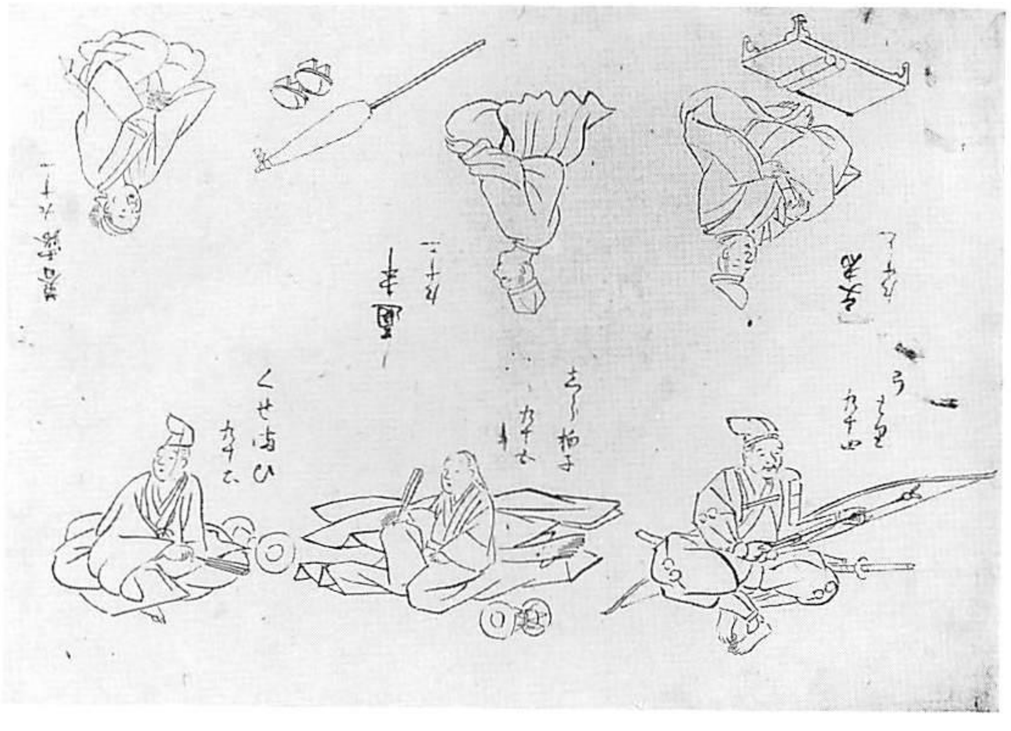


(第七紙)

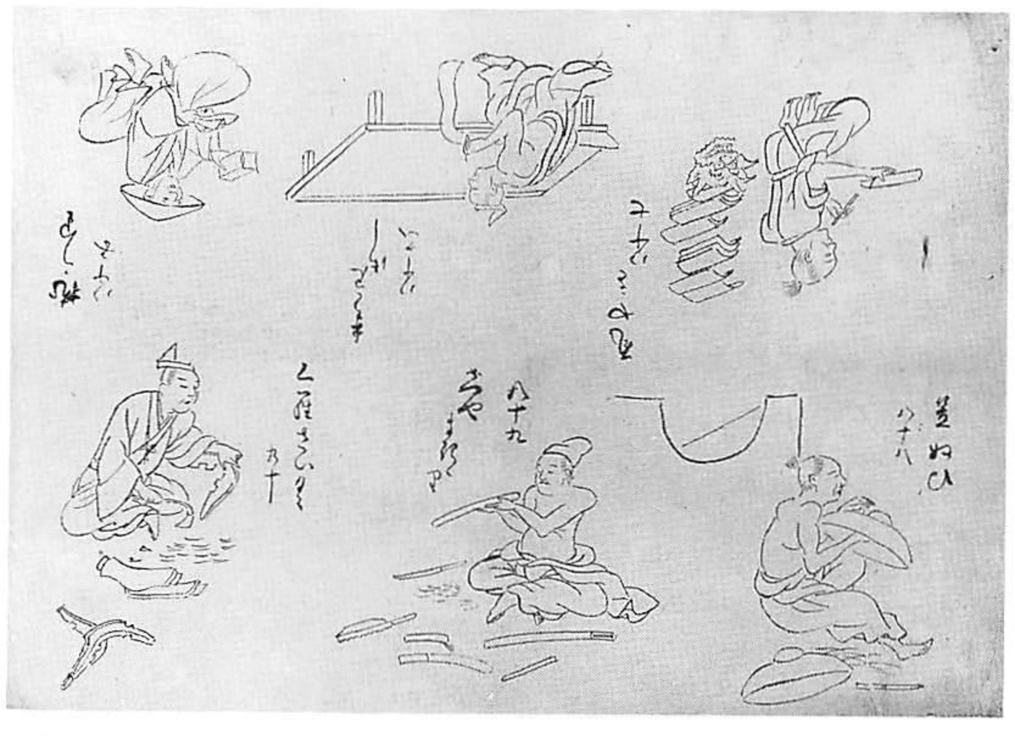


(第十二紙)

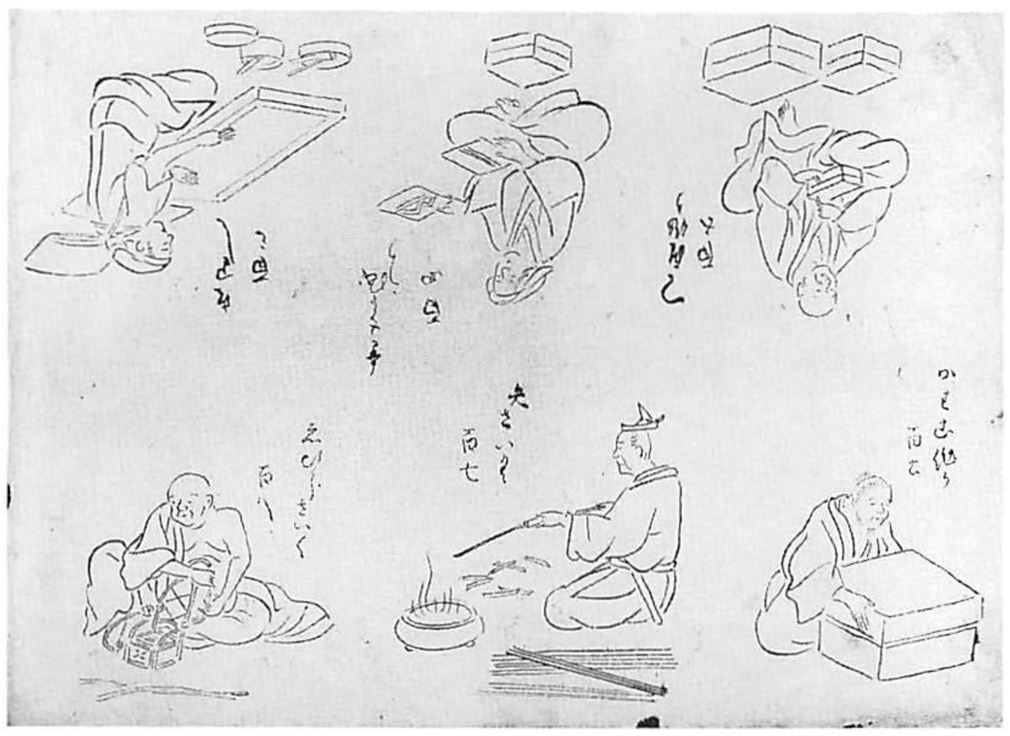
(第十一紙)



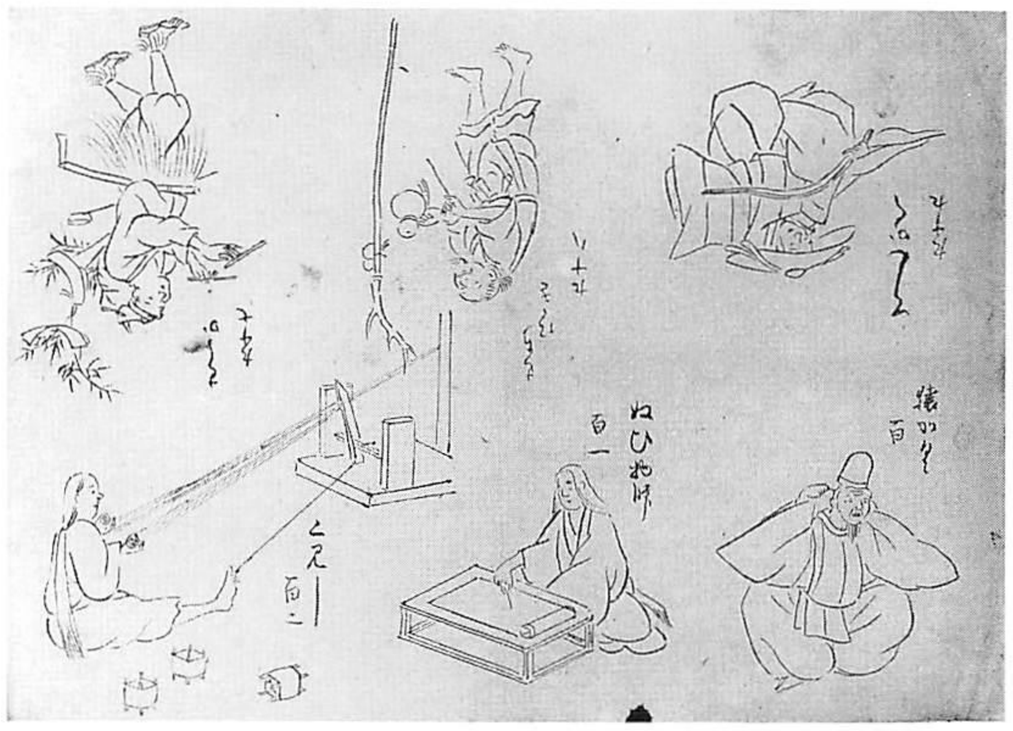
(第十六紙)



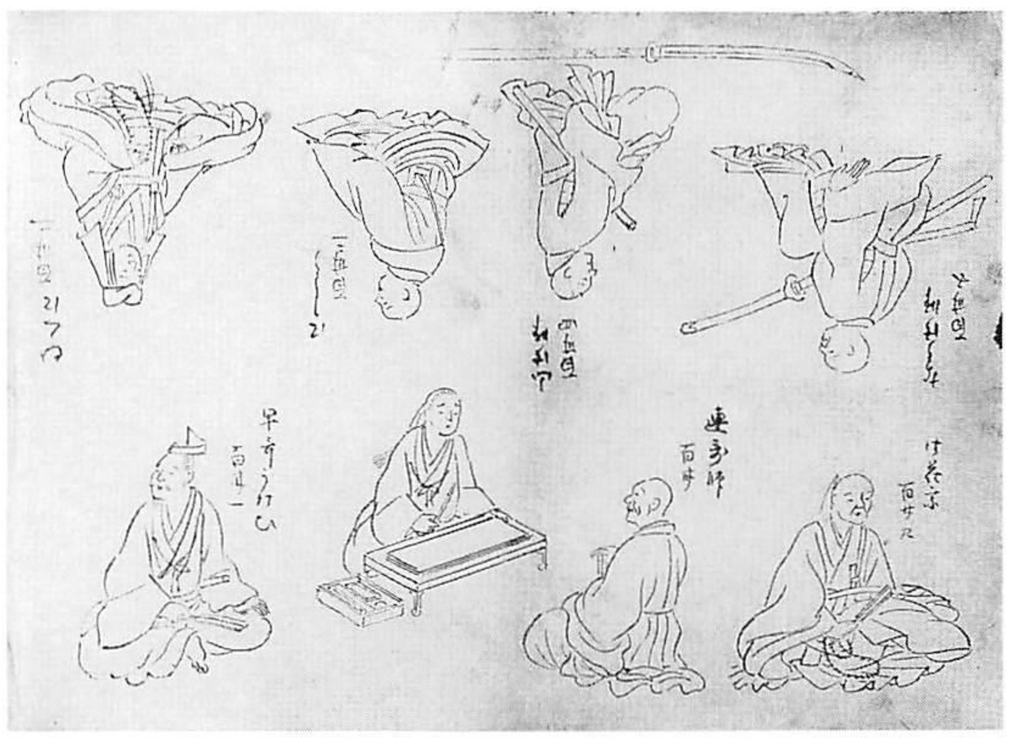
(第十五紙)



（第十八紙）



（第十七紙）



（第二十二紙）

（第二十一紙）

10　七十一番職人歌合　（一九〇）

紙本墨画　一帖　二四二×三三七

二三紙、こよりにて右端二つ綴じ

（第一紙上段墨書）人数／百四十人」一／ばんざう」二／かぢ」三かべぬり」

（第一紙下段墨書）四／ひはだ／ふき」五／とき」六／ぬし」

（第二紙上段墨書）九／ひもし」十／車つくり」十二／さかつくり」

（第二紙下段墨書）七／こうかき」八／はた／おり」十一／なへうり」

（第三紙上段墨書）十三／あふらうり」十四／もちい／うり」十五／筆ゆひ」

（第三紙下段墨書）十六／むしろうち」十七／すみやき」十八／おはらめ」

（第四紙上段墨書）廿二／浦人」廿三／木こり」廿四／草かり」

（第四紙下段墨書）十九／むまかハふ」廿／かはかハふ」廿一／山人」

（第五紙上段墨書）廿八／白粉うり」廿九／はまくりうり」三十／いをうり」

（第五紙下段墨書）廿五／えぼしおり」廿六／あふきうり」廿七／おひうり」

（第六紙上段墨書）卅一／ゆみつくり」卅二／つるうり」卅三／ひきれうり」

（第六紙下段墨書）卅四／かはらけつくり」卅五／まむちううり」卅六／ほうろみそ／うり」

（第七紙上段墨書）四十／ろくろし」四十一／さうりつくり」四十二／ゆわうハゝき／うり」

（第七紙下段墨書）卅七／かミすき」卅八／さいすり」卅九／よろひざいく」

（第八紙上段墨書）四十三／かさはり」四十四／あしたつくり」四十五／みすあみ」

（第八紙下段墨書）四十六／から紙し」四十七／一ふく一銭」四十八／せんし物うり」

（第九紙上段墨書）五十二／経師」五十三／まき繪し」五十四／貝すり」

（第九紙下段墨書）四十九／女めくら」五十／琵琶法師」五十一／佛師」

（第十紙上段墨書）五十八／鞠くくり」五十九／たち君」六十／つし君」

（第十紙下段墨書）五十五／繪師」五十六／かふり師」五十七／沓つくり」

（第十一紙上段墨書）六十四／念珠ひき」六十五／へにとき」六十六／かかみとぎ」

（第十一紙下段墨書）六十一／白かねさいく」六十二／はくうち」六十三／はりすり」

（第十二紙上段墨書）七十／まめうり」七十一／えた」七十二／いたか」

（第十二紙下段墨書）くすし」六十八／おんやうし」六十九／こめうり」

（第十三紙上段墨書）七十三／とうふうり」七十四／さうめんうり」しほうり」七十五」

（第十三紙下段墨書）かうぢうり」七十六」玉すり」七十七」硯きり」七十八」

（第十四紙上段墨書）蔵まハり」八十二」筏士」八十三」くしひき」八十四」

（第十四紙下段墨書）一もしうり」七十九」とうしん」うり」八十」すあひ」八十一」

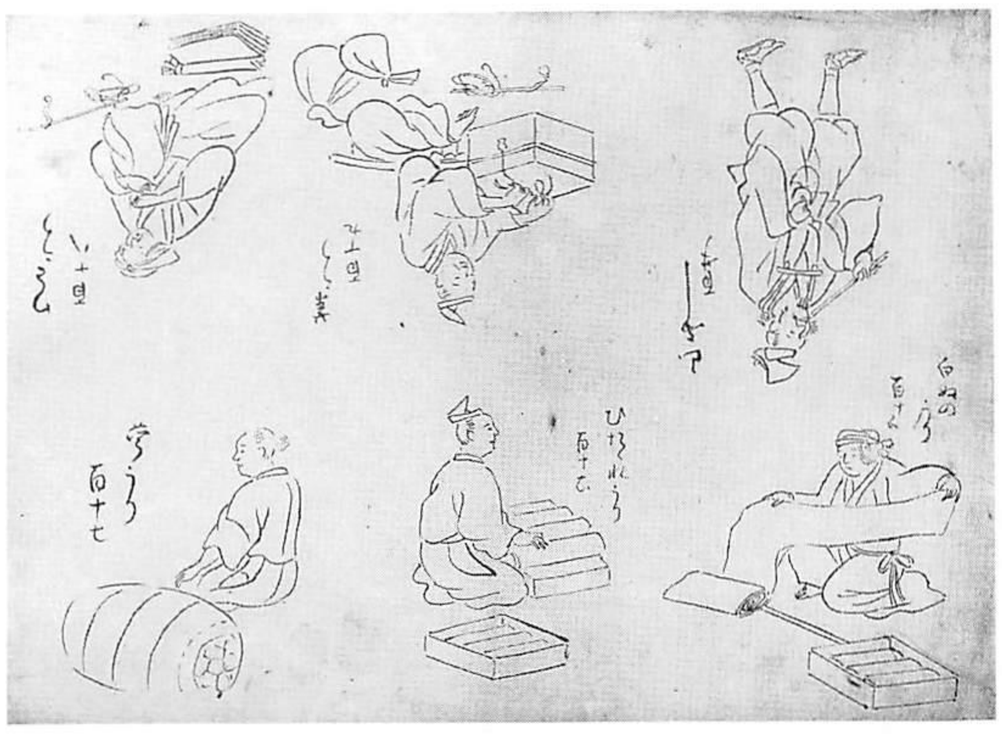
（第十五紙上段墨書）笠ぬひ」八十八」八十九」さやまきゝり」くらさいく」九十」

（第十五紙下段墨書）枕うり」八十五」たゝみ」さし」八十六」瓦やき」八十七」

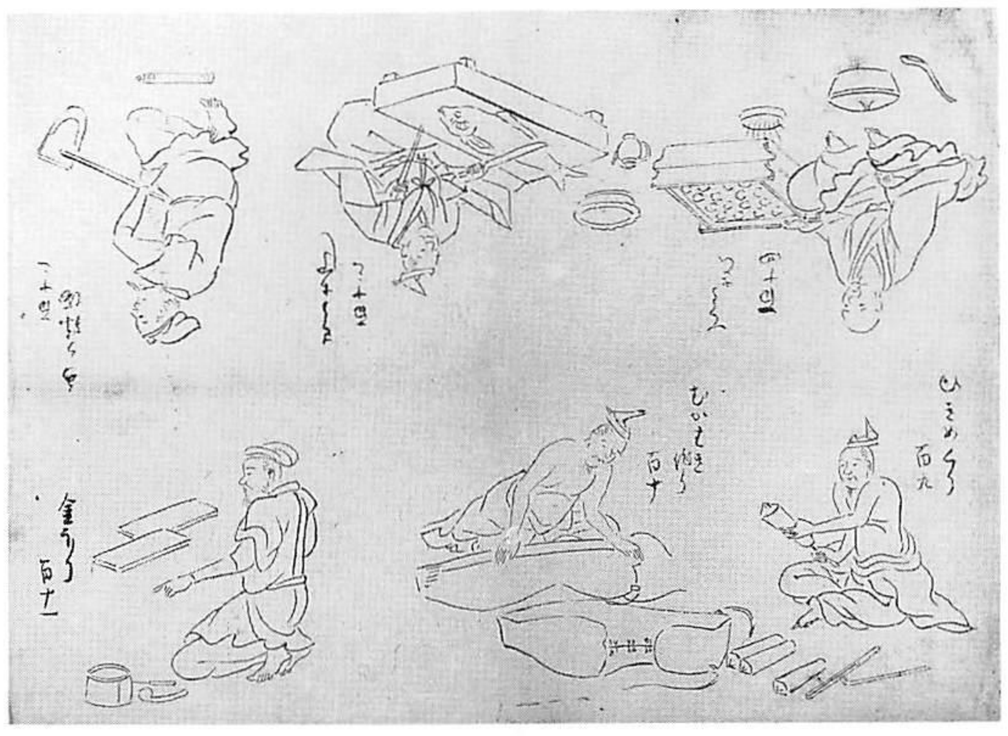
（第十六紙上段墨書）弓」とり」九十四」しら」拍子」九十五」くせまひ」九十六」

（第十六紙下段墨書）暮露九十一」通事」九十二」文者」九十三」

（第十七紙上段墨書）猿かく」百」ぬひ物師」百一」くみし」百二」



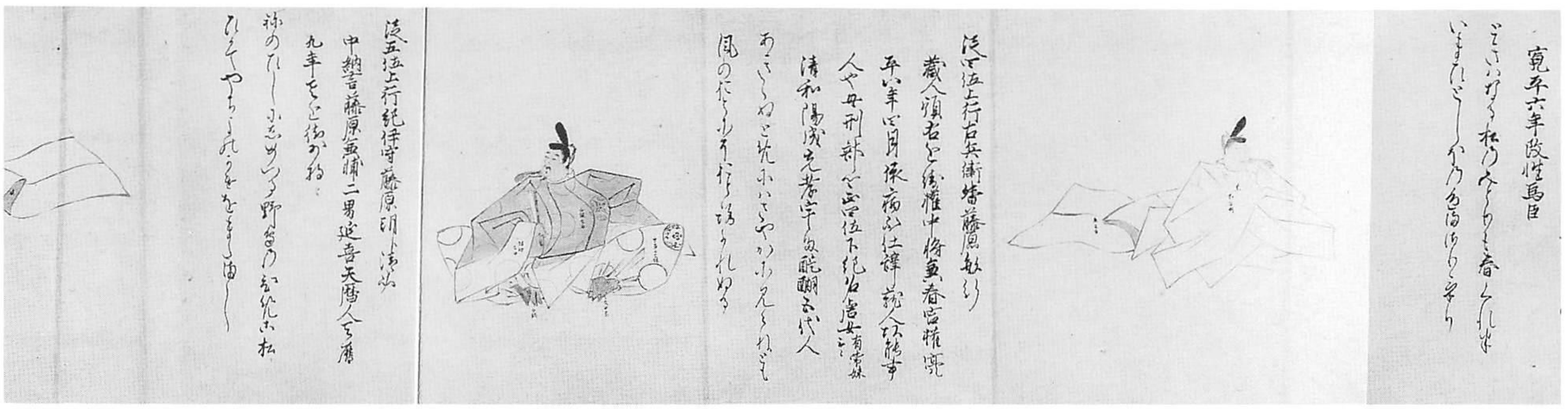
(第二十紙)

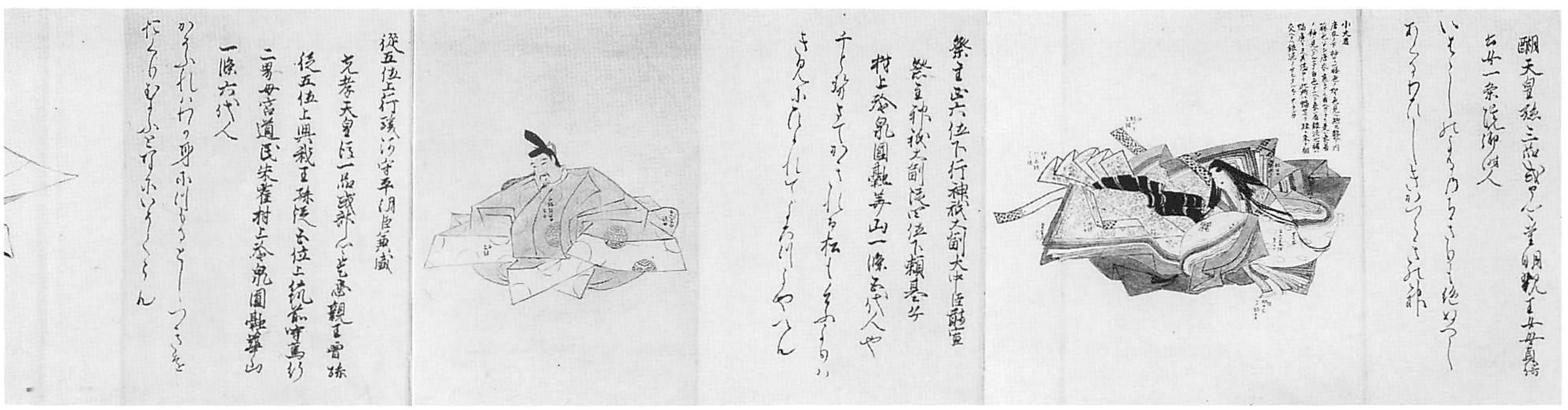


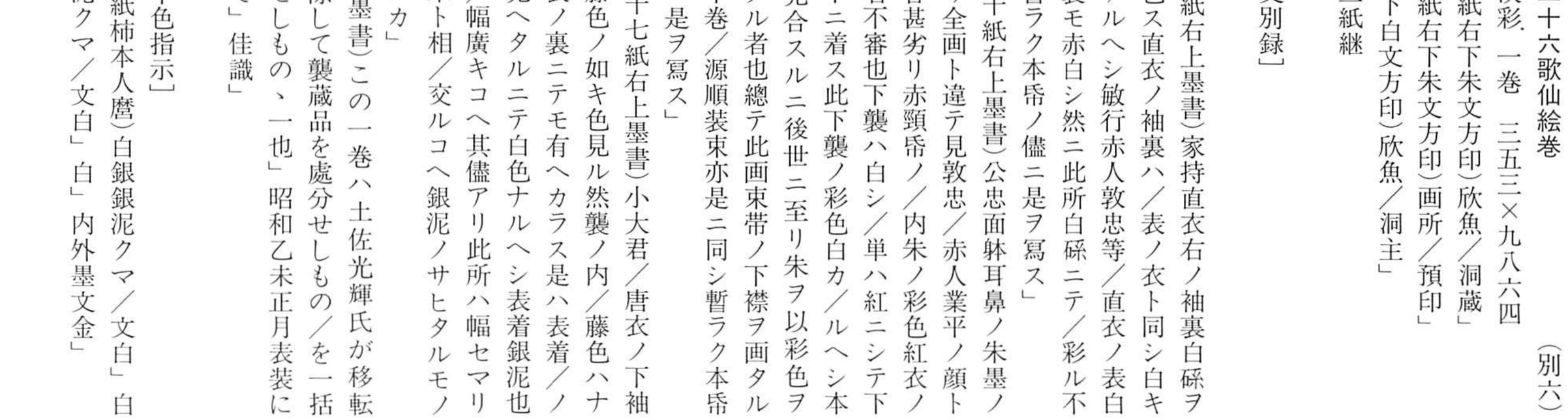
(第十九紙)

(第二十三紙)

(第十七紙下段墨書)はうか／九十七」はち／たゝき／九十八」てんかく／九十九」
(第十八紙上段墨書)かはこ作り／百六」矢さいく／百七」えひらさいく／百八」
(第十八紙下段墨書)すりし／百三」たとう紙／うり／百四」つゝら作り／百五」
(第十九紙上段墨書)ひきめくり／百九」むかはき／作り／百十」金ほり／百十一」
(第十九紙下段墨書)百十二／水かね掘」はうちやうし／百十三」てう／さい／百十四」
(第二十紙上段墨書)白ぬの／うり／百十五」ひたゝれうり／百十六」芋うり／百十七」
(第二十紙下段墨書)わたうり／百十八」薬／うり／百十九」山ふし／百廿」
(第二十一紙上段墨書)百廿五／すまふとり」禅宗／百廿六」律家／百廿七」念佛宗／百廿八」
(第二十一紙下段墨書)地しゃ／百廿一」ねき／百廿二」かんなき／百廿三」百廿四／けいはくみ」
(第二十二紙上段墨書)法花宗／百廿九」連哥師／百卅」早哥うたひ」
(第二十二紙下段墨書)ひくに／百卅二」にしう／百卅三」山法師／百卅四」なら法師／百卅五」
(第二十三紙上段墨書)けこん宗／百卅六」くしや宗／百卅七」楽人／百卅八」
(第二十三紙下段墨書)すつくり／百四十」心ふと／うり／百四十一」







11　三十六歌仙絵巻　（別六）

紙本淡彩　一巻　三五三×九八六四

（第一紙右下朱文方印）欣魚／洞蔵」

（第三紙右下朱文方印）画所／預印」

（尾紙下白文方印）欣魚／洞主」

四十三紙継

［本文別録］

（第七紙右上墨書）家持直衣右ノ袖裏白碎ヲ以彩色ス直衣ノ袖裏ハ／表ノ衣ト同シ白キ彩色ナルヘシ敏行赤人敦忠等／直衣ノ表白ク袖裏モ赤白シ然ニ此所白碎ニテ／彩ル不審也暫ラク本帋ノ儘ニ是ヲ寫ス」

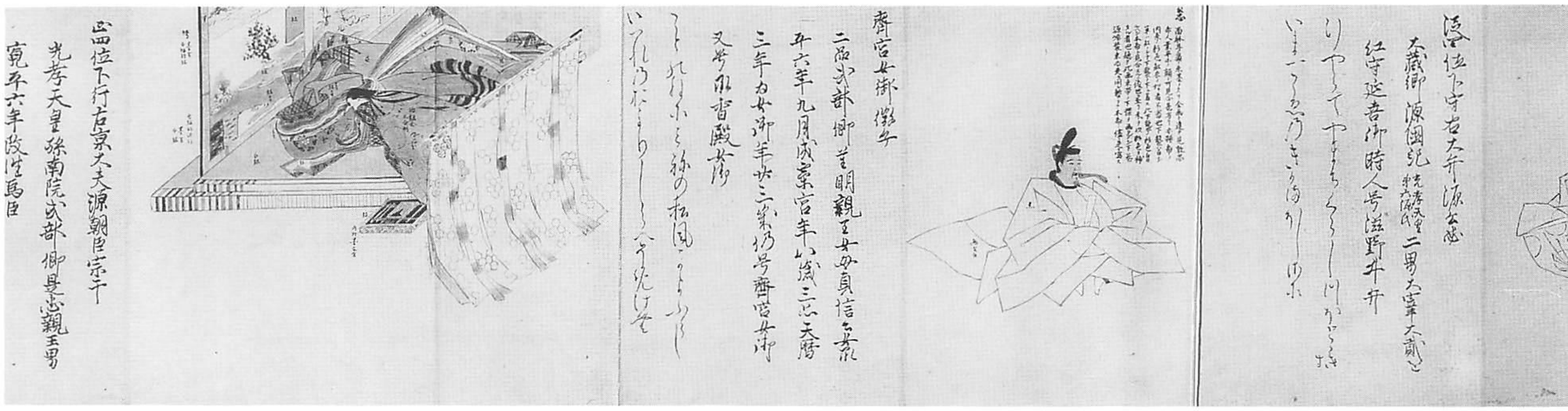
（第二十紙右上墨書）公忠面躰耳鼻ノ朱墨ノ／ク、リ全画ト違テ見敦忠／赤人業平ノ顔ト可見合甚劣リ赤頸帋ノ／内朱ノ彩色紅衣ノ如キ者不審也下襲ハ白シ／単ハ紅ニシテ下襲ノ下ニ着ス此下襲ノ彩色白カ／ルヘシ本帋ト見合スルニ後世ニ至リ朱ヲ以彩色ヲ補／タル者也總テ此画束帯ノ下襟ヲ画タルナシ下巻／源順装束亦是ニ同シ暫ラク本帋ノ儘ニ是ヲ寫ス」

（第三十七紙右上墨書）小大君／唐衣ノ下袖口ニ藤色ノ如キ色見ル然襲ノ内／藤色ハナシ唐衣ノ裏ニテモ有ヘカラス是ハ表着／ノ袖ノ見ヘタルニテ白色ナルヘシ表着銀泥也裾ハ／幅廣キコヘ其儘アリ此所ハ幅セマリ殊ニ朱ト相／交ルコヘ銀泥ノサヒタルモノナランカ」

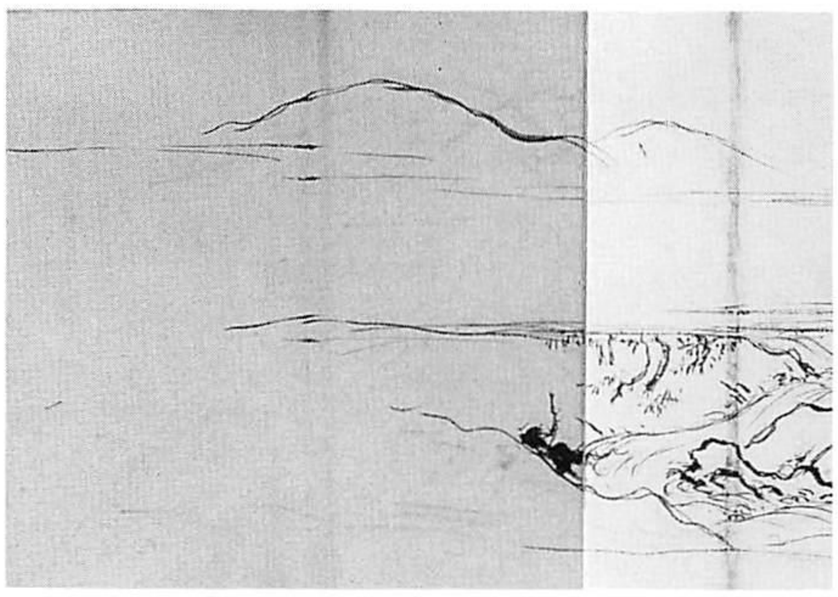
（尾紙墨書）この一巻ハ土佐光輝氏が移転に／際して襲蔵品を處分せしもの／を一括購入せしもの、一也」昭和乙未正月表装に際して」佳識」

［画中色指示］

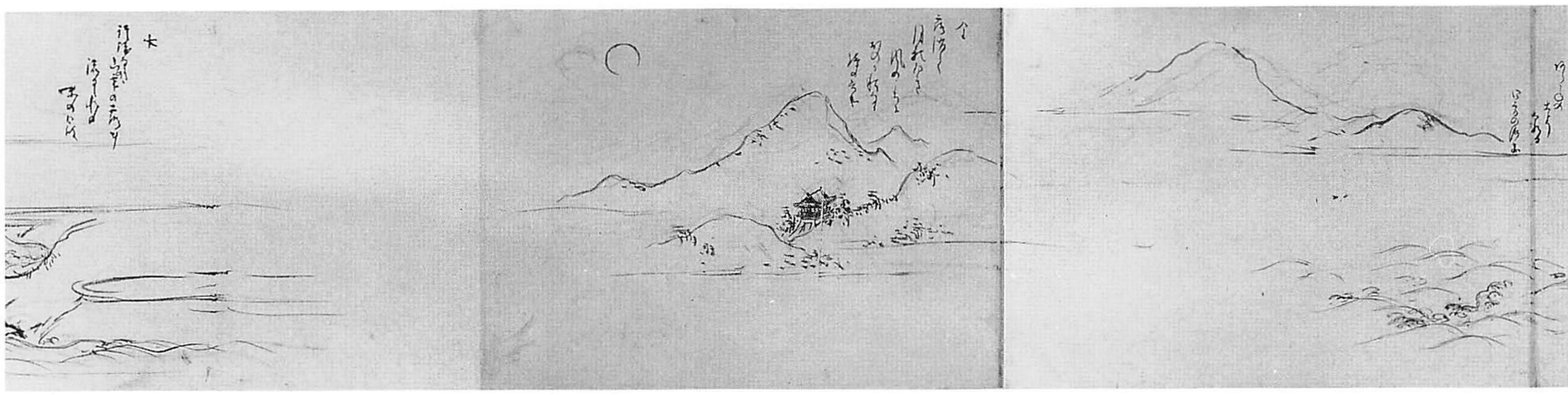
（第三紙柿本人麿）白銀銀泥クマ／文白」白銀銀泥クマ／文白」白」内外墨文金」



(第五紙凡河内躬恒)黒」無文白」具」
(第七紙大伴家持)白銀文白」白文銀」白メ黄土／銀泥クマ／文銀」菱銀泥／地黄土」
(第九紙在原業平)銀泥クマ／文白」白／文白」白(录)銀クマ」亀甲白／地黄土」
(第十一紙素性法師)地艸／銀泥曲」銀泥」白録／泥クマ」文銀泥」黄土」
(第十三紙猿丸大夫)目内金クヽリ」黒」無文白」
(第十五紙藤原兼輔)黒」具」無文白」
(第十八紙藤原敦忠)白メ黄土銀泥曲／文白」上同」六」
(第二十紙源公忠)黒」無文白」
(第二十二紙斎宮女御衣装)地録文／不分明」白六」文金」クヽリ／紺青」具」具」白六」ギン」銀」
(第二十二紙斎宮女御同障子)録」録」紺青」軍」袴／黒金／白梅鉢銀」色紙形泥引／墨／金／白／銀」
(第二十二紙斎宮女御同畳)白録」
(第二十二紙斎宮女御同硯箱)銀」内外墨文金」
(第二十五紙源宗于)黒／不分明」無文白」
(第二十七紙藤原敏行)白銀／文白」銀地／文白」白メ黄土文銀」文屮茶」白録」
(第三十紙藤原清忠)黒」無文白」具」
(第三十三紙藤原興風)黒」無文白」具」
(第三十五紙坂上是則)地銀／文茶ノ具」白録銀泥曲／無文」菱金」
(第三十七紙小大君)墨茶」文花菱紺／葉キン」フシ」録文屮」銀／地白文」白／録クヽリ／文銀」地銀／文白」
(第三十八紙小大君)地白／竹ノ画録／クヽリ銀」重金泥クヽリ」
(第四十紙大中臣能宣)白録銀泥曲／文白」白／文銀」白六文白／泥曲」
(第四十三紙平兼盛)黒」無文白」具」



東
西
西
西



12　五行歌絵巻　（二二一）

紙本墨画　一巻　二八六×二七六〇

六紙継、焼筆あり

（第一紙端裏墨書）五行圖」

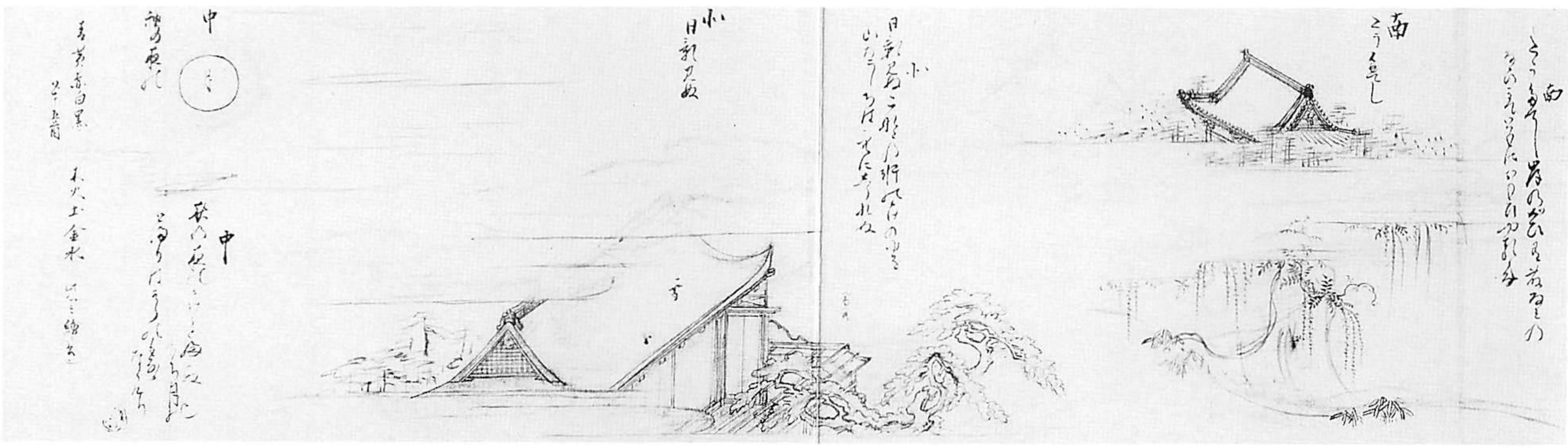
（第二紙墨書）木」國とめる民の／かまとの烟にも／外山の木、の／もとそ／しらる、」火」ふかき夜の道に／さきたつ／松の火に／ひかりを／おくる契斗や」

（第三紙墨書）ま（まつ此所へヨセテ」涌そめし／はしめも／しらす／あらかねの／土より／なれる」

（第四紙墨書）四方の海山」

（第五紙墨書）金」露消て／月影白き／風のうちに／おのか秋なる／鐘の音哉」

（第六紙墨書）水」行えなき／山の雫の露斗／流る、水の／末の白波」



13　方角歌絵巻　（二五一―一）

紙本墨画　一巻　二六八×一八五五

（第一紙右下・第六紙左下重郭六角墨印）［不読］

六紙継、胡粉修正あり、焼筆あり

（第一紙右端裏墨書）定家卿方ガクノ哥」

（第一紙墨書）方角之歌」東／朝日さす岸の青柳うちなひき／春くる方は先しるきかな」日」

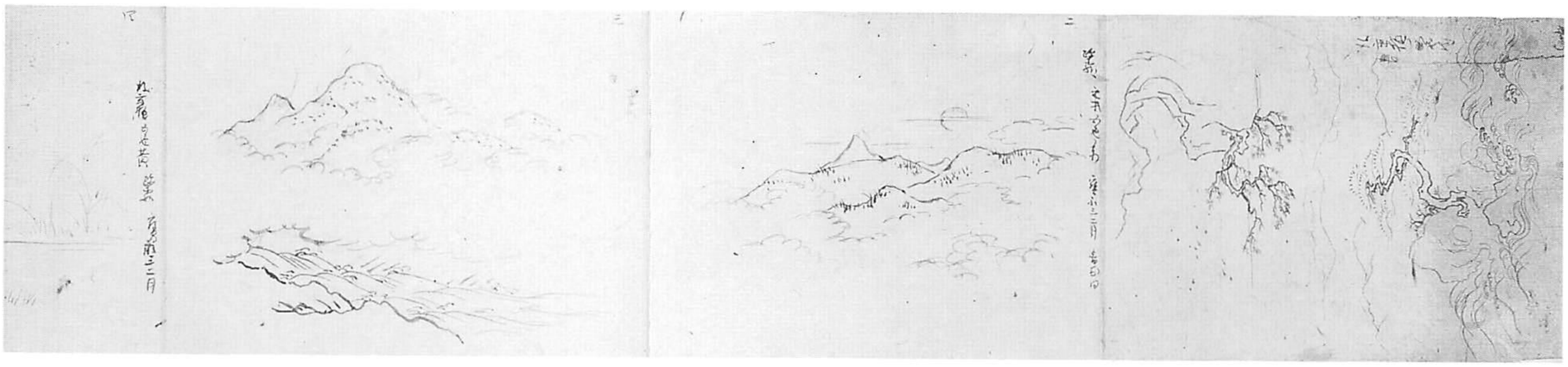
（第二紙墨書）東」朝日さす」春ノ柳」西」都よりたつね来野、花す、き／ほのかにてらみかつきの空」

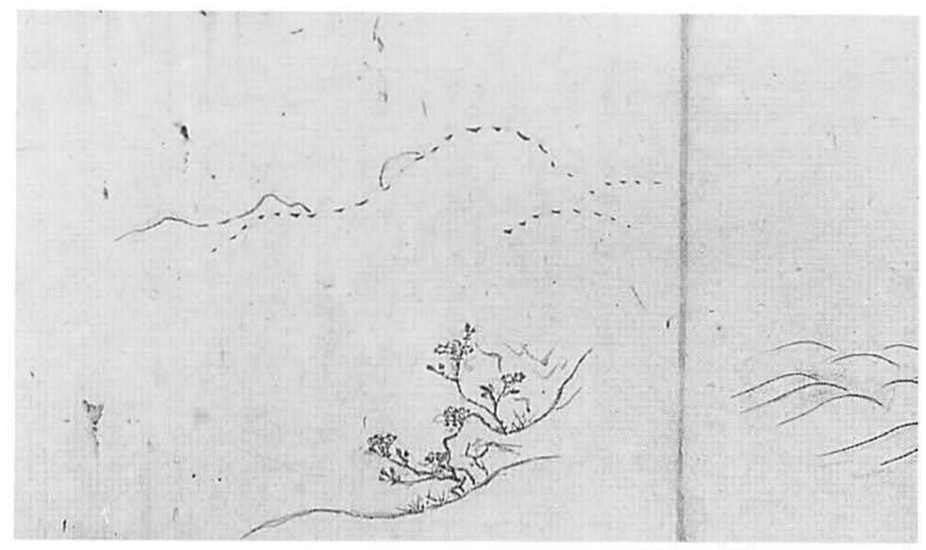
（第三紙墨書）西」都より」南」たうたてし岸のかひ有藤なミの／なひきてともにおもひやるかな」

（第四紙墨書）南」たうたてし」北」日影見ぬこなたの軒のかけののゆき／山のこしちは空にしられぬ」雪有」

（第五紙墨書）北」日影見ぬ」雪」中」月」中」秋の夜のかけかたふかぬ／もち月の」

（第六紙墨書）とまるはそらのもなか／なりけり」秋の夜の」青黄赤白黒　木火土金水此心モ繪ニ書也／以上十五首」





（二四八―三）

14　五色歌図

紙本墨画　一巻　二三五×二五二八）

宝永三年（一七〇六）

八紙継、焼筆あり、第五紙紙背に千鳥図あり

（第一紙端裏墨書）五色」

（第一紙墨書）一」好京極ノ五色内」青」

（第二紙墨書）二」改に扣／定家五色ノ赤

寶永三二月　青前同」

（第三紙墨書）三」白」改に扣」

（第四紙墨書）四」好京極　五色黄　改に扣

寶永三二月」

（第五紙墨書）改（二）扣五色定家／山吹」

（第五紙裏墨書）改に扣／好京極内／賀茂川

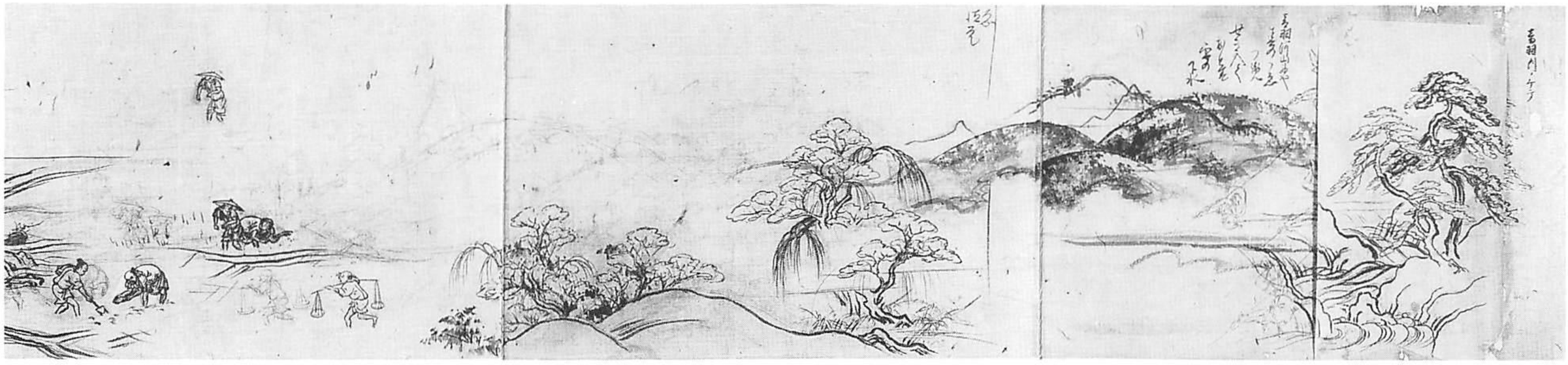
千鳥霧霜氷と／月カケ」霜うつむかもの川

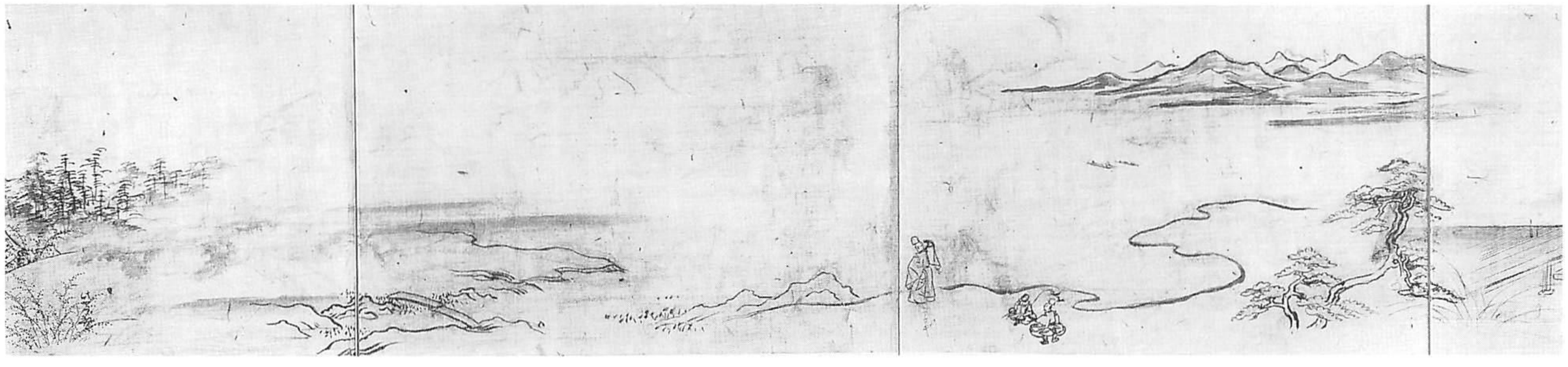
はらに鳴千鳥／氷にやとる月やさむけき」

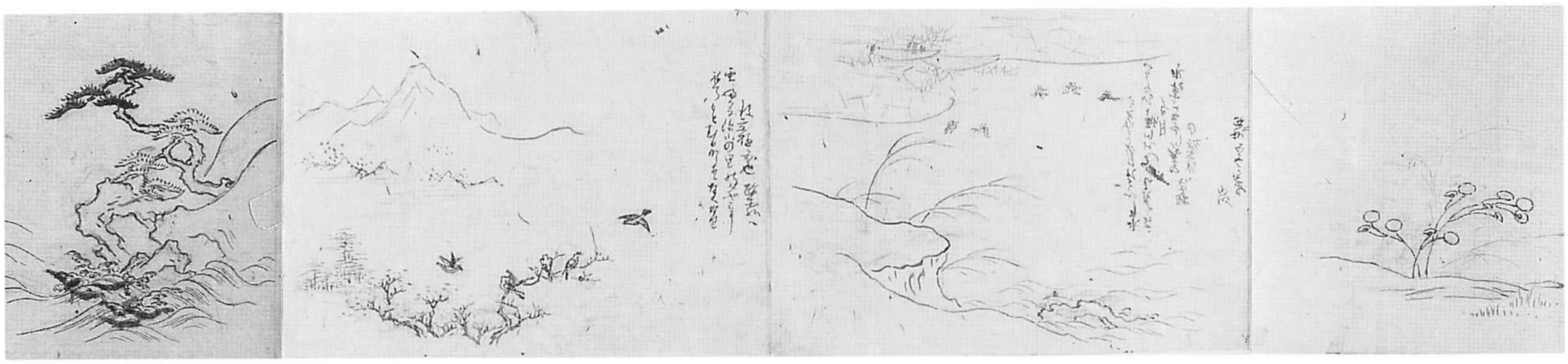
（第六紙墨書）六」好京極五色改に扣」雲ふ

かき深山の里の夕やミに／ねくらもとむる

からすなくなり」







15　名所歌絵巻　（二三八）

紙本墨画　一巻　二五二×六三三〇

寛文二年（一六六二）

十八紙継、焼筆あり、胡粉修正あり、貼紙あり、

紙背に筏差図・馬上貴人図等の白描絵あり

（第一紙墨書）音羽川ノケテ」音羽河山にや／春のこえ／つ覧／せき入て／おとす／雪の／下水」

（第二紙墨書）ゑ／従是」

（第五紙墨書）定家」

（第九紙墨書）宮内卿／女御」

（第十紙墨書）西行」

（第十五紙墨書）菅家」

（第十七紙墨書）定家」

（第十八紙）寛文貳年卯月日／片岡平右衛門殿持扣」

［画中墨書］

（第五紙）是ヨリチイサク」

（第九紙）馬アシ」レンセイアシ」

（第十紙）アサギ」朱」エン」コン」トラノ皮」

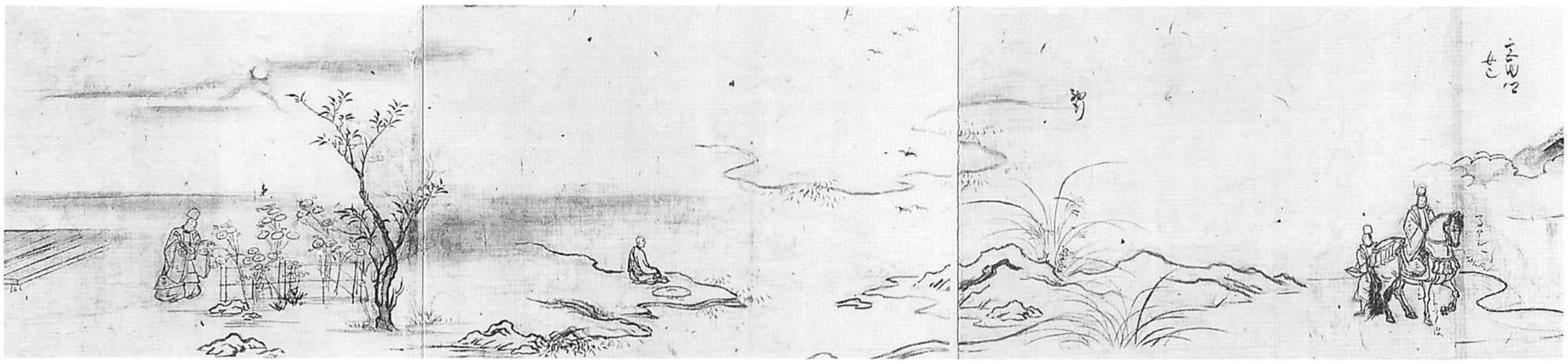
（第十二紙）エン」ナウシ」エン」

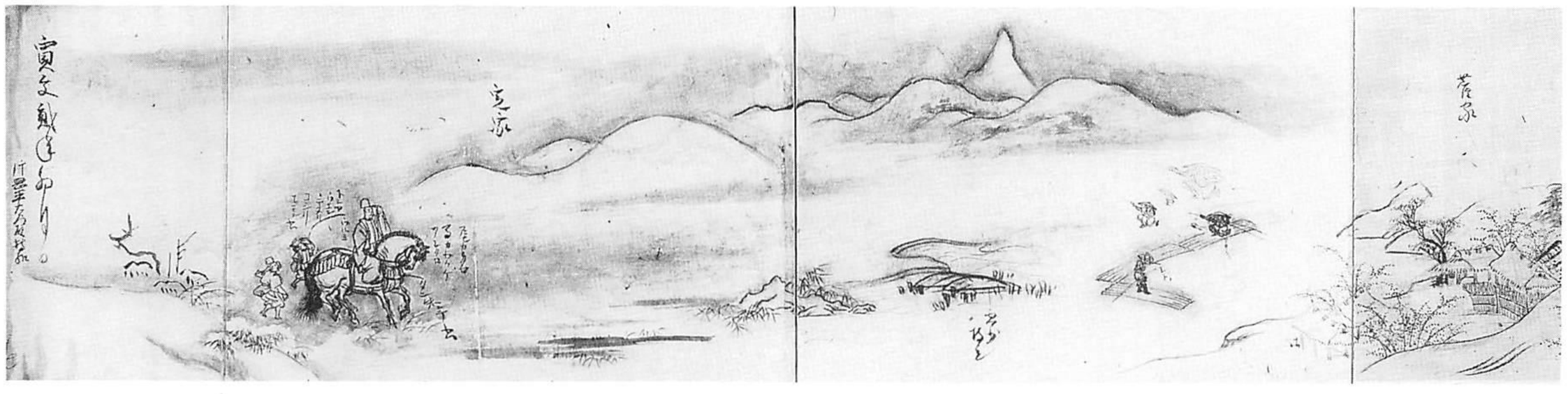
（第十三紙）タン」アサギ」シユ」

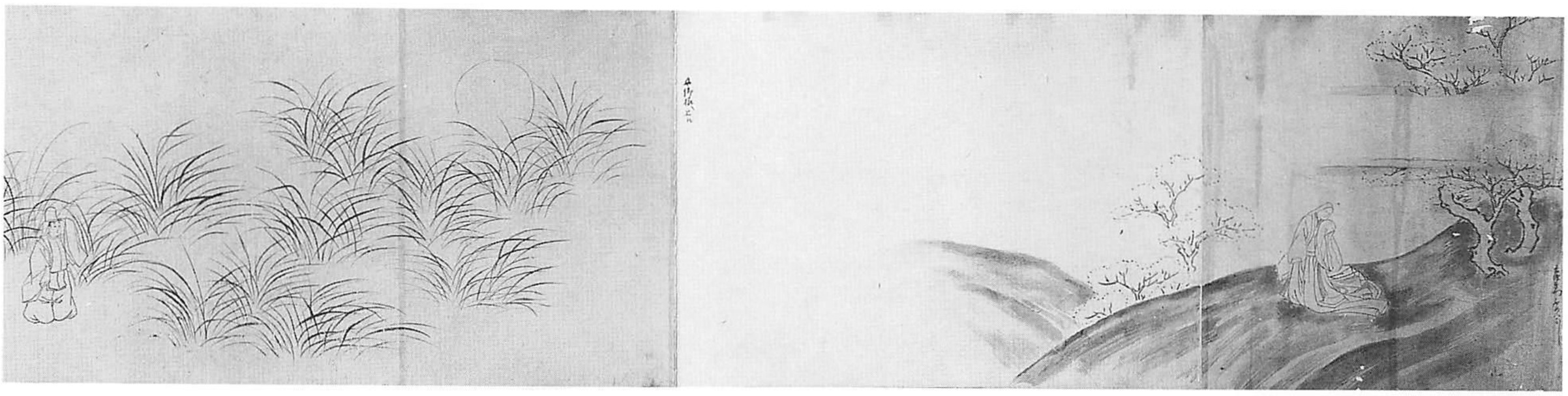
（第十五紙）此ヤブ無」

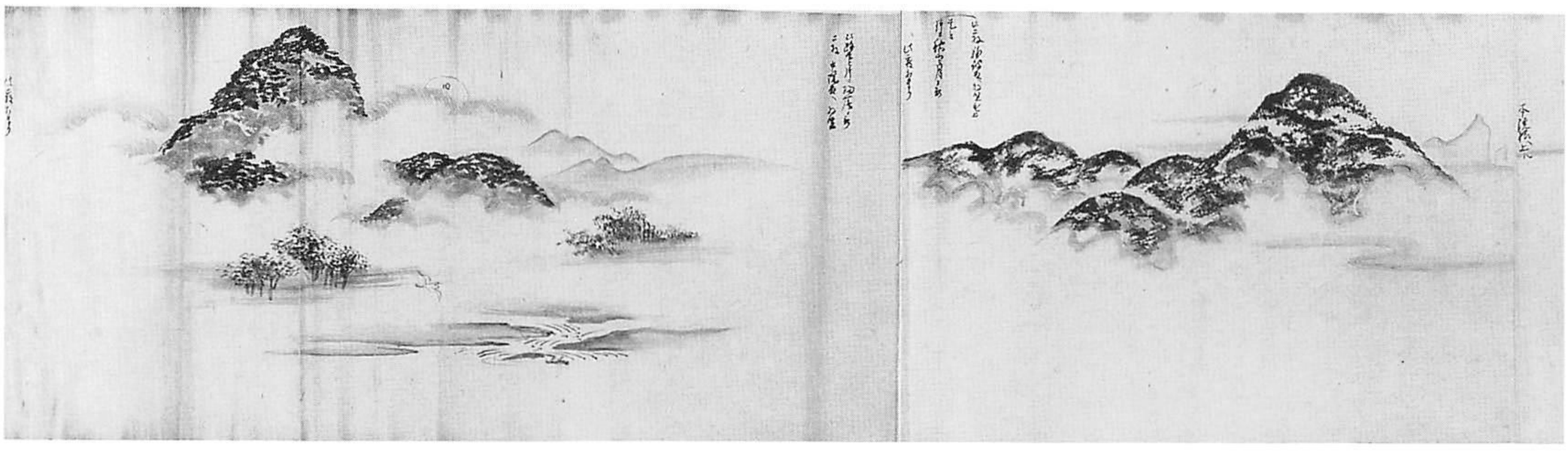
（第十六紙）アサギ」シド」雪少／持シ」

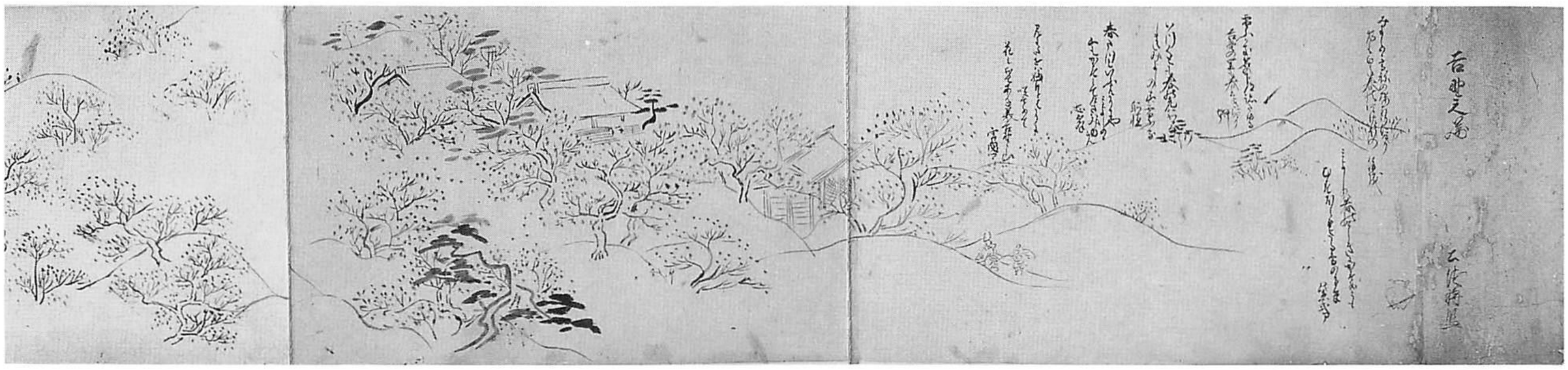
（第十七紙）尾カミクロ／馬カワラゲ／アシクロ」タン朱ニテ書」ウルミ」下シア／ウエン／ニテヌリ／コンク／エモン書」

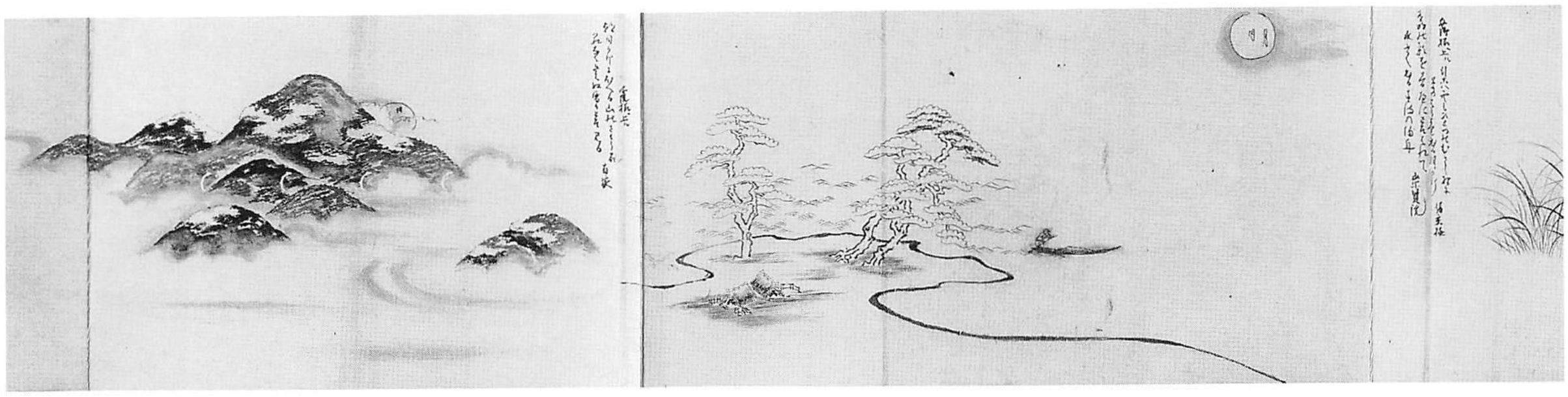












16　名所歌絵巻　（四二二）

紙本墨画淡彩　一巻　二八四×三三七五

十紙継

（第一紙右下墨書）赤染衛門ふめハおし」

（第二紙左墨書）女御様へ上ル」

（第四紙左墨書）女御様へ上ル／行末ハ雲も

ひとつのむさし野に／草のはらより出る月

かけ／後京極」

（第五紙右墨書）有明の影をしるへにさそは

れて／夜ふかく出るすまの浦舟／崇賢院」

（第六紙墨書）本院様上ル」

（第七紙墨書）朝日かけにほへる山のさくら

花／つれなくきえぬ雪かとそ見る／有家」

（第八紙墨書）本院様へ上ル」

（第九紙墨書）此二枚難波殿へ拝覧進上／是

と／片ニ秋山ニ月ノ哥」此二枚あまり」此

鷺と片ニ歸鴈ノ哥／二枚中院殿へ拝覧」

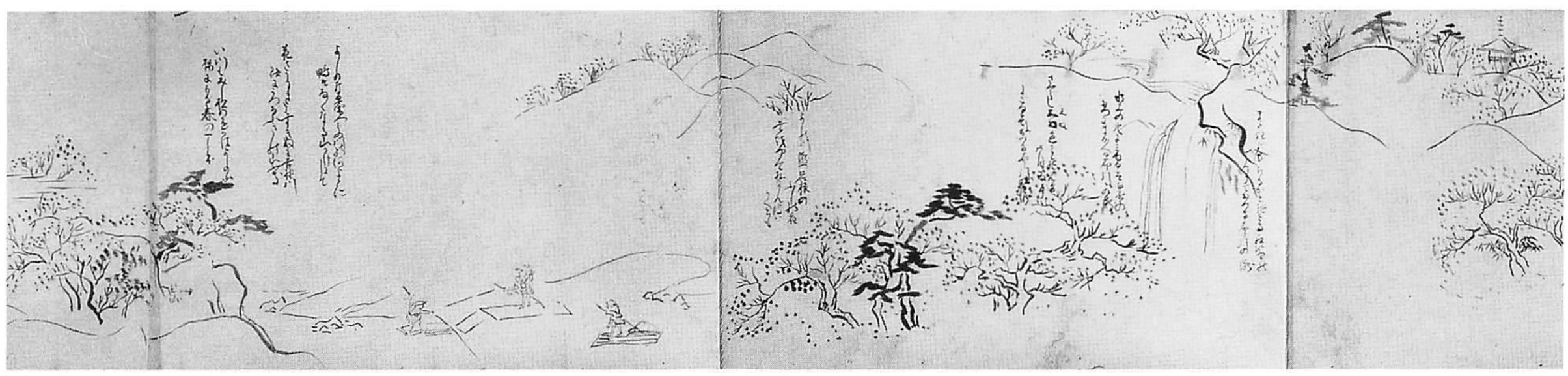
（第十紙墨書）此二枚あまり」

［画中墨書］

（第五紙）月／月」

（第七紙）月」

（第九紙）日」



17　吉野歌絵巻　（二四九）

紙本墨画　一巻　二九四×三六八〇

（第二紙朱文鼎印）藤原／光武」

九紙継

（第一紙墨書）吉野之圖」土佐将監」

（第二紙墨書）みよしの、高ねの桜ちりにけ

り／嵐も白き春のあけほの　俊成」ミよし

のハ春のけしきにかすめとも／むすほゝれ

たる雪の下草／紫式部」雪ふかき岩の下道

跡たゆる／吉野の里も春はきにけり」堀川」

いつくとも春の光ハわかなくニ／またみよ

しの、山ハ雪ふる／躬恒」春たつといふは

かりにや／ミよしの、／山もかすミてけさ

ハみゆ／らん／忠峯」見わたせハふくとは

かりに／咲そめて／花もおくあるみ吉野、

山／宮内卿」

（第五紙墨書）またきよりちるかとそミる紅

葉の／うつりておつる布引の瀧」水上の空

にミゆるは白雲の／たつにまかへる布引の

瀧」さらし三ふ（えぬ）色かとそ見る／五月

雨に／にこりておつる布引の瀧」よしの川

瀧の岩根の／ふしの花／たおりてゆかん波

は／かくとも」

（第六紙墨書）よしのなるなつミの川の河よ

とに／鴨そなくなる山かけに／して」花さ

かりまたもすきぬに吉野川／陰にうつろふ

きしの山ふき」いつもみし松の色かはよし

の山／桜にもる、春の一しほ」

（第八紙墨書）木の本に旅をすれは吉野山／

花のふすまをきする春風」あさほらけ有明

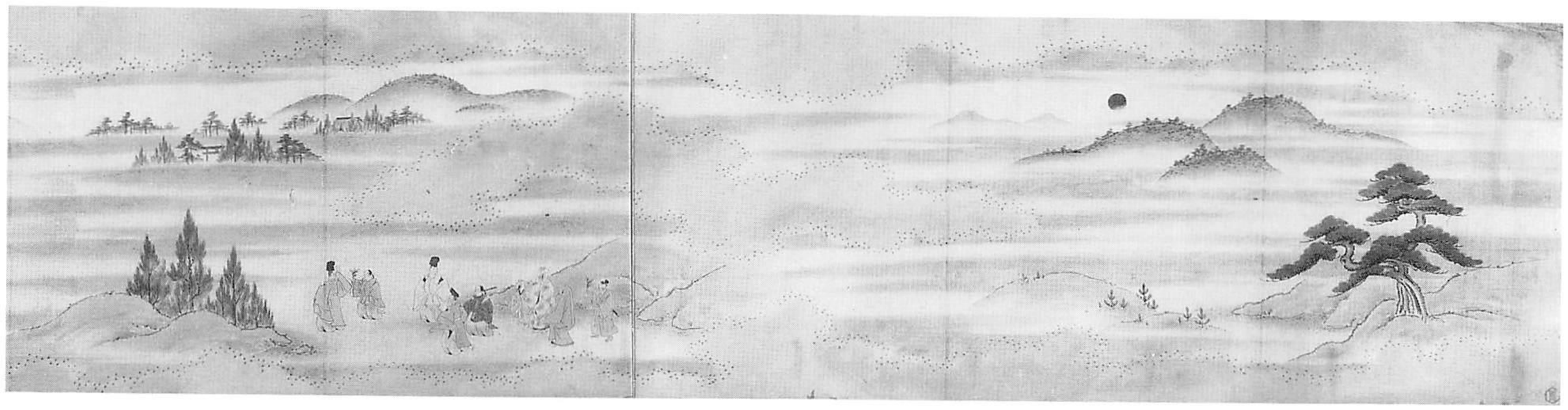
月とみるまてに／よしの、里にふれるしら

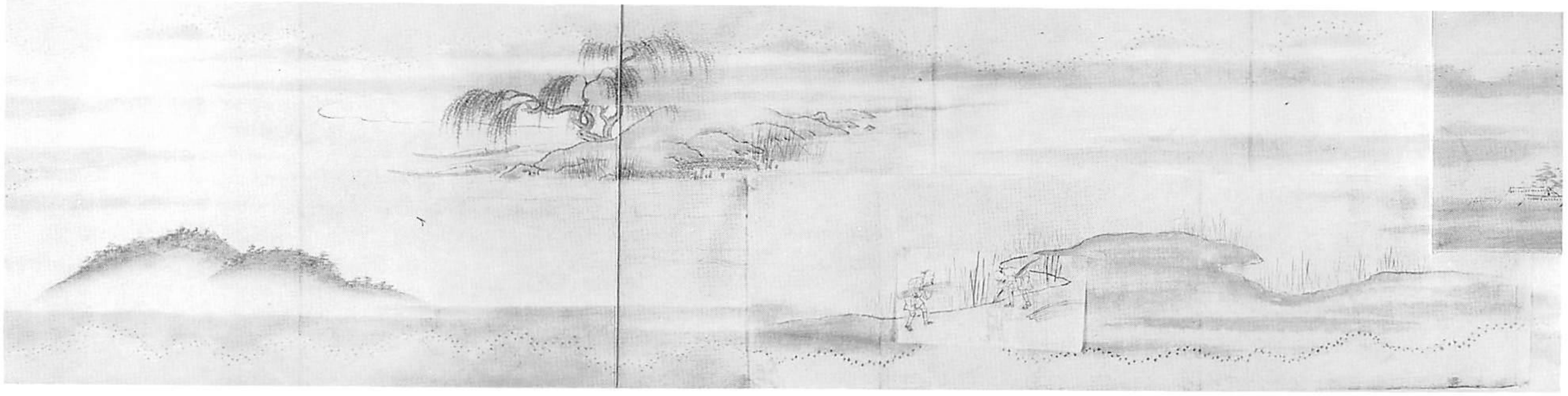
雪／是則」みよしの、山かきくもり雪ふれ

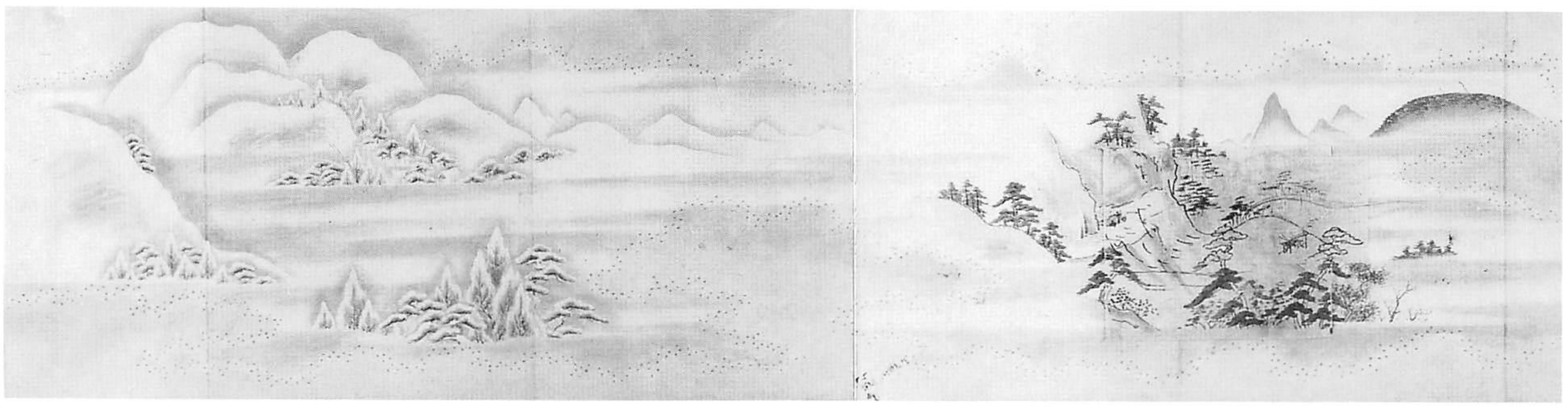
は／ふもとの里ハうちしくれつゝ」みよし

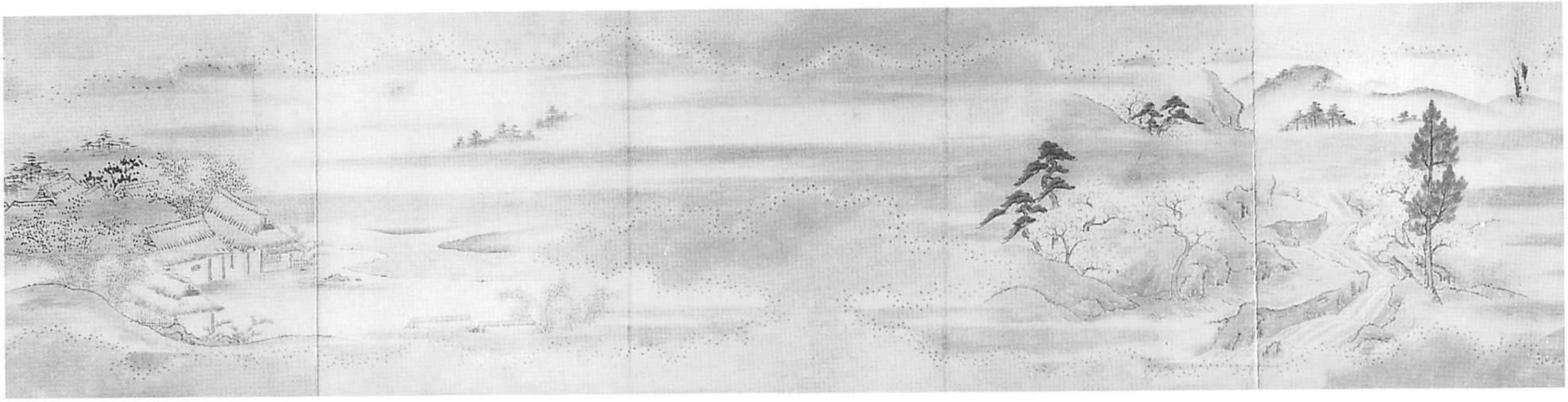
の、山の秋風さよふけて／ふる里さむく衣

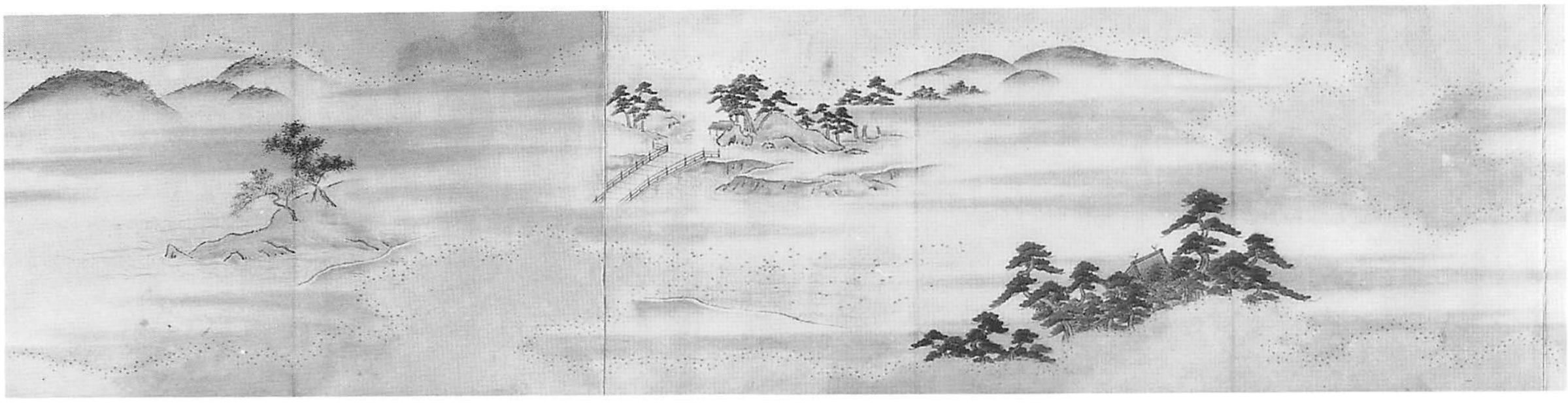
打なり／参議雅經」

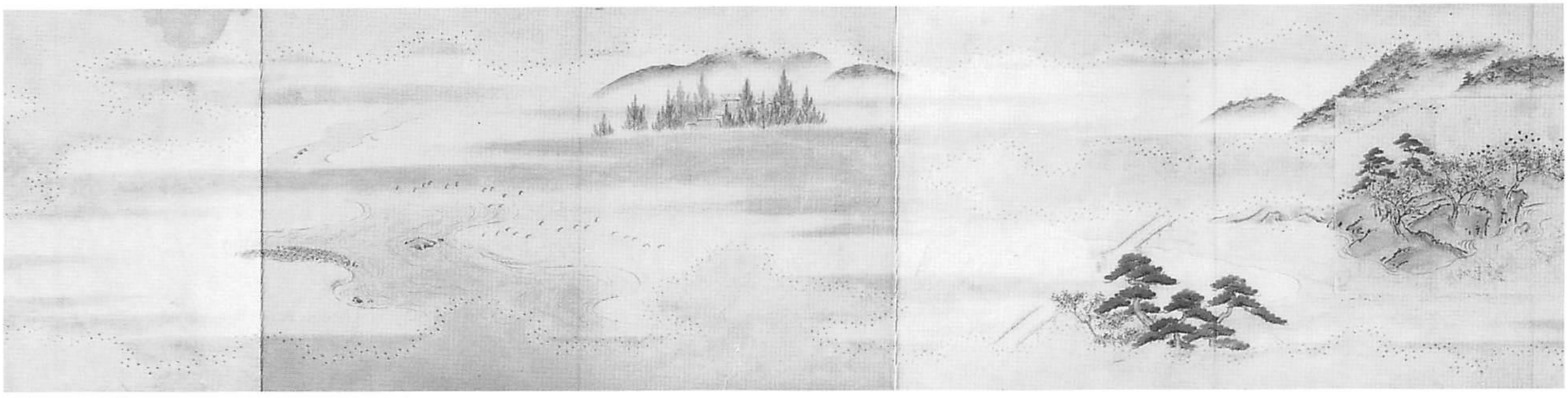












18　都名所絵巻　（二四五―一）

紙本淡彩　一巻　三三二×九五二二

（第一紙右下朱文重郭六角印）画院」

三十六紙継、付箋あり、貼紙あり

（第三紙付箋墨書）稲荷／初午詣」

（第六紙付箋墨書）白川／花」

（第九紙付箋墨書）伏見／郭公」

（第十一紙付箋墨書）淀／菖蒲」

（第十七紙付箋墨書）宇治／蛍」

（第十九紙付箋墨書）廣沢／月」

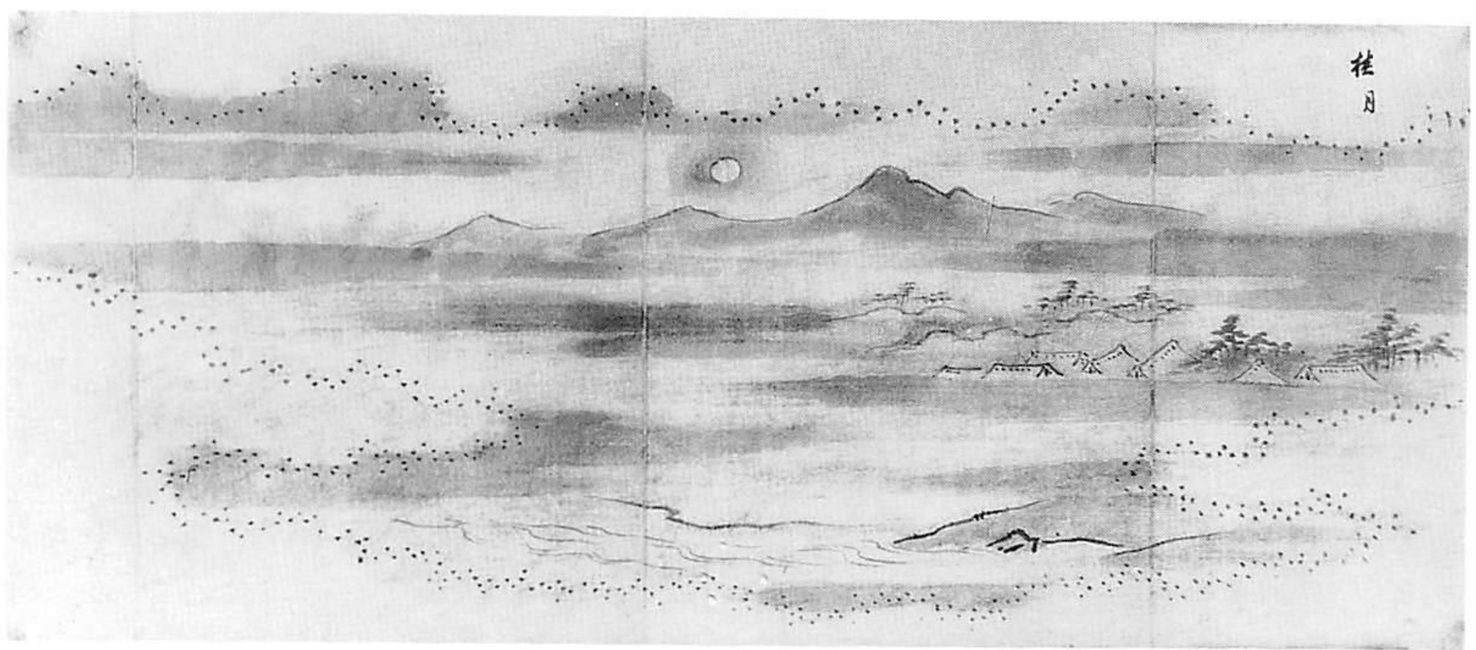
（第二十二紙付箋墨書）小藏山／鹿」

（第二十五紙付箋墨書）大井川／紅葉」

（第二十七紙付箋墨書）賀茂川／千鳥」

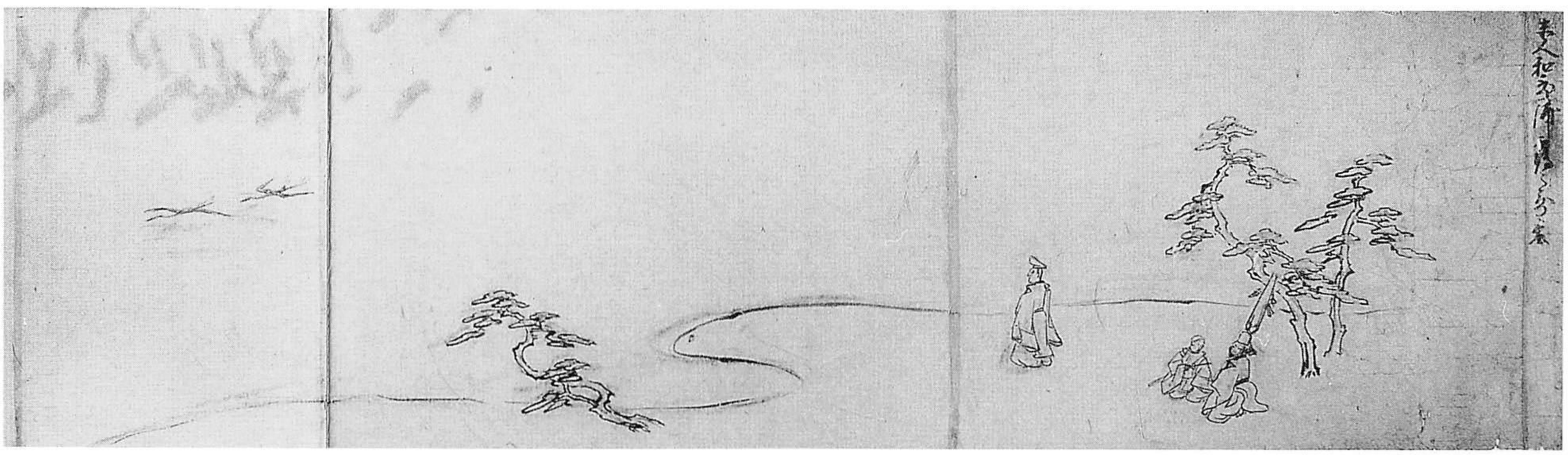
（第三十紙付箋墨書）小野／炭竈／炭竈里」

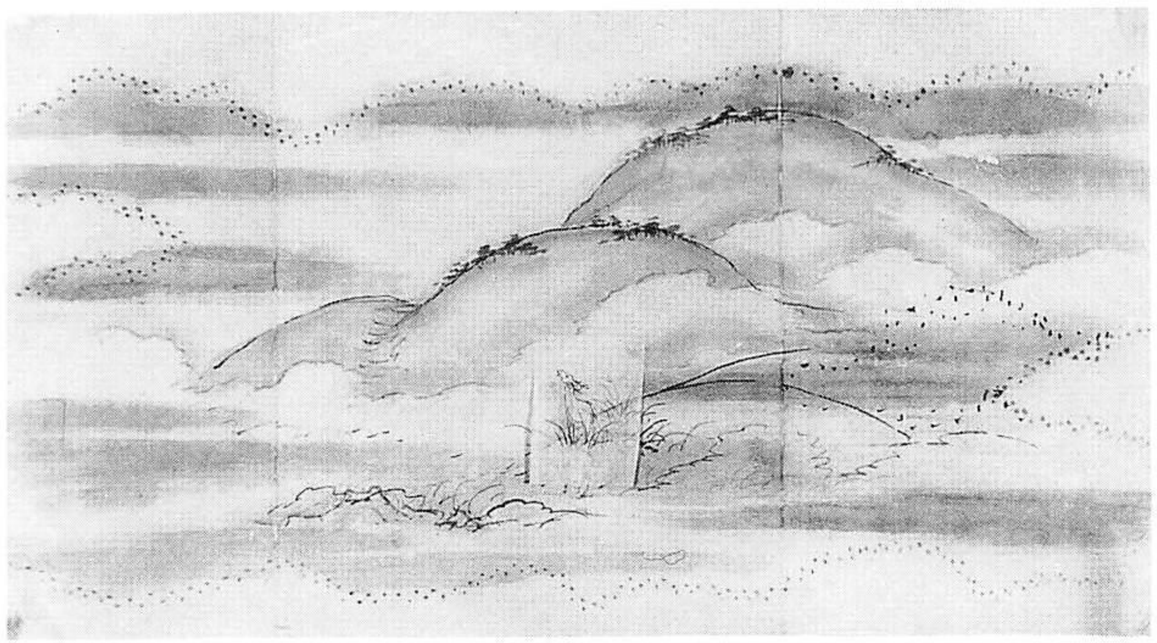
（第三十三紙付箋墨書）比叡／雪」



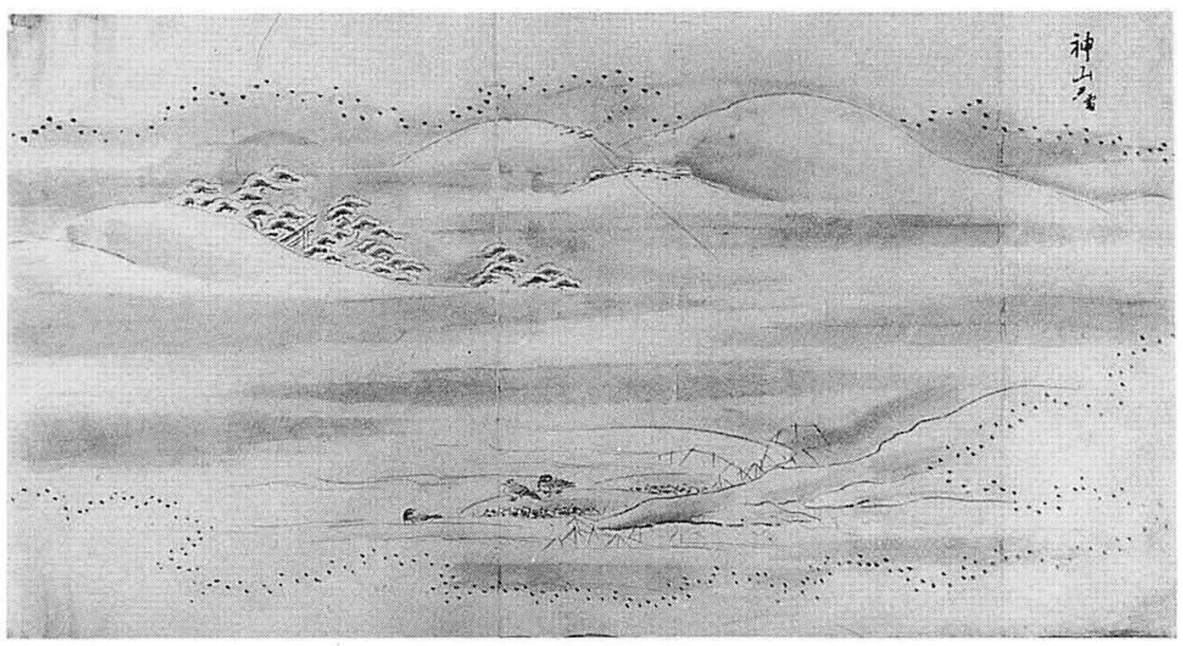
19　桂図　（二四五―二）
紙本淡彩　一巻（合装）　三三二×七七一
四紙継
18の「廣沢」上に貼紙
（第一紙右上墨書）桂／月」

21　大荒木社図　（二四五―四）
紙本淡彩　一巻（合装）　三三二×六二二
三紙継
18の「賀茂川」上に貼紙
（第一紙右上墨書）大荒木社／落葉」

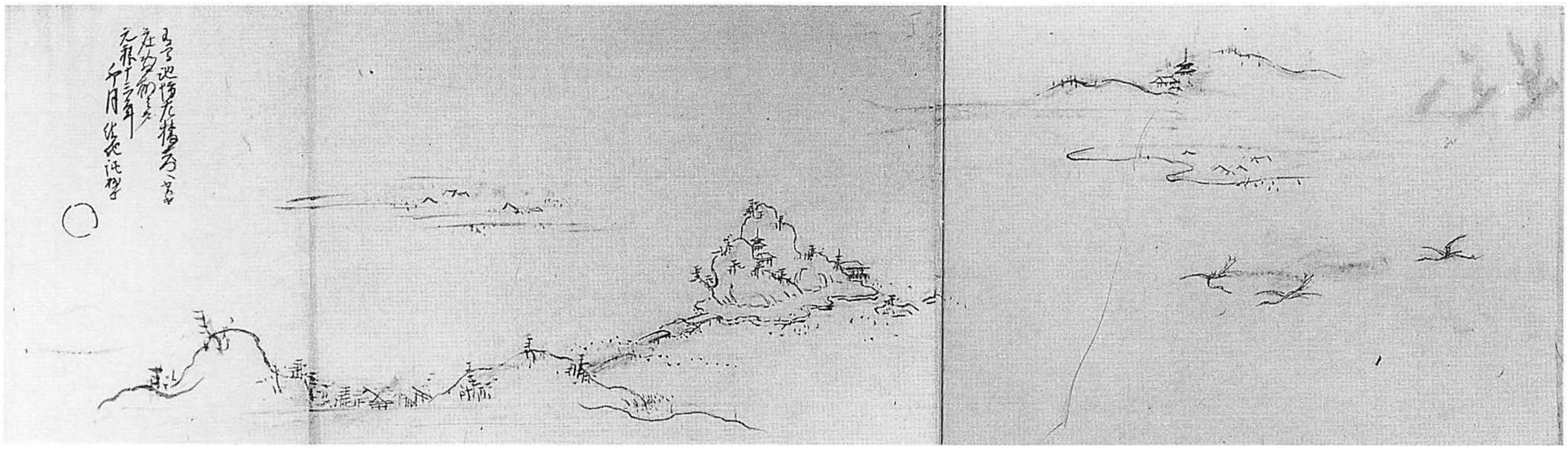




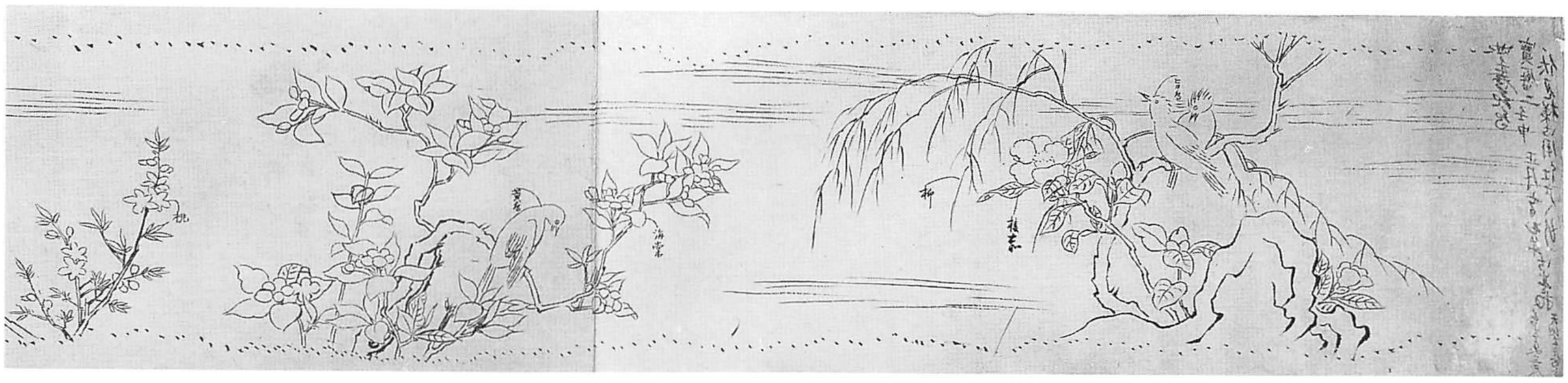
20　小倉山図　（二四五―三）
紙本淡彩　一巻（合装）　三三二×六一二
三紙継、貼紙あり
18の「小藏山」上に貼紙

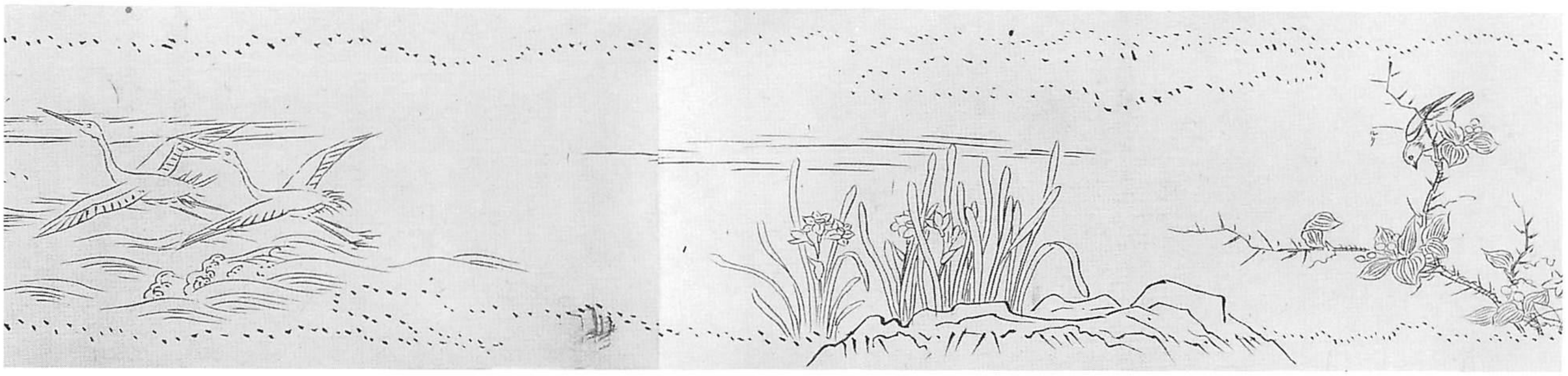


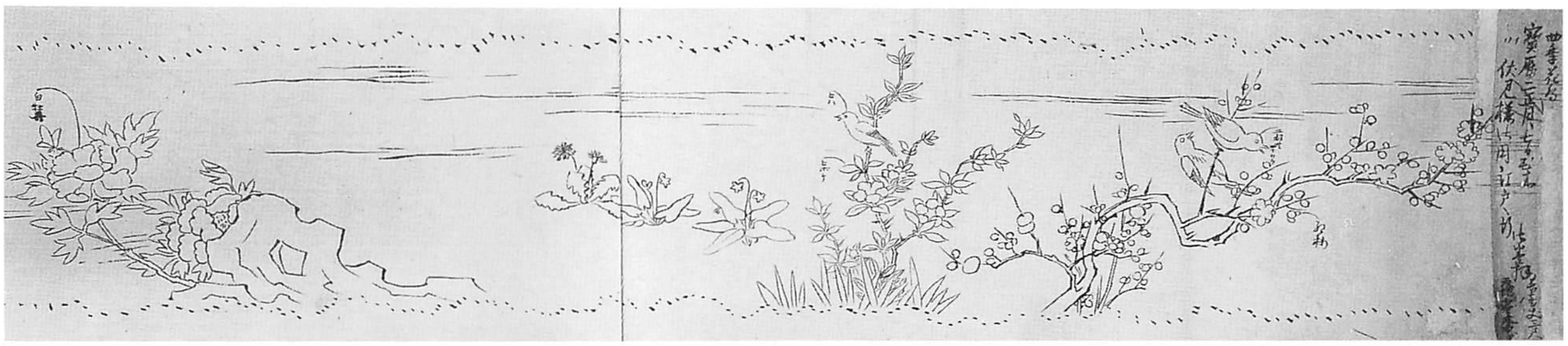
22　神山図　（二四五―五）
紙本淡彩　一巻（合装）　三三二×六一八
三紙継
18の「比叡」上に貼紙
（第一紙右上墨書）神山／雪」

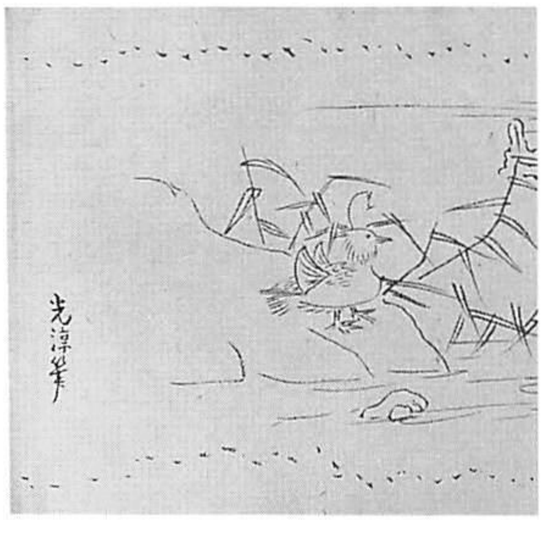


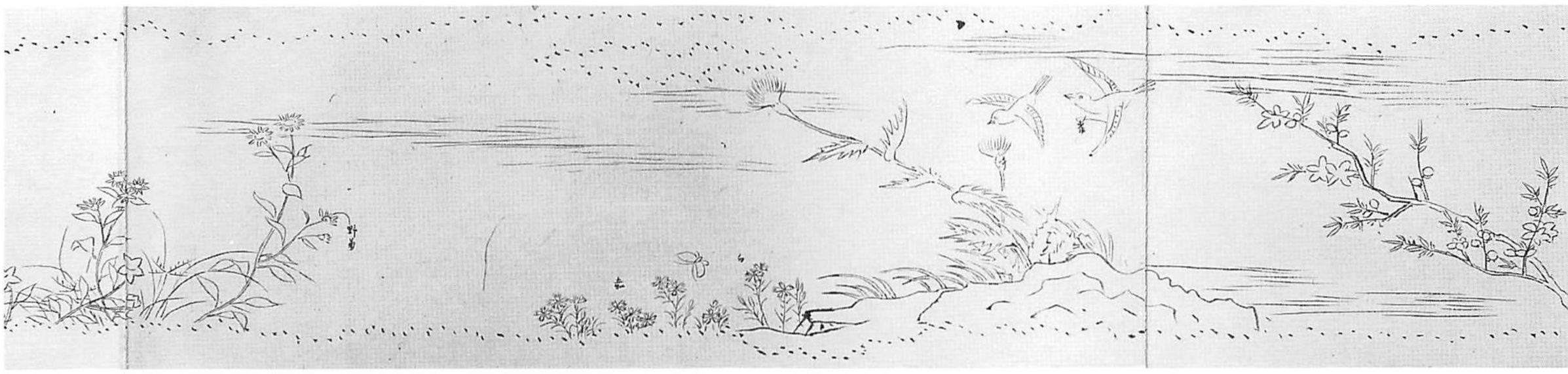
23　和歌浦絵巻　（二五五）
紙本墨画　一巻　二四二×一六八五
元禄十三年（一七〇〇）
六紙継、焼筆あり
（第一紙端裏墨書）赤人和哥浦鶴之歌圖」
（第六紙墨書）有馬池坊左橋右衛門へ書遣／
庄致極覚（カカカ）／元禄十三年／卯月絹地泥砂子」

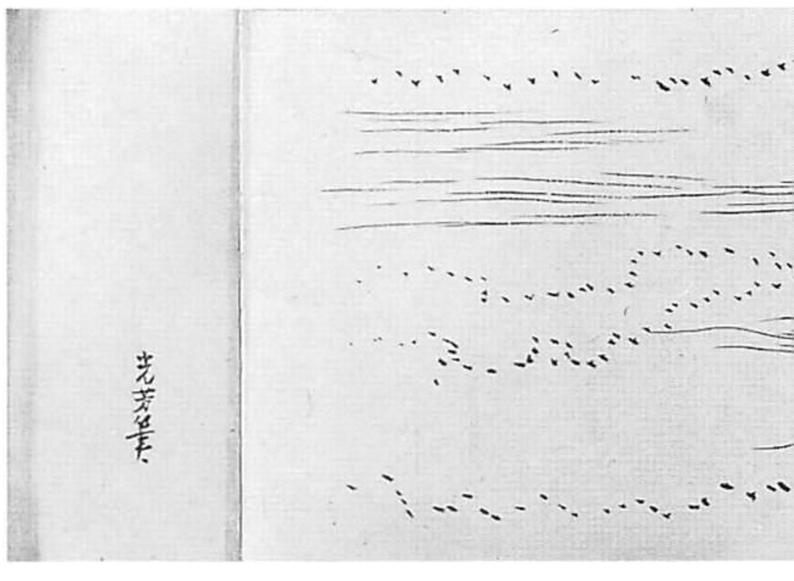












24　四季花鳥絵巻　（四六）

紙本墨画　一巻　一四二×二〇二〇

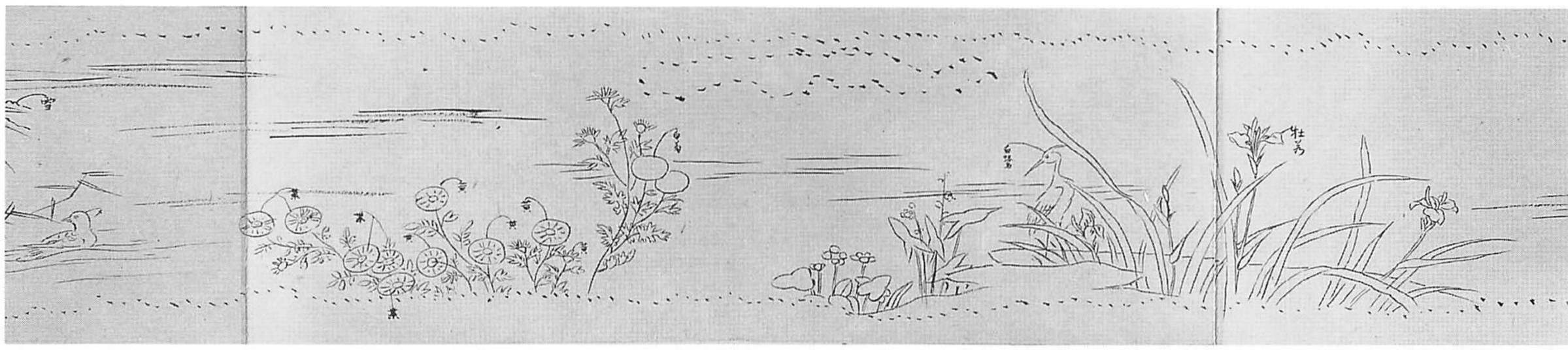
宝暦二年（一七五二）

土佐光芳

六紙継

（第一紙端裏書）四季花鳥／寶暦二壬申正月七日出来／伏見様御用江戸へ行／御巻物／長壱丈三尺／天地壱尺五分」

（第六紙墨書）光芳筆」



25　四季花鳥絵巻　（二一五）

紙本墨画　一巻　一三八×一四一一

宝暦二年（一七五二）

土佐光淳

四紙継

（第一紙端裏墨書）四季花鳥」寶暦二正月七日出来／伏見様御用江戸へ行／御巻物／長壱丈三尺／天地壱尺五分」

（第四紙墨書）光淳筆」

［画中墨書］

（第一紙）紅梅」二羽共／四十カラ」ヒハ」

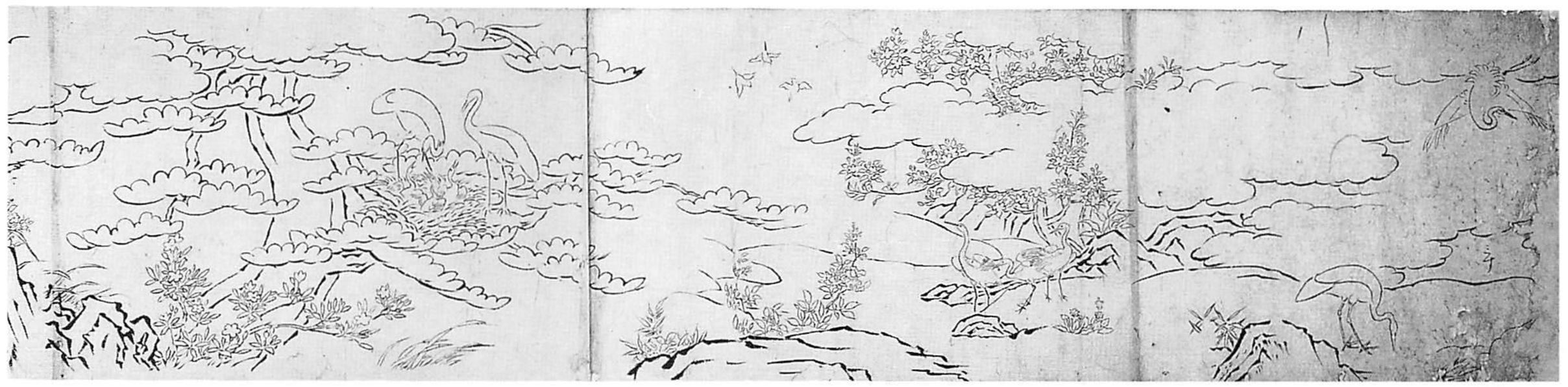
ヒボケ」

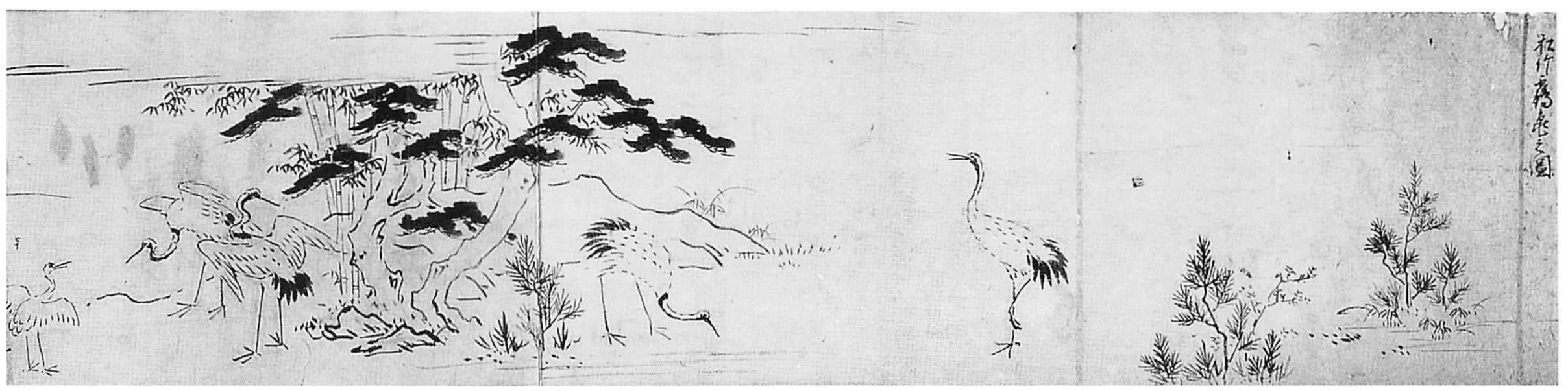
（第二紙）白牡丹」杜若」

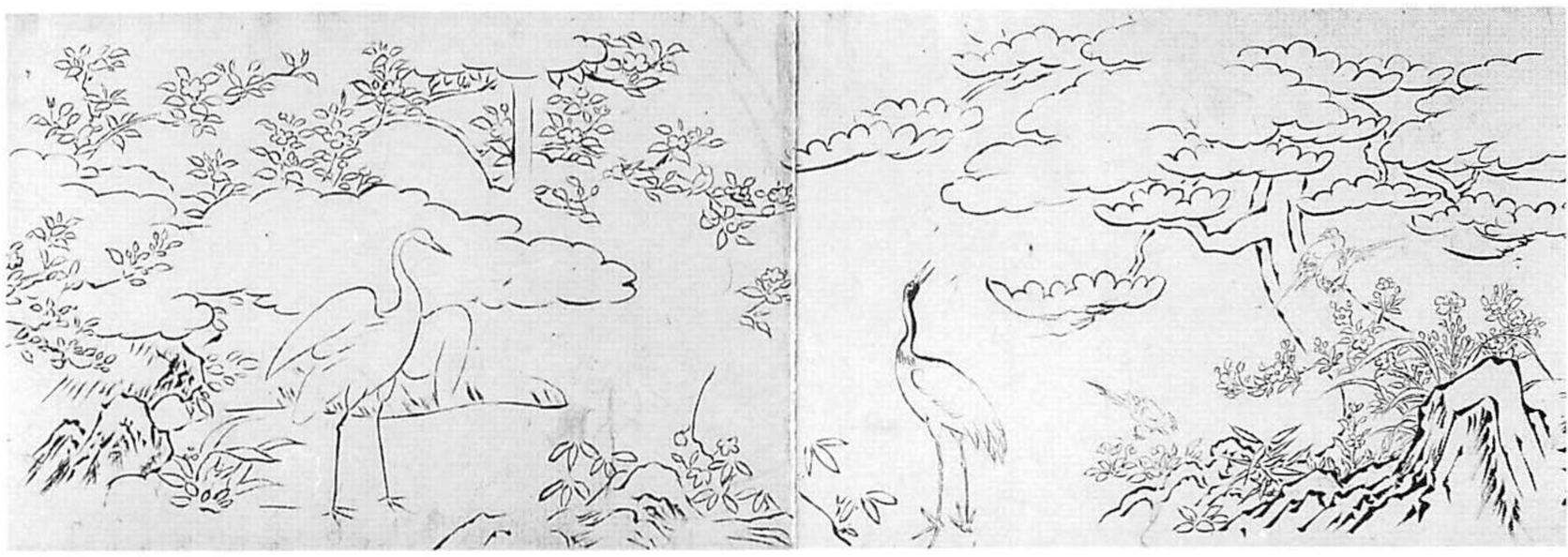
（第三紙）白鷺」白菊」黄」黄」黄」黄」黄」

黄」葉」葉」葉」

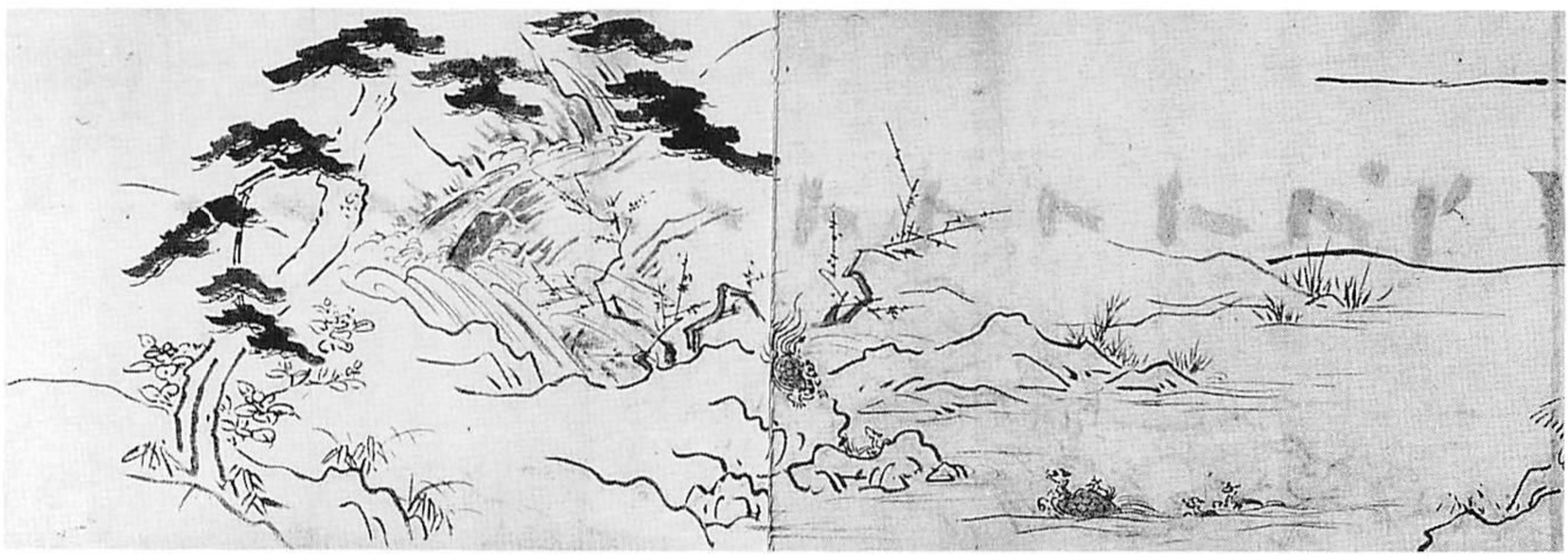
（第四紙）メ」雪」ヲシ」



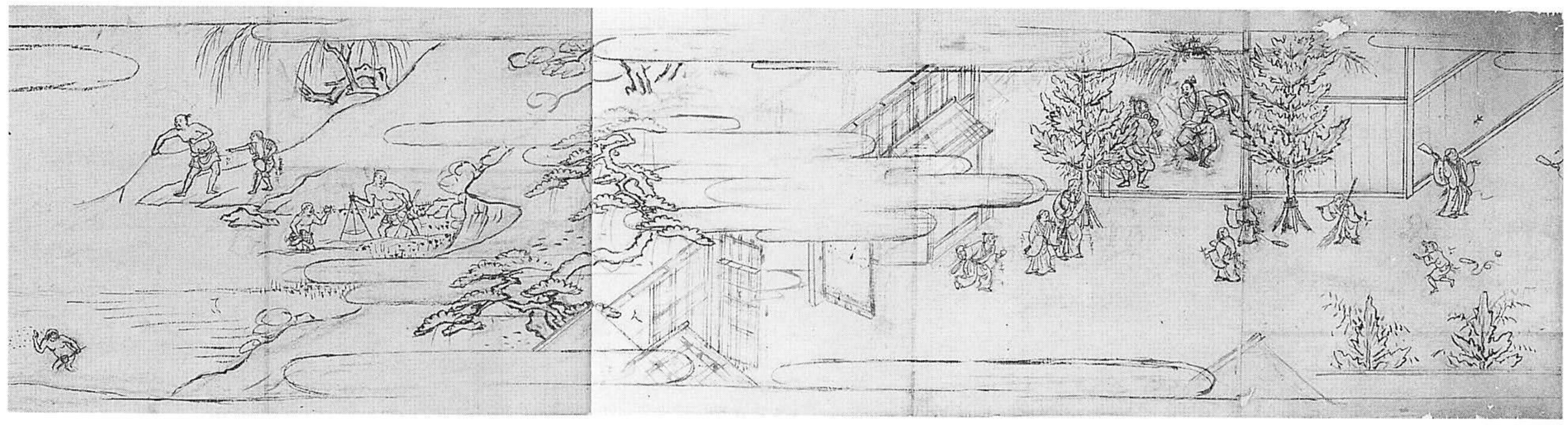

松竹鶴亀之図

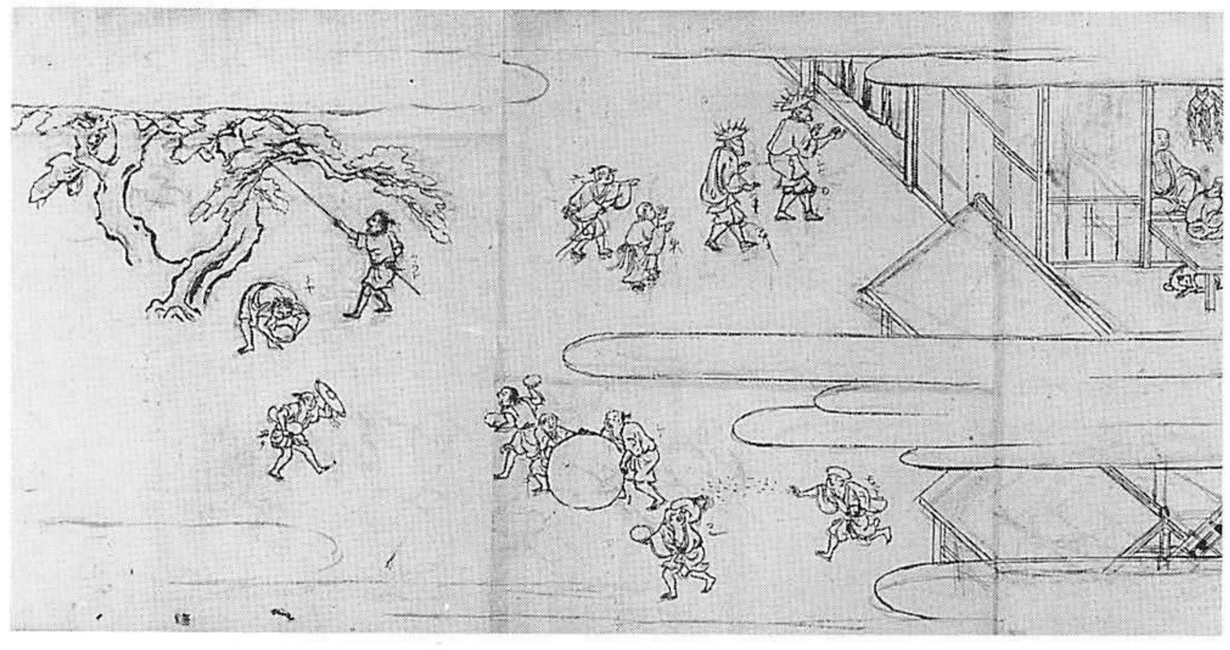


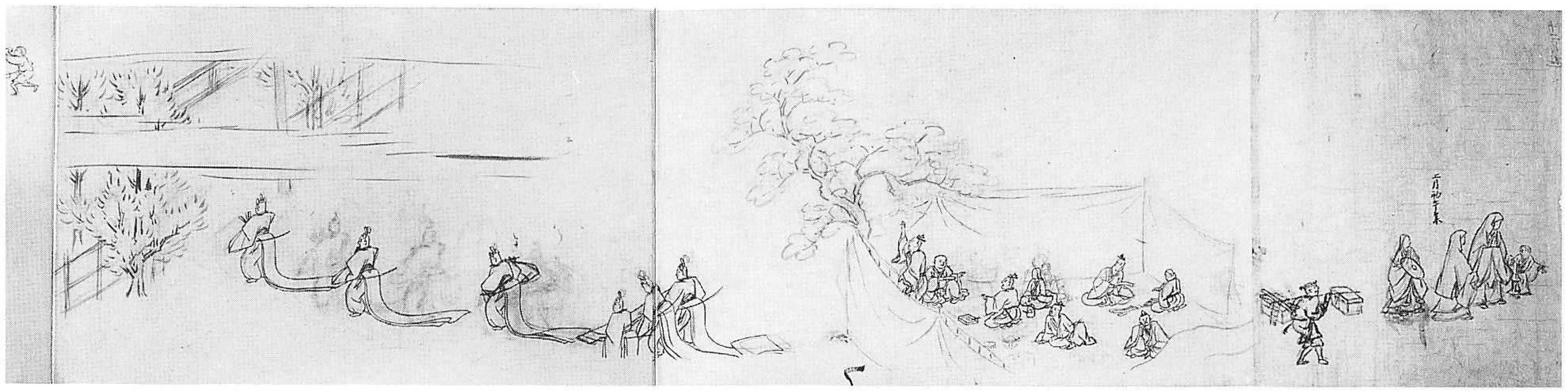
26　花鳥絵巻　（二四八―二）
紙本墨画　一巻　二七〇×一八七四
五紙継
（第一紙右下墨書）ミす」

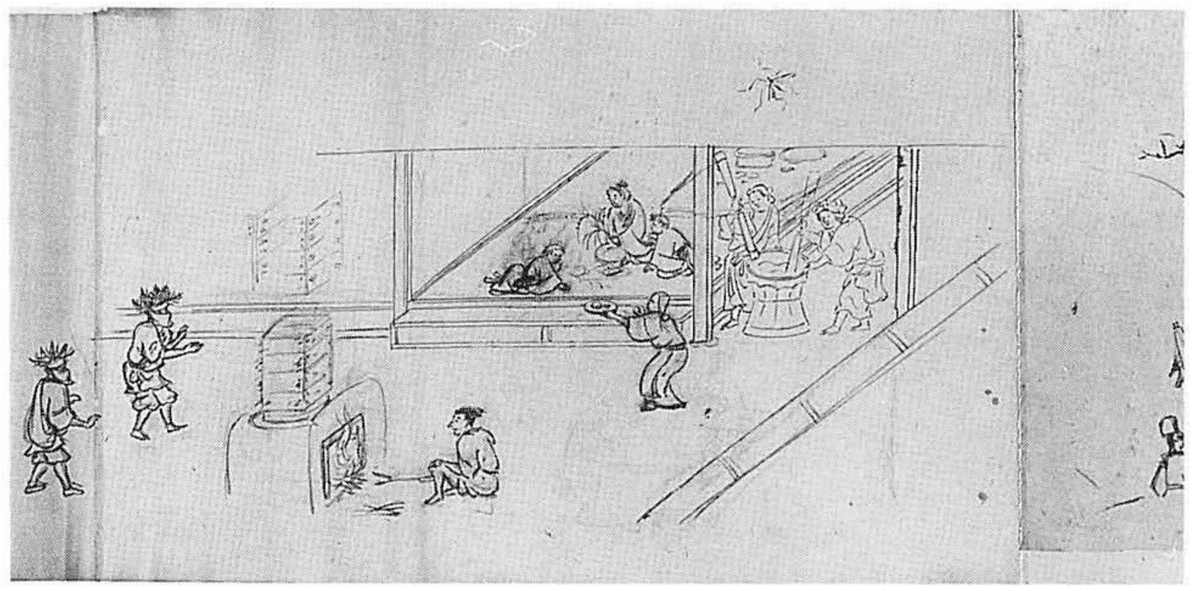


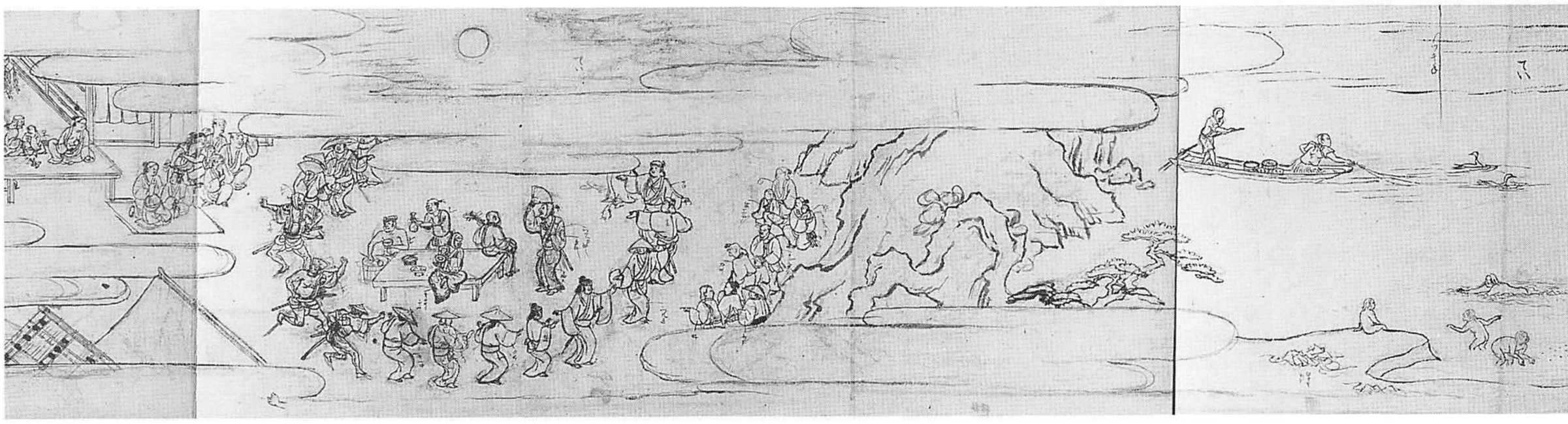
27　松竹鶴亀絵巻　（一三八）
紙本墨画　一巻　二四二×一六六五
五紙継
（第一紙端裏墨書）松竹鶴亀之圖」
［画中色指示］
（第三紙）ヒナ」





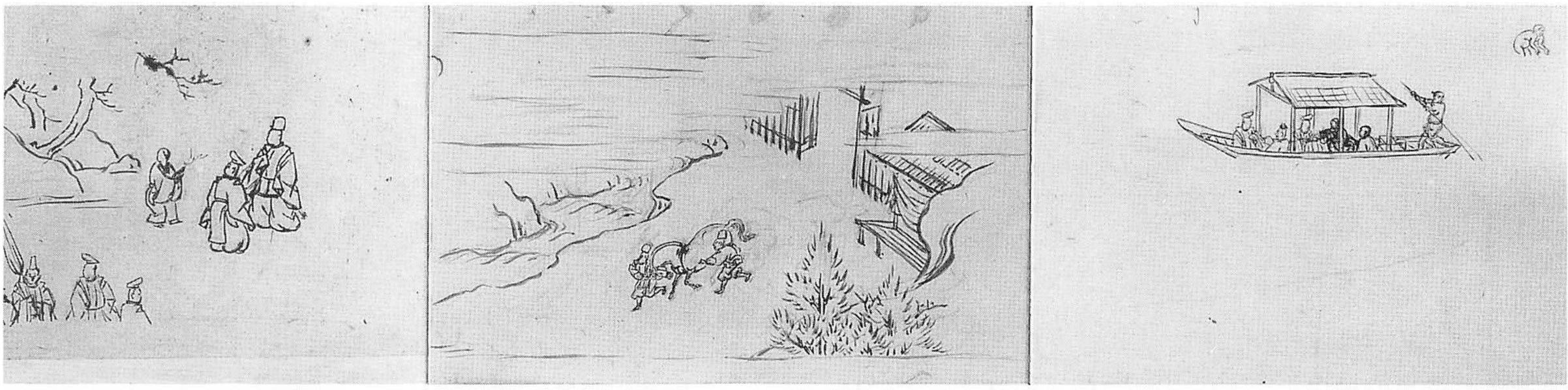






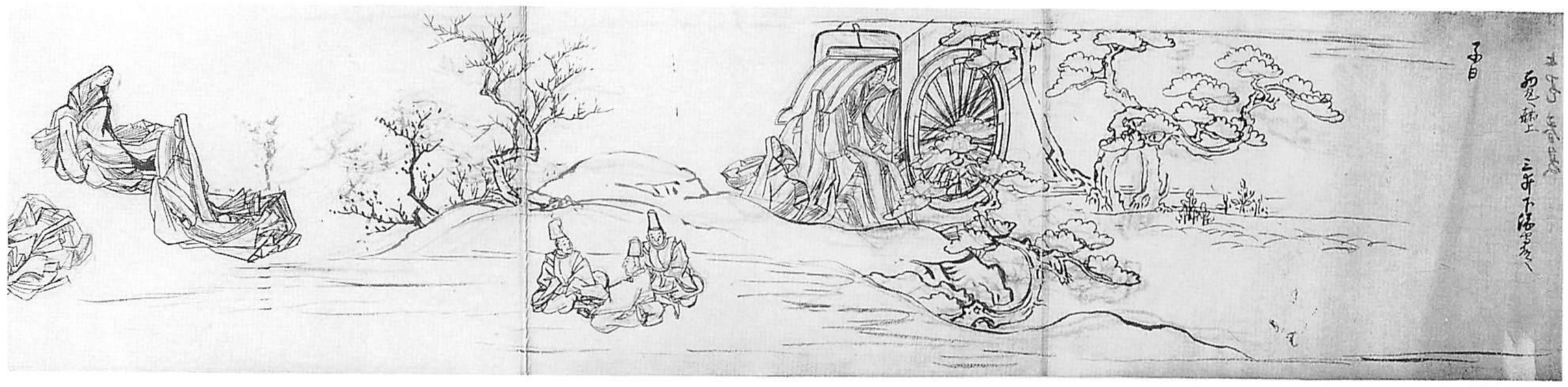
28　四季風俗絵巻　（二二〇）
紙本墨画　一巻　三三五×三二〇〇
十二紙継、胡粉修正あり、焼筆あり

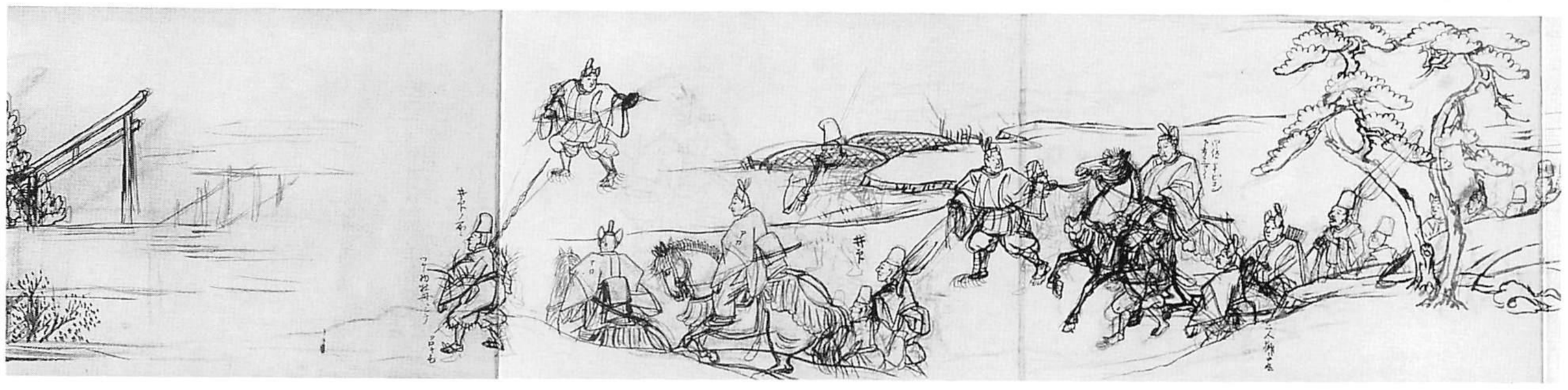
［画中墨書］
（第一紙）タン」アサキ」シド」生エンク」
丹」
（第二紙）アサキ」シド」白」アサキ」朱」
モヘキ」チャ」キ」
（第三紙）へ」アラシ金少／こまかに」
（第四紙）ド」白」ウスワド〈スミケシ〉」
モヘキ」
（第五紙）ワド」てい」てい」
（第六紙）ツキ手」シド」白」白アキ／ワド」
（第八紙）てい」朱」モヘキ」白」生エンク」
コンウスク」カキ」ワト」キ」クロ」クロ」
ウルミ」キ、スミ」ク、ケシ」チヤ」ウスカキ」カキ」手
粭文」朱」
（第九紙）コン」シト」キクロイ／チャ」ク
チハ」水」モヘキ」ワウト」シド」ヒホ朱」
クロ」シド」チャ」
（第十紙）朱」カキ」
（第十一紙）シド」白」ワト」白」アサキ」
朱」六」シド」キ」コン」モヘキ」
（第十二紙）ワウド」チャ」

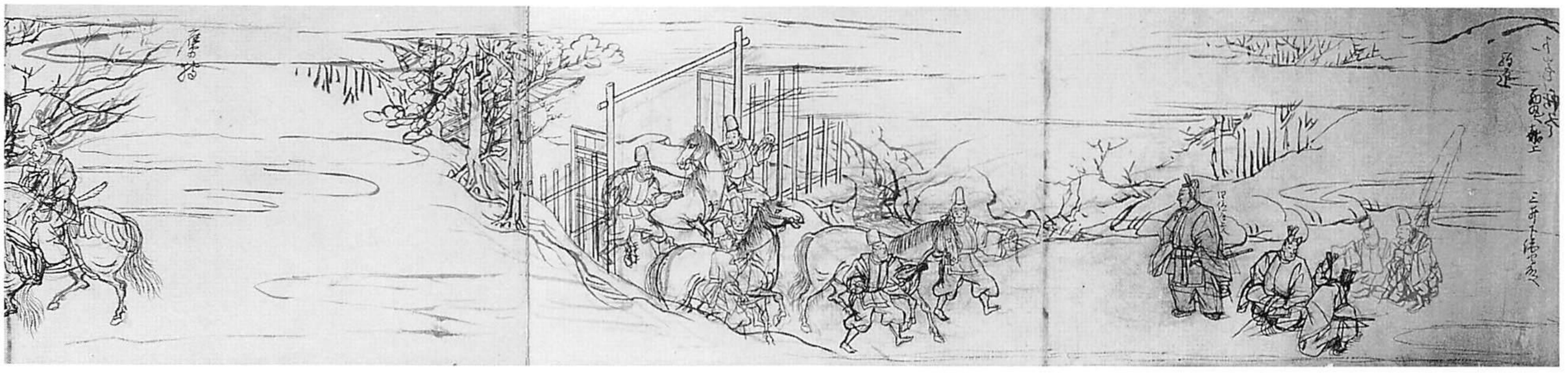


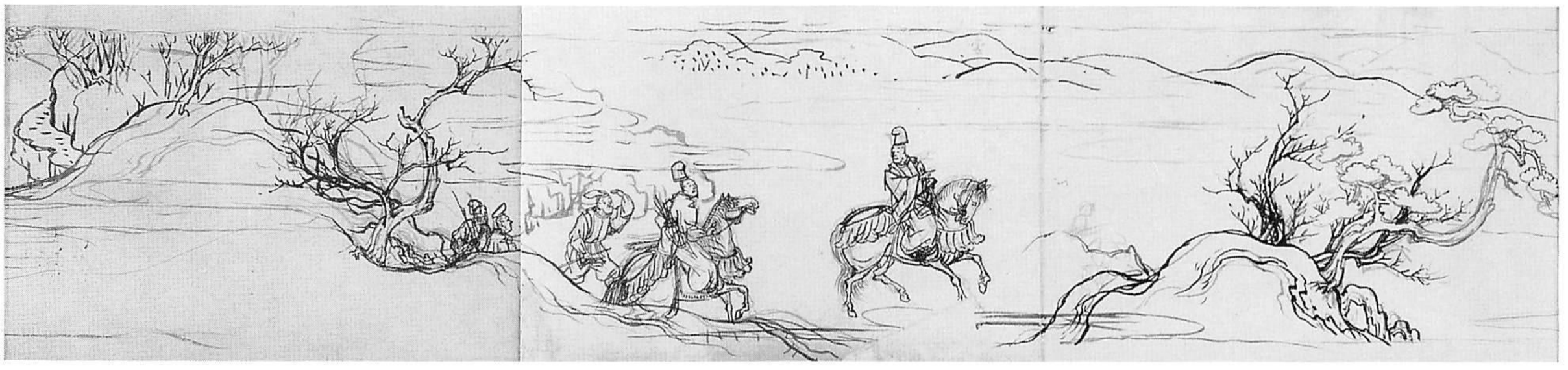
29　十二月絵巻　（二四六）
紙本墨画　一巻　二八九×二九五三
八紙継ぎ、焼筆あり

（第一紙端裏墨書）十二月遊」
（第一紙墨書）二月初午参」



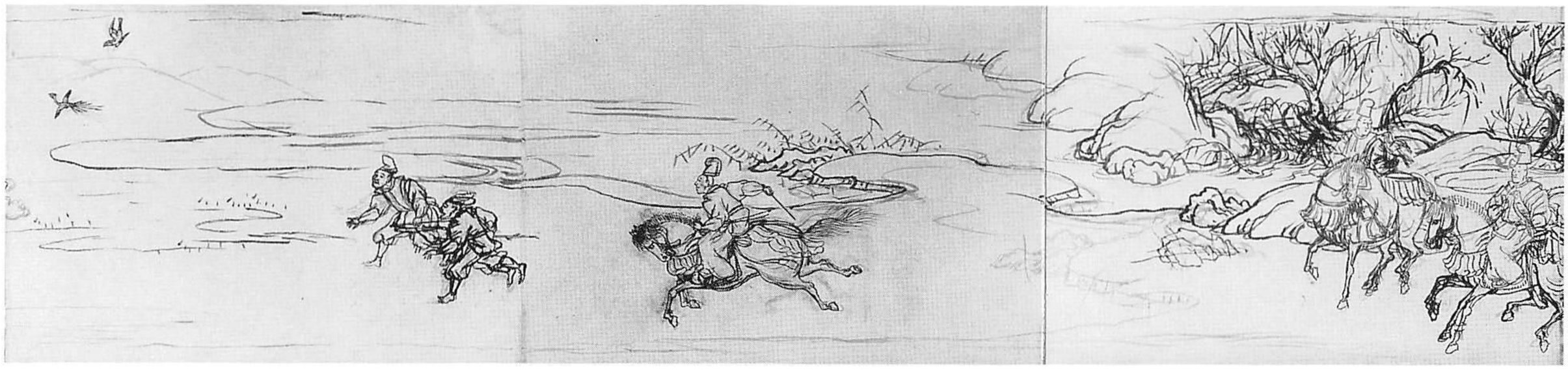


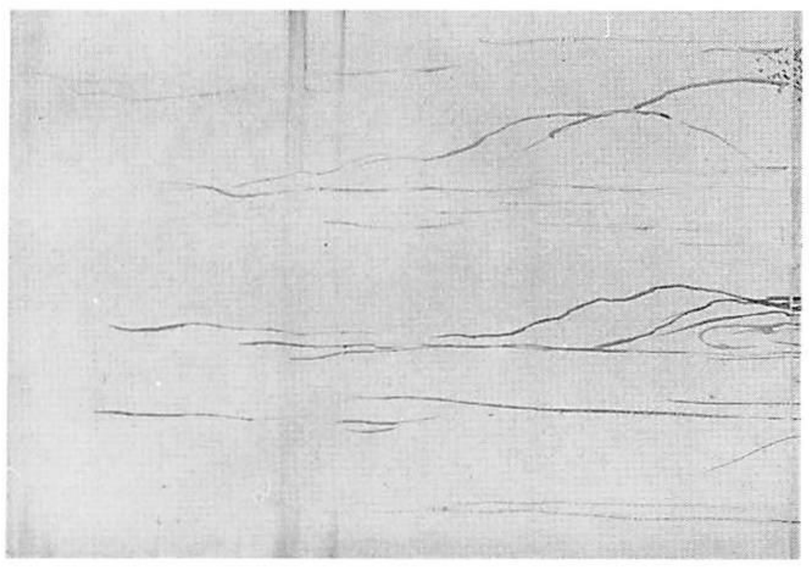




30　四季行事絵巻　（二三五―一）
紙本墨画　一巻　二九九×四二八〇
十紙継、焼筆あり

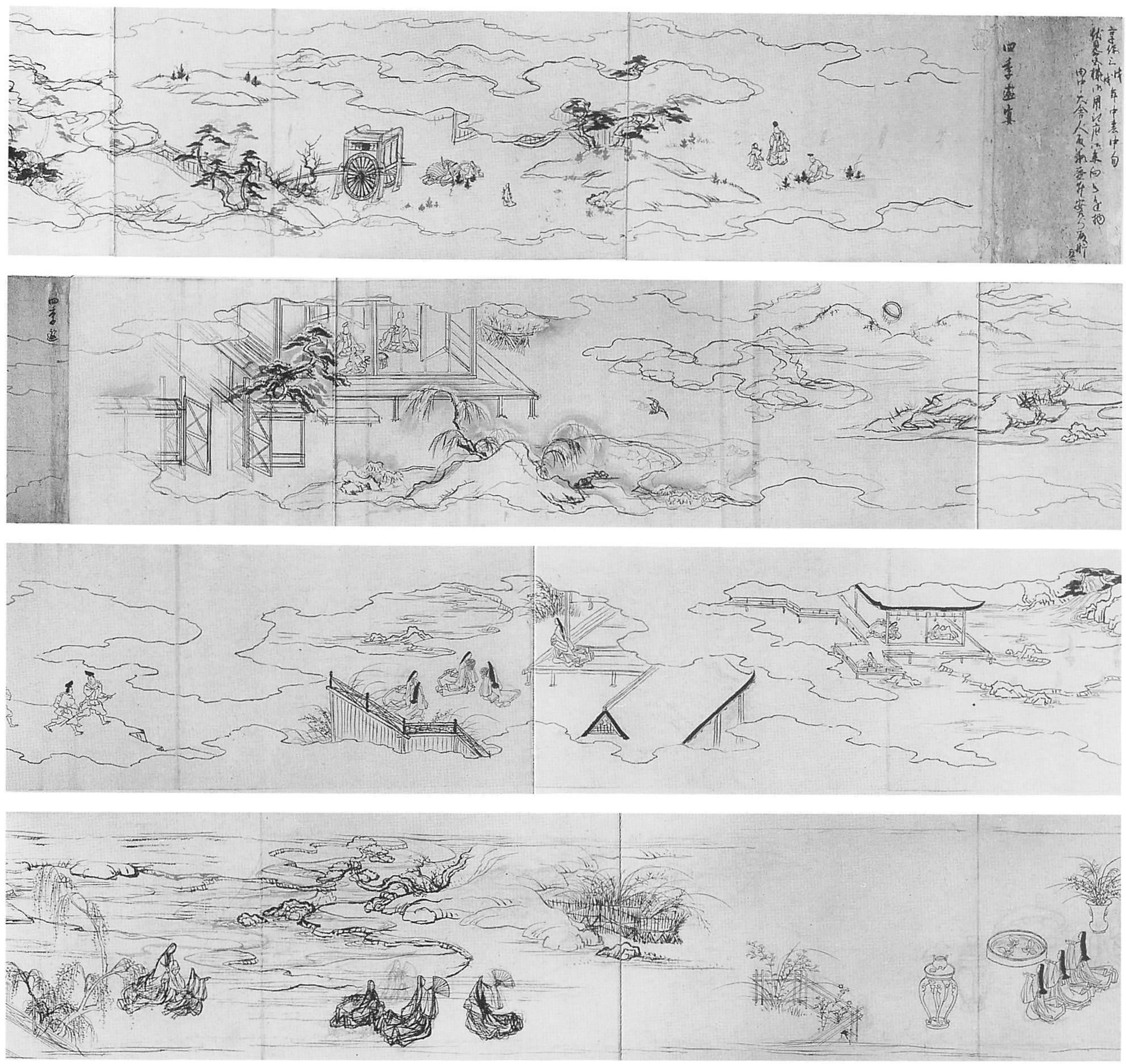
（第一紙裏墨書）上巻　春夏」
（第一紙右墨書）西丸へ献上」三井下総守殿へ」子日」
（第六紙中墨書）葵祭」
（第七紙左墨書）二人獅子丸」四位半ビコン／下重二アイ」
（第八紙中墨書）井印」アカ／アカ」
（第九紙右墨書）井印ノ所ニ」ツケ物牡丹ニシテ」クロキ毛」

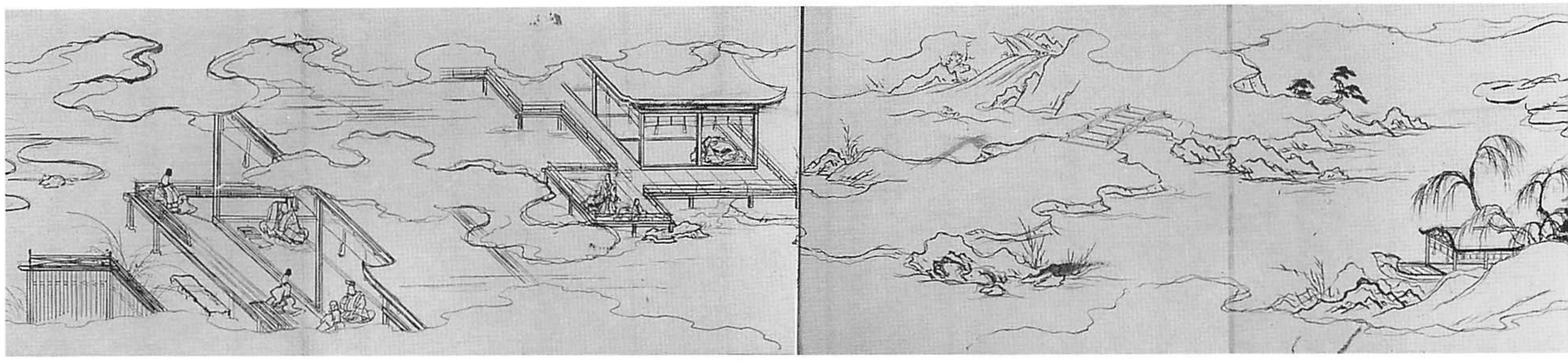


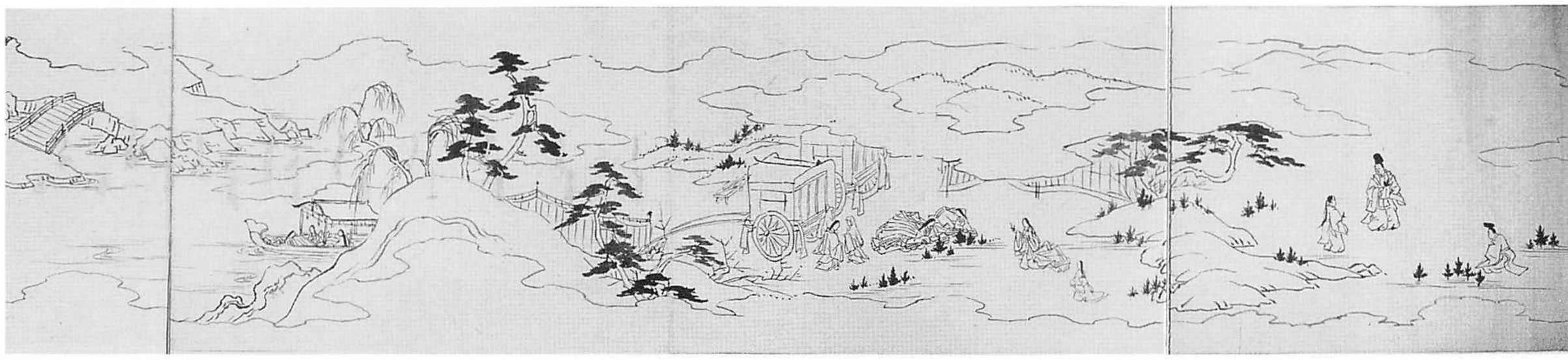


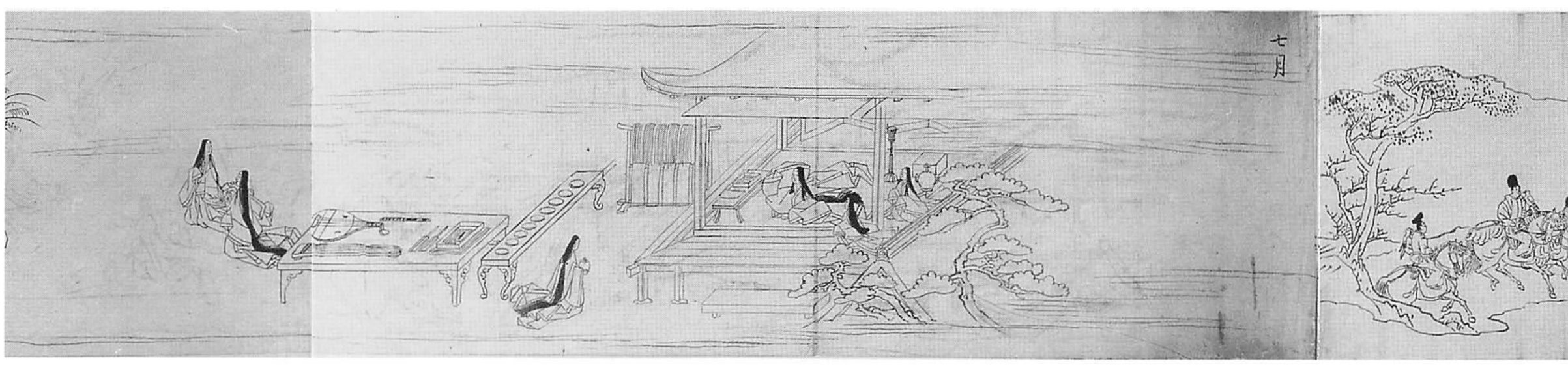
31　四季行事絵巻　（二三五―二）
紙本墨画　一巻　三〇〇×四二八五
十紙継、焼筆あり

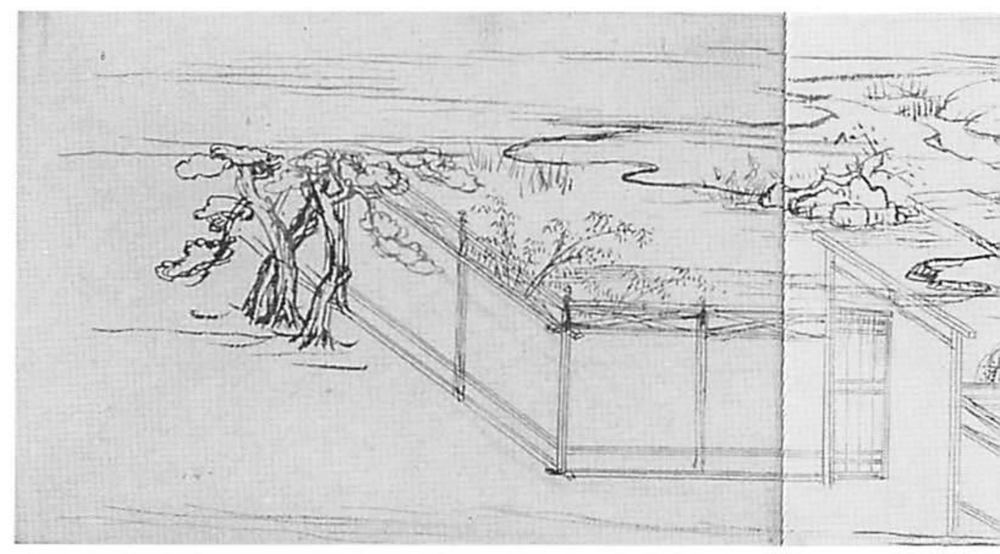
（第一紙裏墨書）下巻　秋冬」
（第一紙右墨書）西丸へ献上」三井下総守殿へ」駒迎」四位殿上人」
（第三紙中墨書）鷹狩」
（第八紙右上墨書）雪」


四季盛景









32　四季遊宴絵巻　（二四四）

紙本墨画　一巻　二八五×九四五七

享保三年（一七一八）

（第一・二紙継目朱文鼎印）藤原／光武」藤原／光武」

二十七紙継、胡粉修正あり、焼筆あり、

四季遊宴絵巻二巻と年中行事絵巻一巻を合装

（第一紙墨書）享保三戊戌年中春中旬／伏見宮様御用江府御参向御進物／囿中大舎人殿承壺井安左衛門殿肝／煎」四季遊宴」

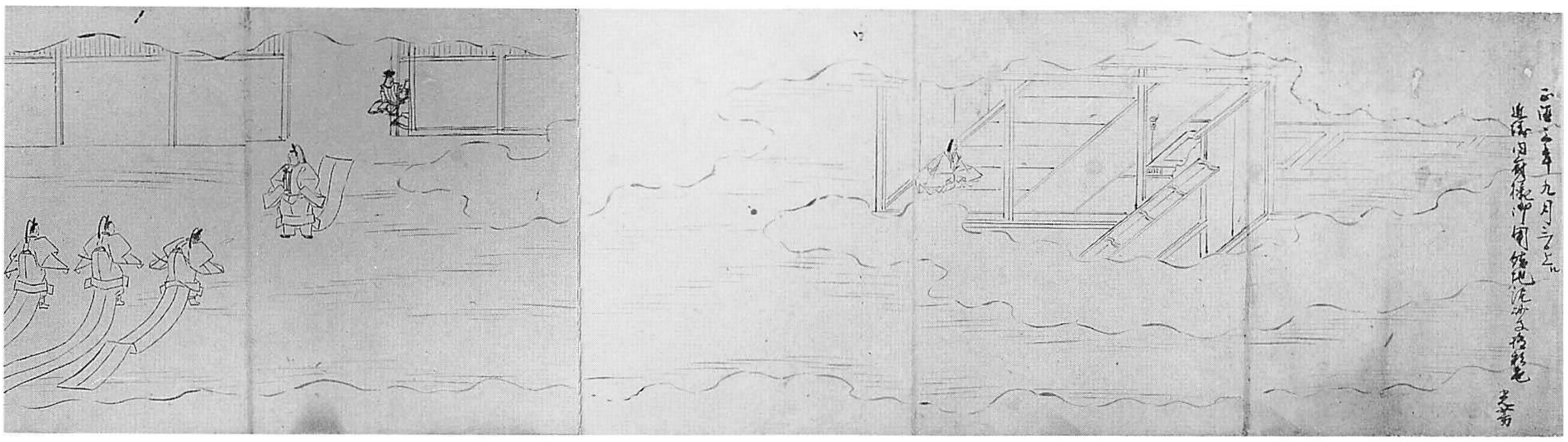
（第十四紙右墨書）四季遊」

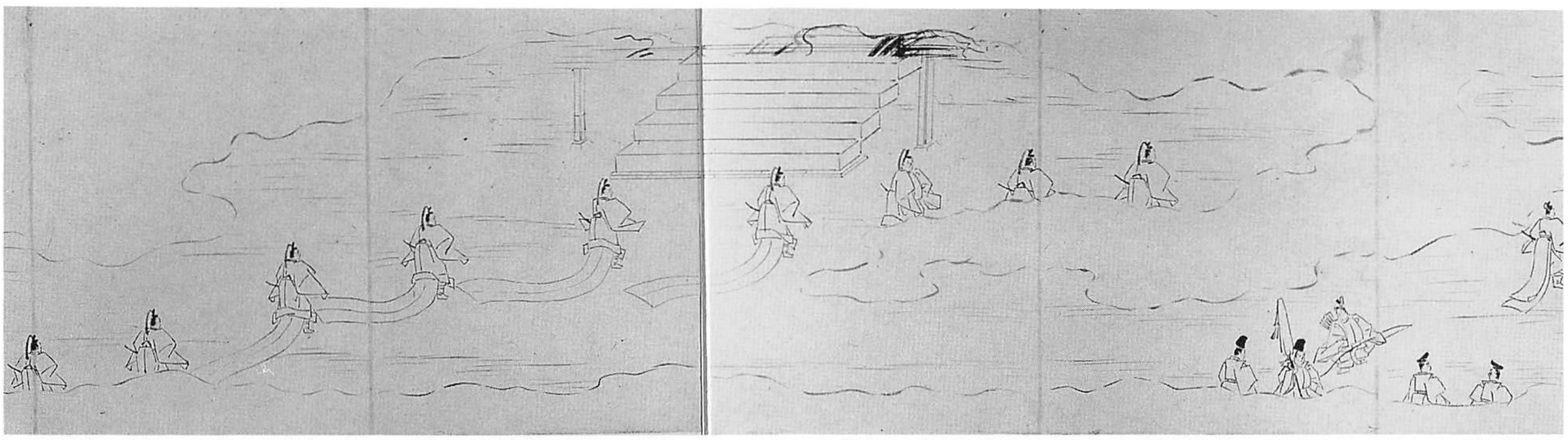
（第二十一紙右墨書）七月」

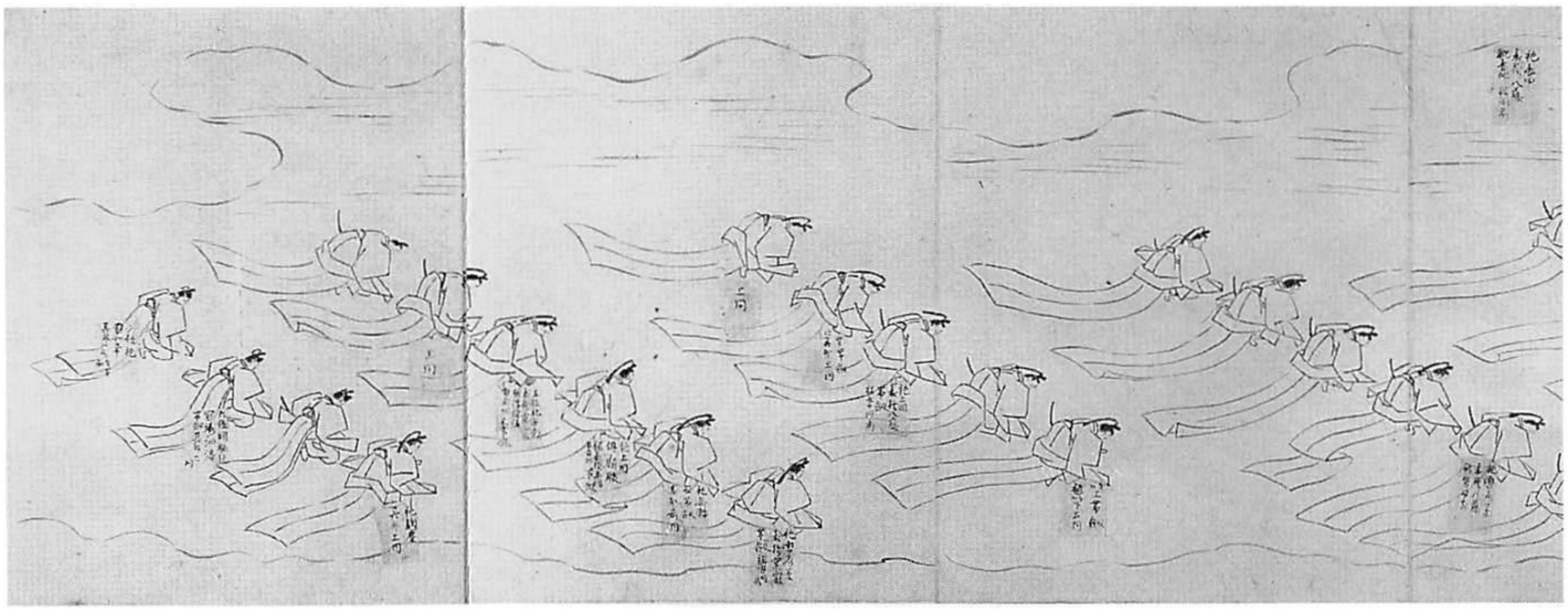
［画中墨書］

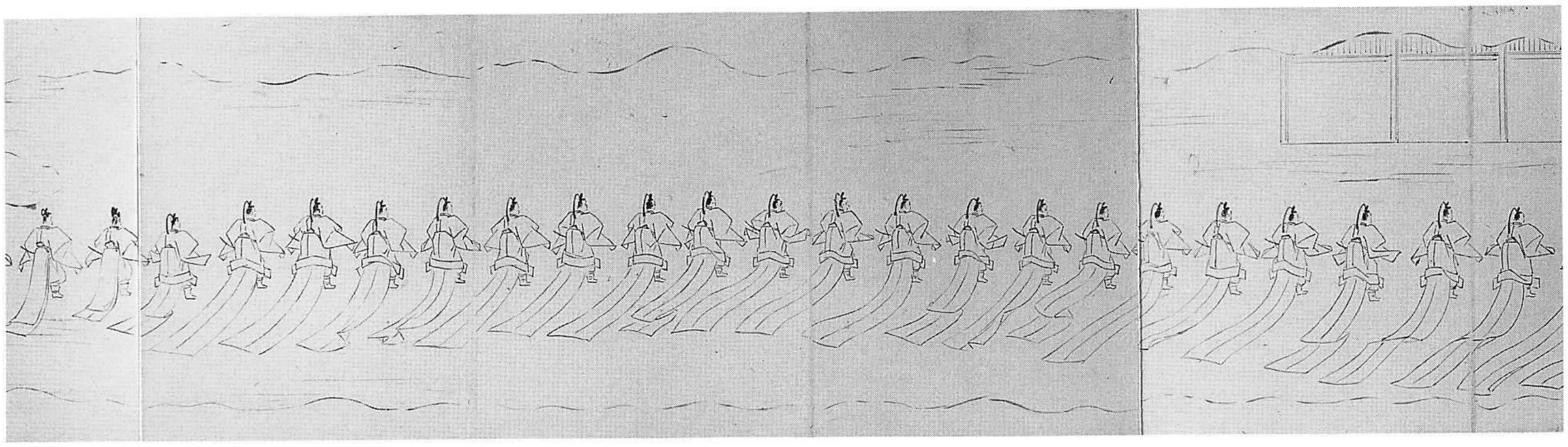
（第三紙女房）ケシ」

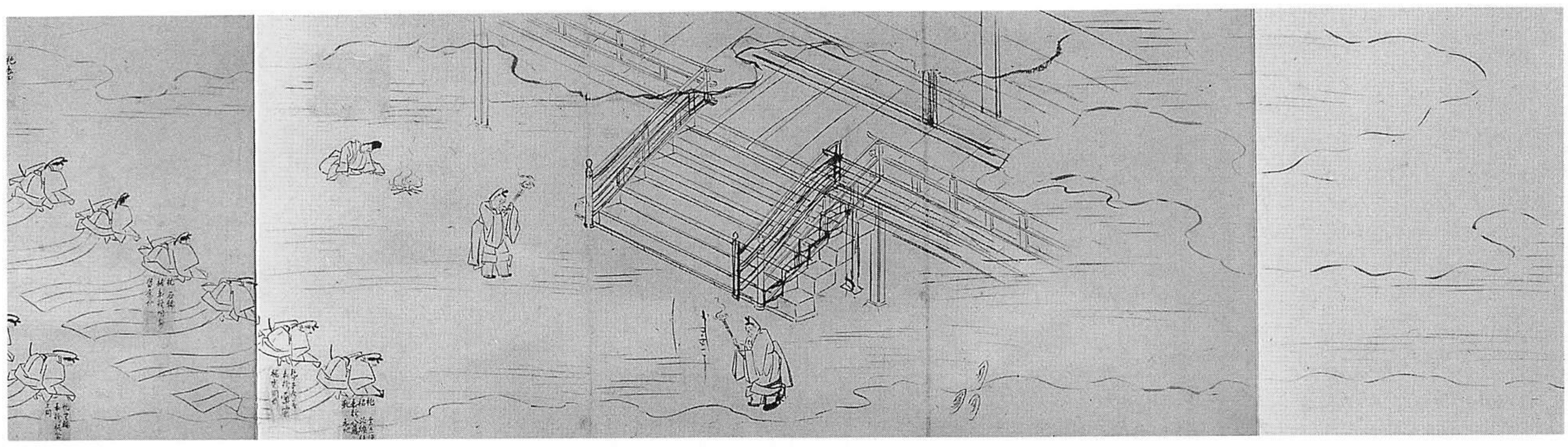
（第三紙車）紫」同」ミス」ミス」











33　年中行事絵巻　（二三九）

紙本墨画　一巻　三五三×六〇一五

正徳三年（一七一三）

土佐光芳

二十二紙継、焼筆あり

（第一紙右墨書）正徳三年九月三日上ル／近衛内府様御用絹地泥砂子極彩色／光芳」

（第十七紙左下墨書）■（スミケシ）ココマテ」

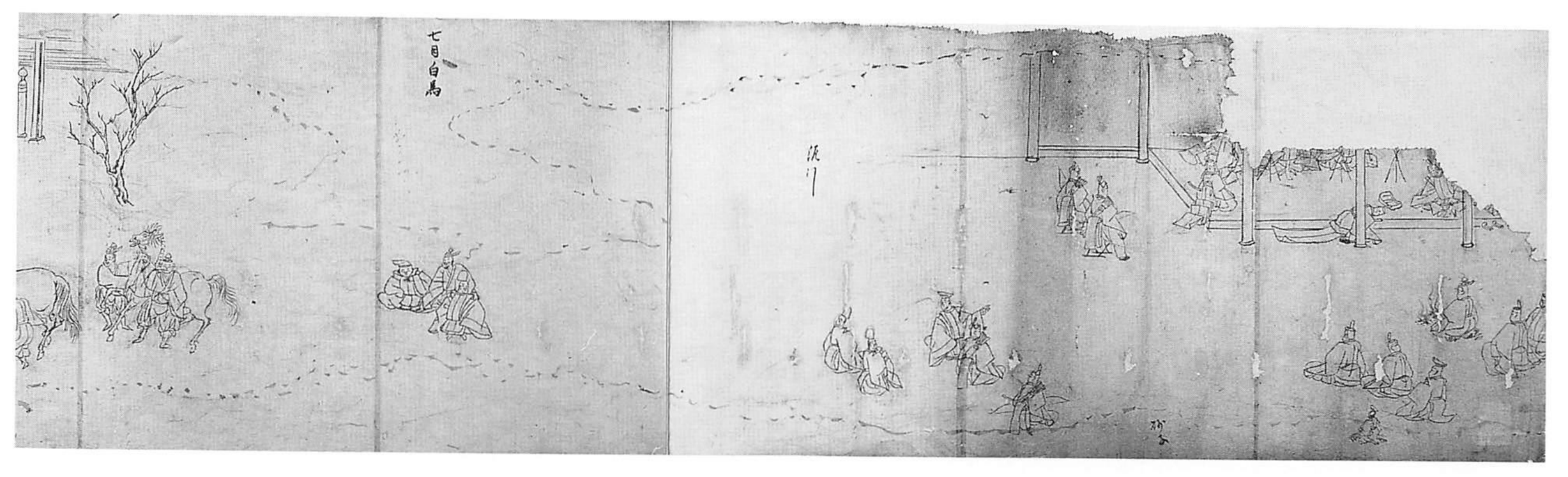
（第十八紙貼紙墨書）袍　雲立涌／裾　浮線綾／表袴八藤／靴　赤地」袍丁子唐草／表袴窠霰／裾沓同前」

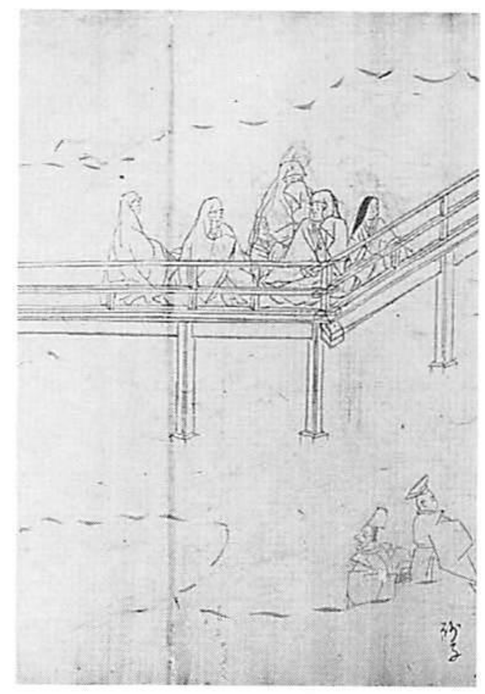
（第十九紙貼紙墨書）袍　無輪／裾表袴同前／沓赤地」袍亀甲／表袴八藤／靴青地裾同前」袍無輪／表袴裾沓／上同」袍轡唐草／表袴八藤／裾沓同前」

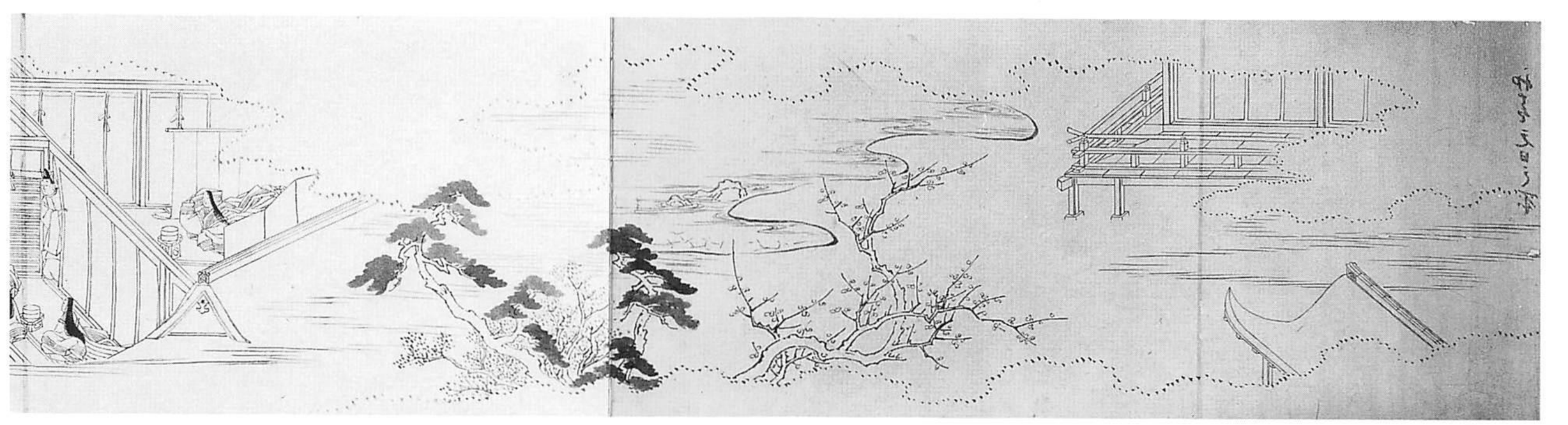
（第二十紙貼紙墨書）此上帯剣／袍此下上同」

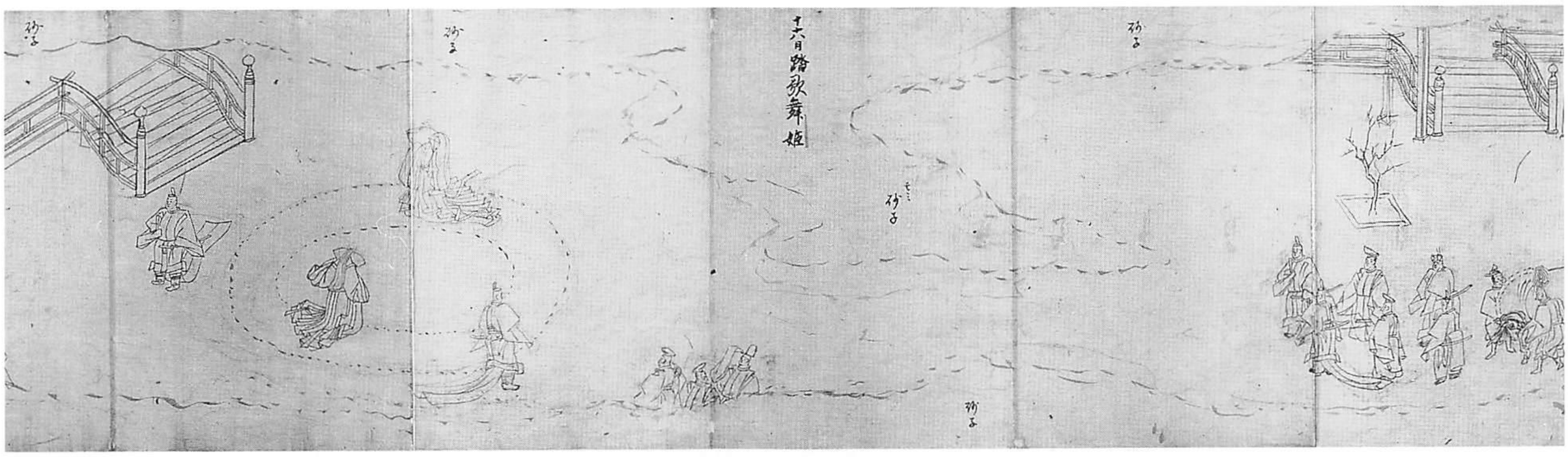
（第二十一紙貼紙墨書）袍上同／表袴八藤／帯剣／裾沓同前」無帯剣／其外上同」上同」袍轡唐草／表袴窠霰／帯剣裾沓同／前」袍上同／但シ闕腋／裾表袴平絹／沓青地　帯剣」五位袍無輪／表袴窠霰／裾浮線綾／沓赤地不帯剣」

（第二十二紙貼紙墨書）上同」袍麴塵／其外上同」六位闕腋袍／冠纓細縷／帯剣其外上／同」六位袍／冠如常／其外上同／無帯剣」


七目白馬





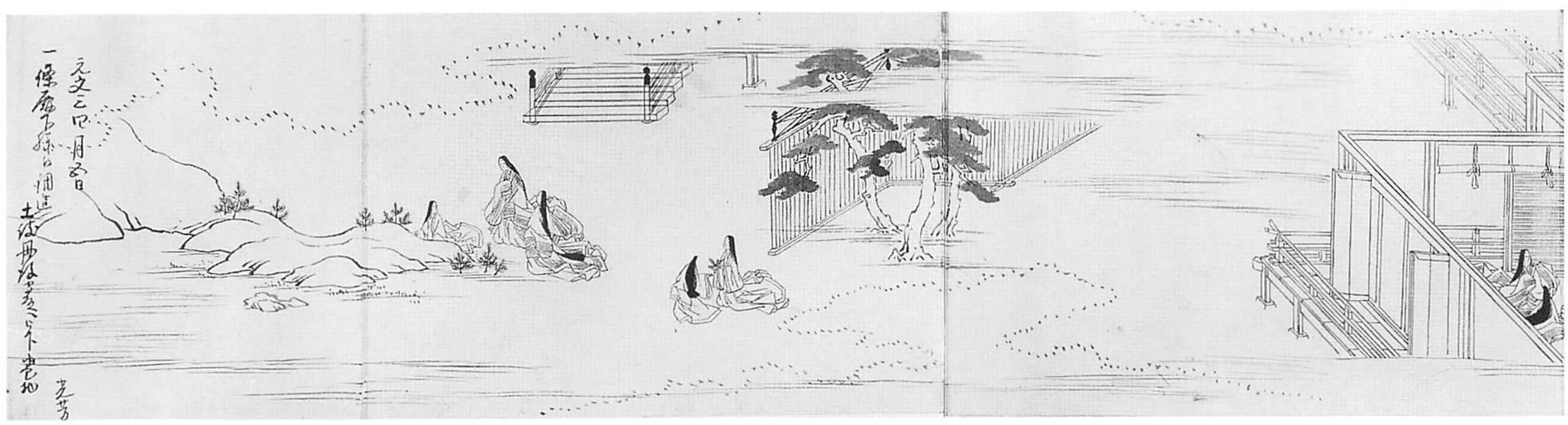


34　年中行事絵巻　（四一七）

紙本墨画　一巻　三四四×二六三五

十二紙継、焼筆あり

（第二紙下墨書）砂子」
（第三紙墨書）泥引」
（第四紙左墨書）七日白馬」
（第七紙上墨書）砂子」
（第八紙墨書）砂子」モミ／砂子」十六日踏歌舞姫」
（第九紙上墨書）砂子」
（第十一紙墨書）砂子」砂子」



35　元日絵巻　（二三四）

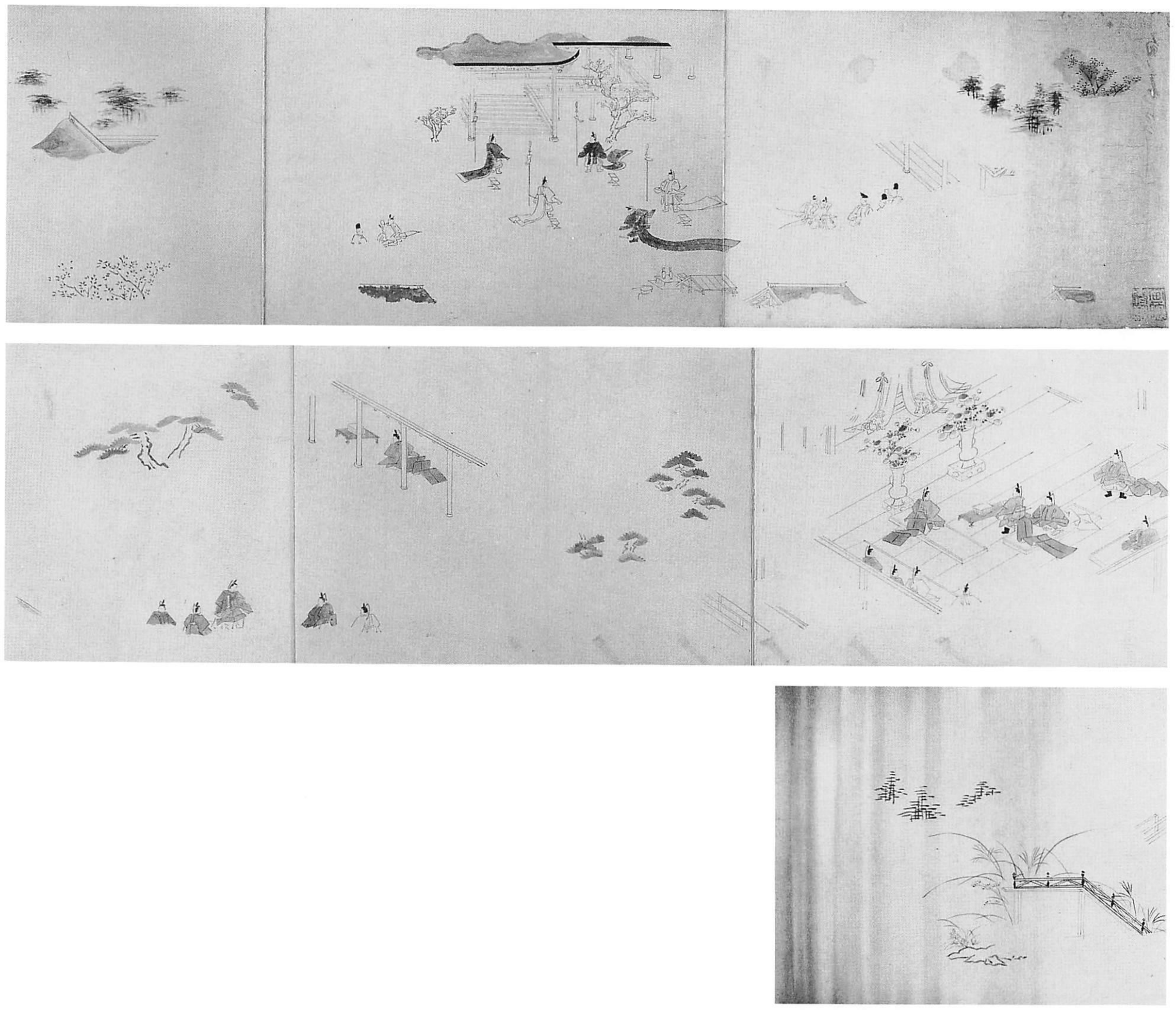
紙本墨画　一巻　二六七×一九九五

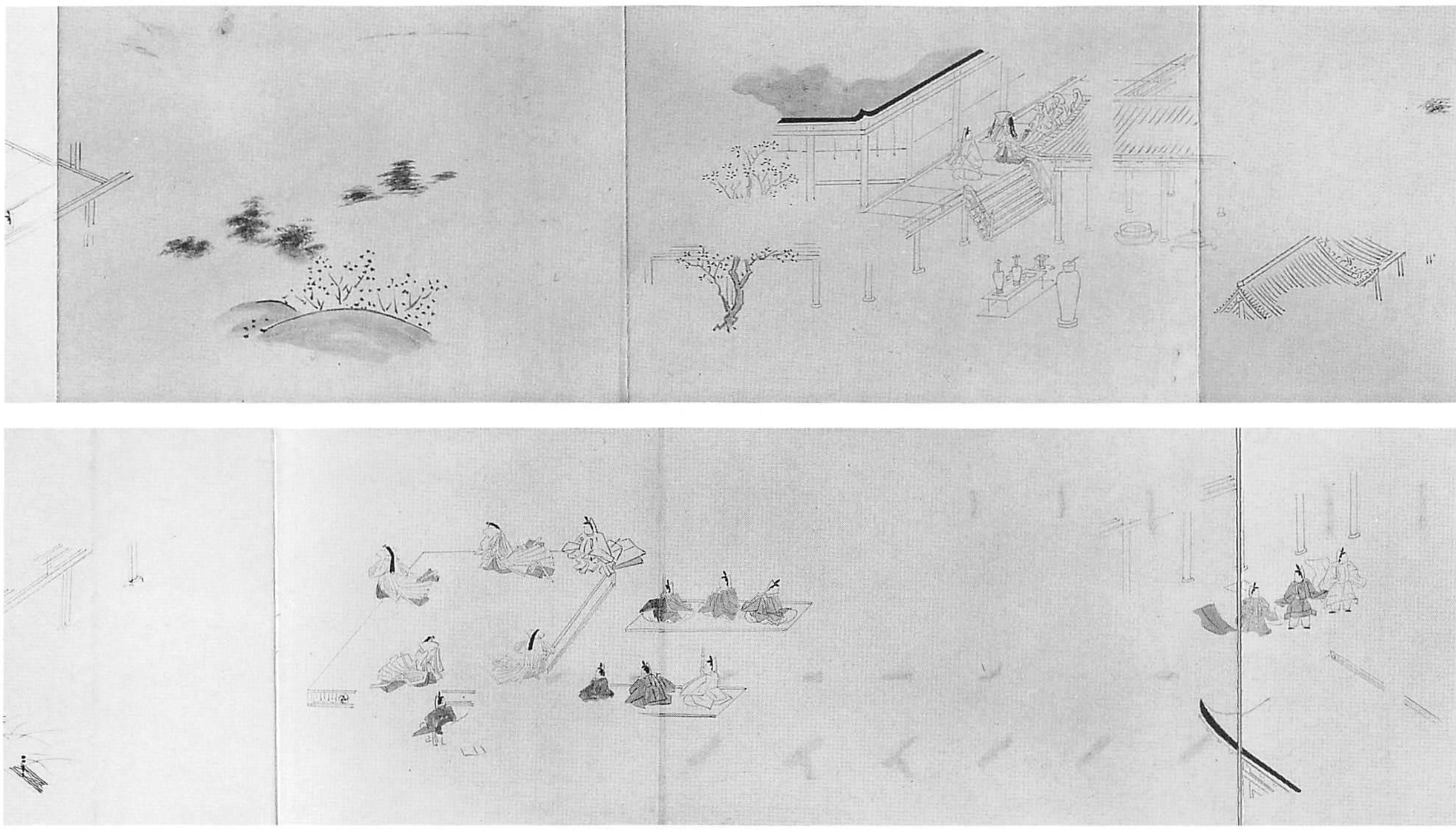
元文三年（一七三八）

土佐光芳

六紙継

（第一紙端裏書墨書）初春元日之所」
（第五紙左墨書）元文三四月五日／一條殿下様御調進／土岐丹後守殿へ被下巻物／光芳」





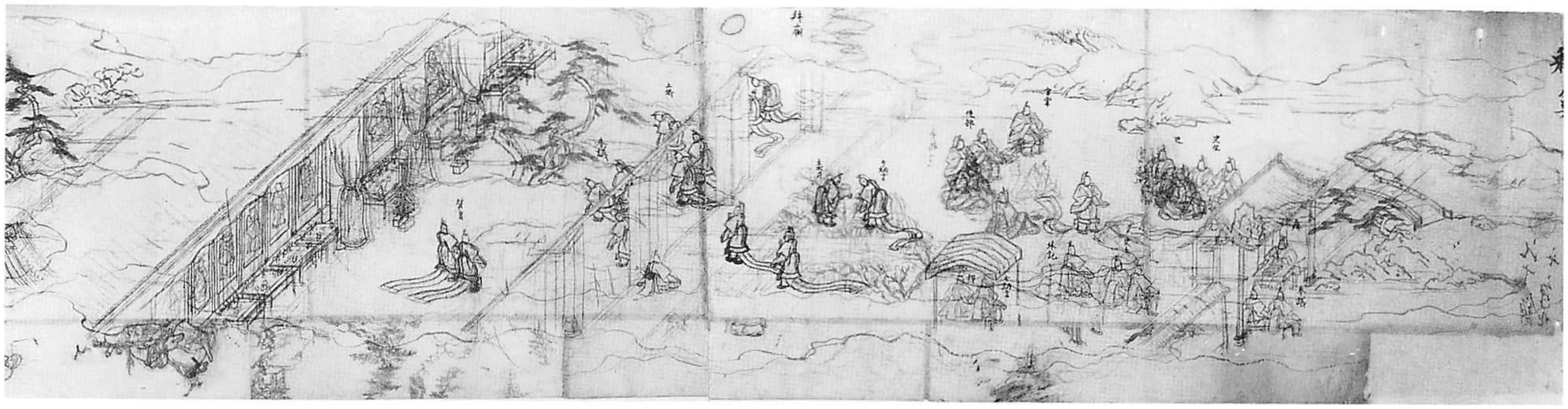
36　重陽絵巻　（二六一）

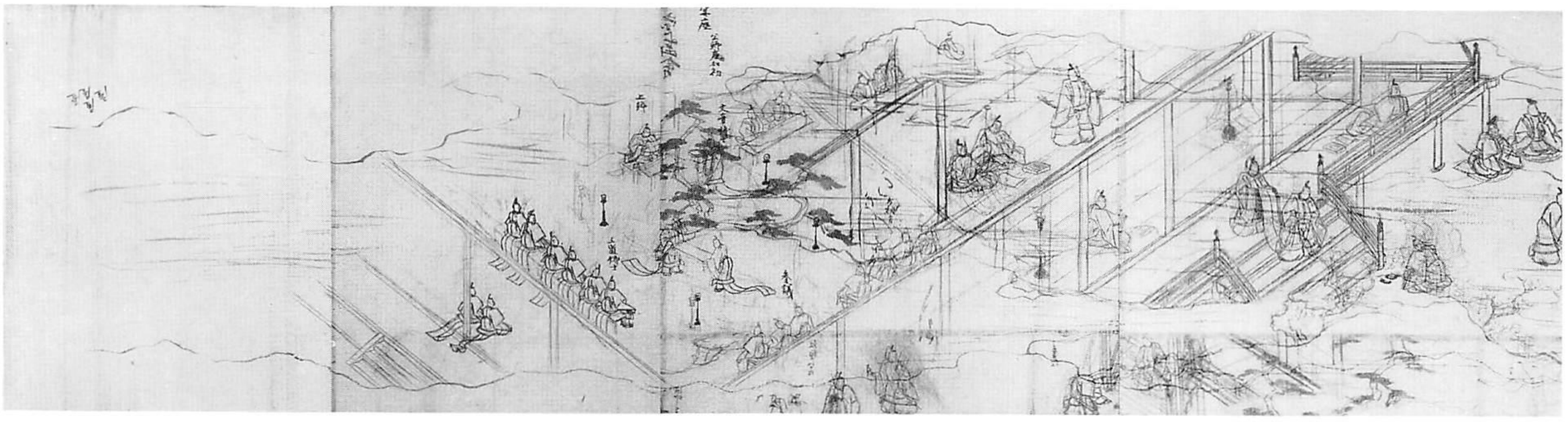
紙本墨画　一巻　三〇七×四七五〇

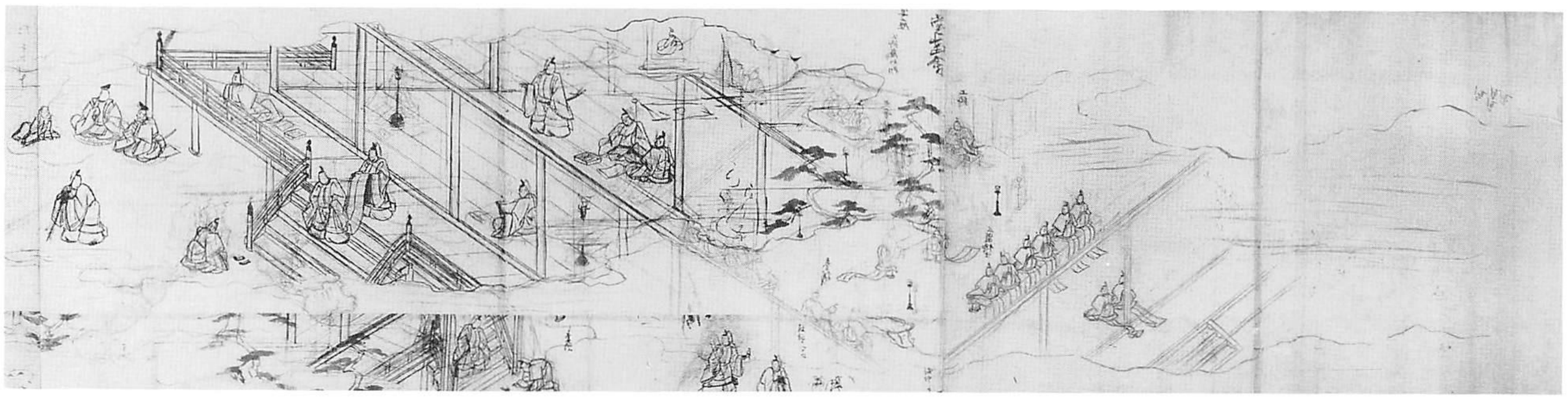
（第一紙右下朱文方印）画院／待詔」

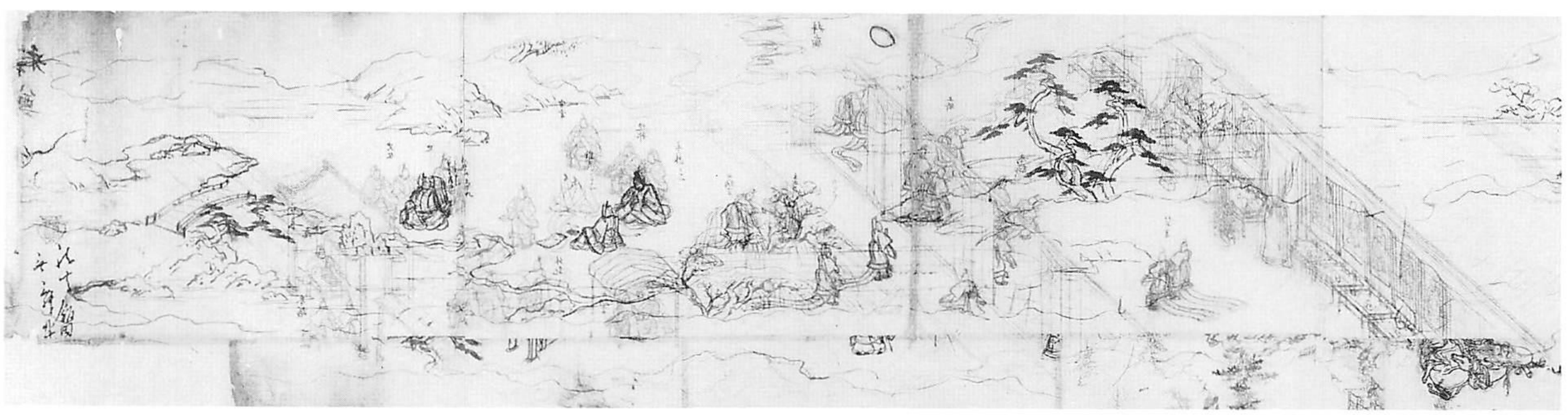
十一紙継

（第一紙端裏墨書）菊ノ宴写し」









37　釈奠絵巻　（二一九）

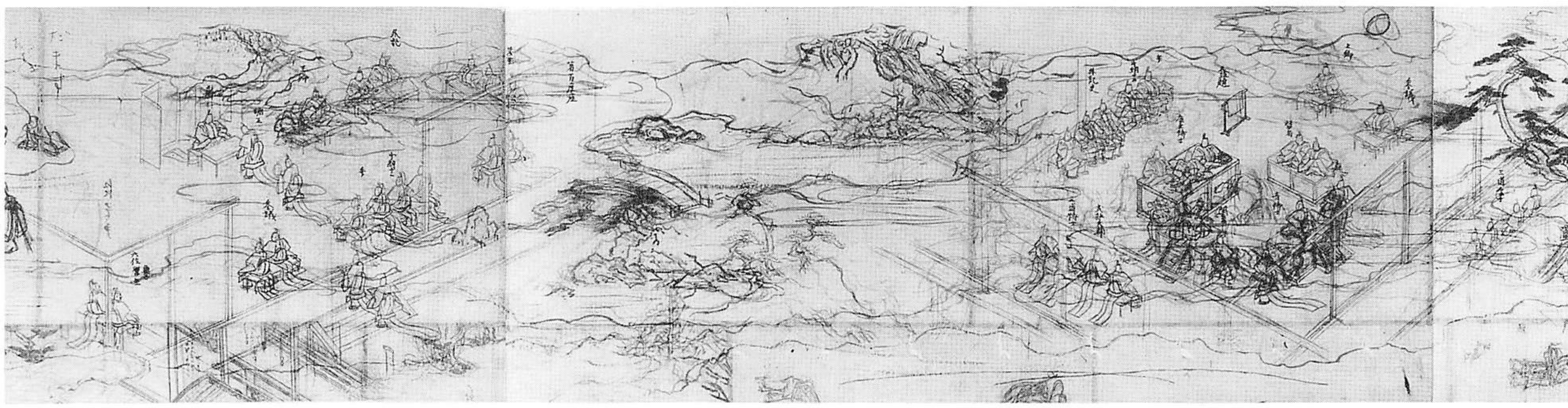
紙本墨画　一巻　三五〇×四〇九〇

（第一紙裏右下朱文鼎印）藤原／光武」

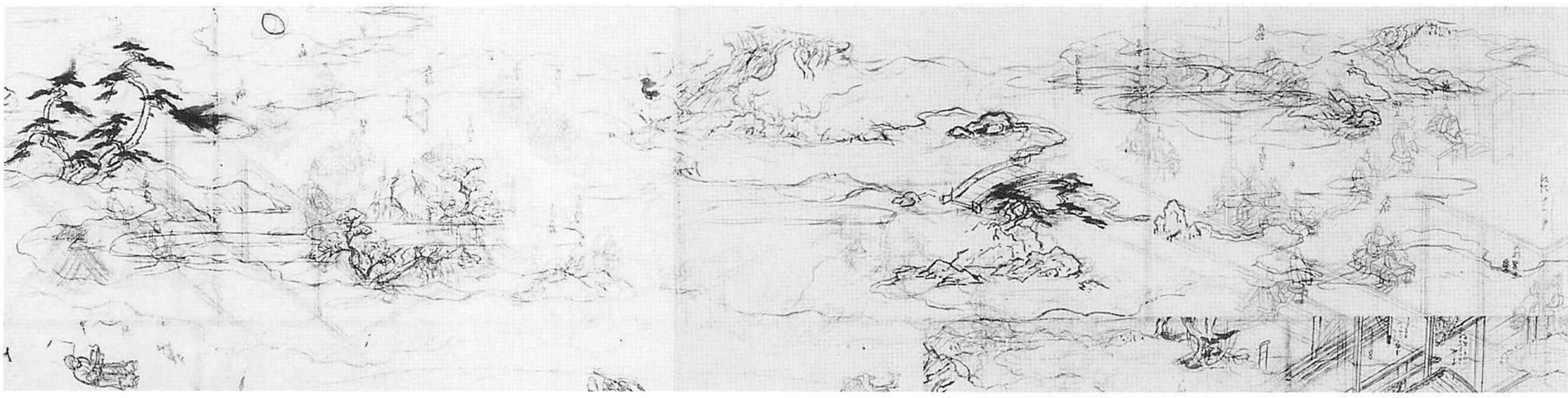
十一紙継、

但し一～九紙下部に紙継あり、

裏に尚歯会図あり



（表　釈奠図）



（裏　尚歯会図）

（第一紙端上墨書）釋奠」
（第一紙左墨書）上卿」参議」史生」史」
（第二紙墨書）史生」外記」官掌」使部」少納言」辨」少納言」主水司」拝廟」
（第三紙墨書）上卿」参議」賛者」
（第四紙墨書）三道学士」
（第五紙墨書）参議」上卿」賛者」音博士」發題」座主博士」問者」弁」少納言」式部大輔」外記史」三道博士」
（第六紙墨書）著百度座」学生」
（第七紙墨書）外記」少納言」弁」王卿」参議」酒正」上卿」六位学（スミケシ）（學）生」だます」
（第八紙墨書）すだま」
（第九紙墨書）少納言」弁」参議」文章博士」公卿座如初」宴座」
（第十紙墨書）上卿」三道博士」
（第十一紙墨書）屋／屋／屋／屋」
（第九紙裏墨書）尚歯會」維光」顕廣」頼政」永範」
（第九紙裏下紙継）成仲／七十四」敦頼／八十四」季經」
（第八紙裏墨書）ケシ」重家」清輔」成仲」季經」敦頼」
（第七紙裏墨書）敦頼此所ニ書」
（第七紙裏下紙継）清輔／六十九／クロワナシ／指貫あさき」重家／クロワナシしカラクサ／アサキ藤丸」柳トシテ」
（第二紙裏墨書）サクラ」永範／七十一」維光／六十三」頼政／六十九」
（第一紙裏墨書）クロワナシ／アサキ藤丸」此所上テ可書」新古（カカカカ）飯田／無舞楽」

絵巻粉本（一）　本文釈文

＊本巻収録の絵巻粉本中、テキストが筆写されたもの六点に対しては、目録本編に割愛したので、ここに全て翻刻した。

〈目次〉

1．東北院職人歌合　（五番本）　56
2．東北院職人歌合　（十二番本）　57
3．東北院職人歌合　（十二番本）　60
4．東北院職人歌合　（十二番本）　61
6．鶴岡放生会歌合　66
11．三十六歌仙絵巻　70

1．東北院職人歌合　（五番本）

二番　」　（第二紙）

左

月にねぬやと、や人のおもふらむ
いつもたえせぬあひつちのをと

右

すみかねのなをりをたゝす身なれ
ともかたふく月にかうはりそなき

左なたらかに侍り但おほかたの宿
ならひしよまれたり右ことはつゝき

三番　」　（第三紙）

左

わかやとの砥水にやとる月かけの
あやしやいかにさひてみゆらん

右

つきかけをもゝたひみかくあらしかな
これやますみのかゝみなるらん

右の哥たよりいみしくとりよられたり

この哥楊州の百練鏡の事　せ

おもひてよろしく侍れとも心の中
いますこしおもひ入たる所ありてきこえ
侍り左と勝と申べし

きみゆへにきも
わかみひとつそきえなかりける
とふ人をまつとせしまにまかねふく
きびのなかやま跡たえにけり

左さしたる難なし右ふるきま
四事をめつらしくとりなされたり
持にや

左　」　（第四紙）

ひくしめのうちへないりそよハの月
さはかり雲のこゝろゆかぬに

右　」　（第六紙）

おほつかなたれにうちいれて月かけの
のころもをぬきてはるらん

左右ともに優にきこえ侍り右いま
すこしわか身におもひしられ所
あり右勝にや侍らん

君とわれくちをよせてそ寝まほしき
ゝみもはらもうちたゝきつゝ

かこひハかたをくれなるすくろくの
れても人にあはんとそおもふ

左恋のこゝろあさからす右たより
おもしろく侍り持と申へし

番　」　（第七紙）

をみてさても過へき身なりせは
ハもしほのけふりたてしを

まやもるいゑちのつきをすてをきて
かしもかくや世をわたりけむ

左哥心詞ともにいひしられて哥なとハ
かくこそよまゝほしけれたれ人そと

心の中おもひしられて心にくゝこそ
右哥尋陽の江の月を存せられたり

まことに清嵐更月の扁舟
おもひやられてあはれにきこえ侍り但

哥すかたもしほの烟たちまさりて侍り
事ハかたしくなみのうきまくら

らみぬ袖ハぬるゝ物かハ
のちにも身にもかへんとおもえとも

ふことをうる人のなきかな
左の哥いかにしていてき侍けるそや

世のすゑにハありかたくこそ侍れ右の
哥題ハたしかにみえて心ことはを

よふへくも侍らすされハ左勝にや
者　經師　」　（第九紙）

まさらになにさやけしとおもふらん
りかた木なる秋の夜の月　」　（第十二紙）

2．東北院職人歌合　（十二番本）

建保第二乃秋の比東北院の念佛に九重
の人〳〵男女たかきも賤しきもこそり侍し
にみち〳〵のものとも人なミ〳〵にまいりて
聴聞し侍けるに時し九月十三夜の月く
まなかりけるに心ある人ハ哥よみ連せ歌をよみ迎歌な
〃〃
て心　ましゝゝゝ
しく卿をすしつゝあひけるをうらやましと
〃
やおもひけん道〳〵のものとも心をすまして〃
へるに
あそひけるに月やう〳〵山のはに入なんとする
〃〃〃〃
おりふしをの〳〵今夜の名残こそなくさめ
かたく侍れかくて八雲乃烟立はなれなは
何事をかは思出にせん我も人も心の色を
あらはして木董のなれ世のかたみにせんとて
みつくきなかれ

哥合を
題　月　戀　作者
左　右
醫師　深草　桂女　陰陽師　檜物師
佛師　紺掻　商人　經師　船人
鍛冶　塗師　番匠　數珠引
刀磨　博奕打　鎗物師　大原人
巫女　針磨　盲目　泉郎
壁塗
莚打

左　醫師
むら雲乃かゝれる月のくすりには
夜はのあらしそなるへかりける
右　陰陽師
再拝やたかまの原にすむ月に
あまのやへ雲かゝらすもかな

左乃嵐めつらしくとりよせて心詞ともにいひし
られて侍る右哥初句耳にたちて侍た
かまの原といふすゑにあまの八重雲をむ
すはれたる病にやされは左勝

（第一紙）

左持
君ゆへにこゝろとつけるやせやまひ
夫はぬつきめに灸治してミん
右
あもひあまり夫には鬼気の祭して
おるしみえぬ御神楽そうき
興
左右いつれも真にきこえ侍判者の及
しところにあらすいつれを勝とも定
わ
かたしふたりのおとこをにきかねて生田河
女の
に身をなけし心ちし侍り
左　佛師
さみをくみそきあらはに月すめは
とへはくひくこゝちこそすれ
右　經師
びはて、文字かたもなきすりかたき
よひの月にあらはかさはや
左哥風情よろしく侍り但きさみたらんみ
そきにはくひきたらんハけに〳〵しからすや
かねてはくひく事や侍るへき右月を
ほめたるたよりさもとおほえはへり哥すかたも
事の外左にはたちまさりて聞え侍り
仍為勝
左勝
ふ事ハかたゆかみなる居佛の
き名をたにもたゝはこそあらめ
右
もひあまり露乃夜すからうつかミの
とにたてゝも人をこはゝや
左哥逢事ハかたしとつゝけんために
よしなき佛をゆかめてよまれたる聊
罪深くや侍らん右哥思ひあまり露
の夜すからうつかミとつゝけられたる
けに〳〵しからすや思ひあまるまし
紙にや侍る思あまるとよますとも
うちてハかく玉章の共たつる錦木共あらハ
こそ其言葉の詮にてハ侍らめ左哥
今すこし聞所あり
仍為勝
左　鍛冶
にねぬ
とや人の思ふらんいつも

（第二紙）

（第三紙）

たえせぬあひつちのをと
右　番匠
すみかねのなをきをたゝす身なれとも
かたふく月にかふはりそなき
左哥こと葉のつゝきおしこめてなたら
かに侍り月にねぬ宿とや人のおもふらん
とて頻にさもなきよしを陳せられたる
無下に心のうちすかすや侍らん右かたふ
月　く
同にとよまれたるこそふかき難にて侍れ
月を題にえてハさかりによむへきなり但
をおしまれたる心さしすてかたし仍右為
勝月
左勝
我恋はなましかたなのかねあまみ
おもひきれともきられさりけり
右
きりすかすなけしのこくちすちりつゝ
いかにをせともあはてこそあらめ
左なまし刀のかねあまミ誠にさもと聞
え侍り右たゝなけしのこくちのあはぬ
はかりにては恋慈の心さしに聞えすこれを
落題とは申なり仍以左為勝
左　刀磨
わかやとの砥水にやとる月かけの
あやしやいかにさひてみゆらん
右　鋳物師
たゝらふむやとのけふりに月かけの
かすみもはてぬありあけの空
左右いつれもたよりありて思ひわきかた
く侍れともかすみもはてぬ有明の空
心はとまり侍り仍右を勝とす
左
夫ゆへにきも、心もときはて、
我身はかりそきえなかりける
右勝
たのめしをまつとせしまにまかねふく
きひのなかやまあとたえにけり
左右いつれもたよりありて思ひわきかた
く侍れともかすみもはてぬ有明の空心ハ
とまり侍り仍右を勝とす
夫ゆへにきも、心もときはて、
＊＊＊＊
（重複）
」
（第五紙）

我身はかりそきえなかりける
右勝
たのめしをまつとせしまにまかねふく
きひのなかやまあとたえにけり
左はしめより終まてあまりにさせる
事なくてき、所なし右詞つゝき
めつらしからすきこゆれとなたらかに
侍り猶右を為勝
左　巫女
ほかたのさはりもしらす入月よ
くしめなはをこゆな夢〳〵
右　盲目
くれとも手にもさはらぬ月かけの
やけき夜はをかそへてそしる
左哥めつらしくとりなされたり但あまり
に風情をめつらしく月に心さしなく
きこゆ右哥心詞艶にしてよく〳〵
和哥の道をしれり藤原範永か
山家月の哥にもはつへからす仍
右可為勝
左持
夫と我口をよせてそねまほしき
つゝみもはらもうちたゝきつゝ
右
河くはかねりちかひたる戀路には
原にまよふここちこそすれ
左はこと葉すくなくして風情めつら
しく右先心催一興勝劣不分
分明為持
左　深草
月ゆへにうちへもいらてとにたては
やうのものとや人のみるらん
右　壁塗
もらつちをかさねてしろき月をみて
しろこしまてのむかしをそしる
右哥五文字耳にたちて侍れとも漢家
三十六宮の心を存られたり證文たしかな
るにつきて勝とすへし
左持
とめ見しかはらけ色のきぬかつき
にちきりやふかくさの里
右
のへともしたちよはなるふるかへの
、こほれなる我なみたかな
＊＊＊＊
（第六紙）
」

（第七紙）

左詞のたよりを存て戀の心もたし
かに聞ゆ右たゝこほれなる我涙哉と
よみたる姿見所有ておもしろく侍り
仍持たるへし
左　紺掻
月すめは夜はの嵐の色あけて
むらこにみゆる杜のしたかけ
右　筵打
うちおける恋のさむしろいたつらに
ねぬ夜の月にしくものそなき
左風情めつらし〳〵とりなされたり
題を五文字にすへられたる聊耳にたち
侍り右戀のさ莚さもとおほえて大江千里
かくもりもはてぬ春の夜とよミけん
事思ひ出られて今すこしねぬ夜
の月に心ひかれ侍り
左
」
（第八紙）

うとくなる人のこころのはなあさき
いくしほそめて色あかるらん
右勝
かりすかす菡田乃ほそ江のうきぬなは
くるしきものをしたのおもひは
左古哥の心をめつらしくとりなして誠にいひ
しりて侍り心詞艶にして哥の姿を
兼たりたとへは梅林の風前に仙方の雪
かとうたかひ紫藤の露の底に崑崙
の玉をあらそひて紅紫二の色浅深
弁かたし右の哥のうきぬなは今
すこし上手のしハさと覚て住吉玉津嶋
も定めてゆるし給ふらん仍勝とす
左　塗師
わかやとのゑほうしきぬをいかにせん
ぬる夜すくなき月のころかな
右　檜物師
おけしりのおほろけならぬなかめより
もるもくるしきのきの月かけ
左ぬる夜すくなき心さもと聞ゆるに胸腰句
かきあはすしてた、の直垂に薄色
のさしぬきなとをきたらんやうにおほえ
侍り右の五文字しなをくれて聞にく、みえ侍
又月のもるをくるしとはいかやうにそへ
られたるにか心えかたく侍持と申へし
」
（第九紙）

左勝
露とのミふりやる袖のなミたこそ
つちむろしてもほされさりけれ
右
おしきひく杉のまさ板ふししけミ
よこめをもせてあふよしもかな
左露とのミぬりやる袖も誠にとひあまれる
心をさきたて、詞つかひ詮をあらはせり
右の五文字事の外に品をくれて上下か
きあはす侍りふるき人も女のわらはへの
かふしと哥五文字とはなたらかになれ
とこそ申して侍れ仍左為勝
左　博奕打
おほつかなたれにうちいれて月かけの
雲のころもをぬきてみゆらん
右　船人
しはしミんあまけの空の夜嵐に
雲のみなとをいつる月影
左我身をつみてたれにうち入てとよめる
心さしはかなく聞えてこれも一つのすかたなり
右哥ハ心詞たくみにして當世の和哥の
道をしれり此すかたをたとふれハ楚王
臺上夜琴聲とおほえて感涙を
さへかたし仍右可為勝
左勝
わりたて、きほひはてたるいりかねの
あはしとすまふこひもするかな
右
こかるれとかけて心をつくしふね
ちきりし事をおもひもそする
左なたらかに聞え侍り右古哥の下句を
さなからとりてふなこと葉にひきもと
されたる無下にて徒らにや侍らん仍以左
為勝
左　針磨
うりのこす我數はりをまきすて、
ひろふはかりにすめる（スメル）月かけ
右　數珠引
さやけさは秋をためしにひくす、の
露よりつたふ袖の月影
左ふるき風情をめつらしくとりなされていと、優に
聞え侍り人丸か哥の心にや右上下よろしく
侍るに露よりつたふ袖の月影今一しほ
の色をそへて心くるしく侍り仍右を勝とすへし
左勝
やせほそる我身よされははりになる
つれなき人のてにやか、ると
」
（第十紙）

右
君もこす我もかよはぬ中なれは
ろくろひきにてあはぬころ哉
凡彼是いつれも心有て勝劣弁かたし
但左今すこしおもひ入たる所ありて哥
姿まさりてや侍らん
左　桂女
かつら川ふる河のへのうかひふね
いく夜の月をいとひきぬらん
右　大原人
すみ木つむ山路のいほにたつけふり
こよひの月にこゝろよはかれ
左かつら川ふる河のへとつゝられたる證
哥の侍るにや萬葉集よりはしめて
代々の集にも泊瀬川ふる河のへとこそ
つゝけられ侍めれ又鵜かひ舟に月を
いとふならひハさる事なれ共題の心に
そむけり右哥姿よろしく侍るうへにこよひ
の月に心よはかれとよまれたるちから及はす
右の勝と申へし
左
こひわひて瀬にふすあゆのうちさひれ
ほねとかはとにやせなりにけり
右勝
うき身には數はつかしくゆふはきの
そのむすひめもあらはこそあらめ
左ハ誹諧の哥の姿にて當世の風情には
あらす右何となくなたらかにて能々此道
をしれる人のしわさなるへし大原の里にハ
神のちかひにて男になれたるかすをあし
のくへにゆふ事の侍るとかやそれもあはね
のくひにゆふ
結ひめなしとよまれたる心のうちをし
はかられて心くるしく侍り仍右を勝とす
左　商人
もろこしの入江乃月をすておきて
むかしもかくや世をわたりけん
右　泉郎
月を見てさてもすくへき身なりせハ
秋ハもしほの烟たてしを
左哥潯陽江の月を思はれたるとや誠に世を
わたる心さし昔も今もかハらぬ事なれハ
范蠡か五湖の浪に棹さし、事思ひ
出られていとゝあはれにこそ右の月をみて
」
（第十一紙）

とをかれたる五文字聊とか也といへども大かたの
すかた浦さひて心のうちやさしく聞え侍仍
今すこし月に心さしふかきにつきて右を勝
とすへし
左
命にも身にもかへんとおもへとも
あふことをうる市のなきかな
右勝
もしほくむならひハさそといひなせと
ことのほかなるわかなミた哉
左逢に命をかへんと思はれたるさもと
おほえて恋の哥ハかやうにこそよまゝほしけれ
紀友則かあふにしかへハおしからなくにと
よみたらんに事此心なるへし
」
（第十三紙）

」
（第十二紙）

3．東北院職人歌合　（十二番本）

八番　左　ぬし
つゆとのミふりやる袖のなみたこそ
つちむろしてもほされさりけり
右　ひもの
おしきゝくすきのまさいたふしししけミ
よこめをもをてあふよしもがな
左露とのミぬりやるそてもまことにし
のひあまれる心をさきたてゝこ
とはにもせんハあらはせり
右いつ文字しなおくれてかみ
しもかきあはすふるき人〳〵も
わらハのかミと和歌の五句とハなた
らかなれとこそ申しつたへたれよ
りてとかなきにつきて左を勝
とす
」
（第十四紙）

九番　左　はくち
わりすてゝきをいはてぬるいりかねの
あハしとすまふ恋をする哉
右　ふな人
こかるれとあはてこころをつくし舟
ちきりしことを思かへする
左なたらかにきこえハへり
右はしめのいつもしさに〳〵とす
恋の句又まてともよはのといへるふ
なうたのしもの句をさなからふな
」
（第一紙）

ことはにつらねたらむけにてつゝ
なきこと侍ハよりて左かちとす

十番　左　はりすり
やせほそる我身よさては針ニなれ
つれなき人のてにやかゝると
右　すゝひき
君もこすわれもかよはぬなかなれハ
ろくろひきにてあはぬ比哉
おほよそいつれも心あり勝劣わき
まへかたしといへとも左いますこ
しおもひいれたる心ありてうたす
かたたちまさりてや侍らん

」

（第四紙）

4．東北院職人歌合　（十二番本）

左　紺掻
月すめは夜半の
あらし乃
色
あけ
て
むらこに
みゆる
森の下かけ
右　莚打
うちをけるこひの
さむしろ
いたつら
に
ねぬ夜の
つきに
しく
ものそ
なき
左風情めつらしへとりなされ
たり題を五文字にすへられ
たりいさゝかにたち侍り右の戀
乃さむしろさもとおほえて大江
千里かくもりもはてぬ春の夜
のとよみけん事思ひ出られ
て今すこしねぬ夜の月に
心ひかれ侍り

」

（第一紙）

」

（第六紙）

左
とくなる人乃こゝろの花あさき
くしほそめて色あかるらむ
右
りすかす薗田のほそえのうきぬ
なは
るしきものをしたのおもひハ
左ふるうたの心をめつらしくとり
なしてまことにかひしりて侍り
心詞艶にして哥のすかたをかね
たりたとへは梅の林の風乃まへに
仙方の雪かとうたかひ紫藤の
露乃底にこんろんの玉をあら
そひて紅紫二乃色浅深わき
まへかたし右哥のうきぬ名にて
今すこし上手乃しわさとおほえ
て住吉玉津嶋もさためて
ゆるし給はん仍勝とす

」

（第二紙）

左　博打
ほつかなたれにうち
入て
月影の
の衣を
ぬきて
ミゆ
らむ
右　舟人
ハしミむ雨氣の
そらの夜
あらしに
乃
みなとを
いつるる
月
かけ
左我身につミてたれに打入て
とよまれたる心さしはかなく
きこえて是もひとつのすかた
なり右哥ハ詞たくミにして
當世乃和哥の道をしれり此
姿をたとふれハ楚王臺上の夜
乃琴乃聲とおほえて感涙
おさへかたし仍右可為勝
左

」

（第三紙）

雲

」

（第四紙）

わりたて、きほひハてたるいりかねの
あハしとすまふ戀もするかな
右
こかるれとかけてこゝろをつくし舟
契りし事をおもひもそする
左なたらかにきこえ侍り
右こかの下句をさなから
とりてふな詞にひきもとされ
たる無下にてつゝにや侍らん
仍以左為勝

」

（第五紙）

左　針摺
ウ
とり乃こす我
かすはりを
まき
すて、
ひろふハかりに
すめる
月かけ
右　数珠引
さやけさは秋を
ためしに
ひく
す、の
つゆより
つたふ
袖乃月かけ
左ふるき風情をめつらしく
とりなされていと、優にきこえ
侍り人丸か哥の心にや右上下
よろしく侍るに露よりつたふ
袖乃月影いまひとしほの色
をそへて心くるしく侍る仍右
を勝とすへし
左
やせほそるわか身よされハ針になる
つれなき人乃手にやかゝると
右
君もこす我もかょはぬ中なれは
ろくろひきにてあはぬころかな
凡彼是いつれも心ありて勝
劣わきまへかたし但左今す
こし思入たる所有て哥の姿
まさりてや侍らむ

」

（第六紙）

」

（第七紙）

」

（第八紙）

左　塗師
わかやとのゑほうし
きぬを
いかに
せむ
ぬるよすくなき
月の比
かな
右　檜物師
おけしりの
おほろけ
ならぬ
なかめより
もるも
くるしき
軒乃
月かけ
左ぬるよすくなき心さもとき
こゆるにむね腰の句かきあ
ハすしてた、の装束直垂ににしき
乃はかまをきたらんやうにお
ほえ侍り右五もししなをくれ
て聞にく、みえ侍又月のもるを
くるしとハいか様にそへられたる
にか心得かたく侍る持と申へし
左
露とのミふりやる袖のなみたこそ
つちむろしてもほされさりけり
右
おしきひく杉乃まさいたふしし
よこめをもせてあふよしもかな
左露とのミぬりやる袖もまことに
おもひあまれる心をさきたて、
詞つかひ詮をあらハせり右の五
もし又事外にしなをくれて
上下かきあハす侍りふるき人も
めのわらハへのかふしと哥の五もし
とはなたらかなれとこそも申して
侍き仍左勝とす

」

（第九紙）

左　鍛冶
月にねぬやと、や
人の
おもふらん

」

（第十紙）

」

（第十一紙）

いつもたえ
せぬ
あひ
つち
の
おと
右　番匠
すみかねのなをきを
たゝす身なれとも
かたふく月に
かふ
はり
そ
なき
左哥つゝきをしこめてなたら
かに侍り月にねぬ宿とや
人のおもふらんとてしきりに
さもなきよしを陳せられたる
無下に心の中すかすや侍らん
右哥かたふく月によまれたる
こそふかき難にて侍れ月を
題に得てハ読むへき也但月を
おしまれたる心さし捨かたし
仍右為勝
左
我こひハなまし刀のかねあまミ
おもひきれともきられさりけり
右
きりすかすなけしのこくちすゝりつゝ
いかにおせともあハてこそあらめ
左なまし刀のかねあまミ誠に
「一行欠」
こくちのあはぬハかりにて恋の
心さしにこえすこれをらくたい
とハ申也仍以左為勝

左　桂女
かつら川ふるかは野への
鵜かひ舟
いくよの
月を
うらミ
きぬらん
右　大原人
すミ木つむ
」
（第十五紙）

」
（第十四紙）

」
（第十三紙）

」
（第十二紙）

山しのいほに
立けふり
こよひ
の
月に
心
よはかれ
左かつら川ふる河のへとつゝけられ
たる證哥の侍るにや万葉より
はしめて代々集にもはつせ河ふる
川のへとこそつゝけられ侍めれ又う
かひ舟に月をいとふならひハさる事
なれとも題乃心にそむけり右の
哥姿宜く侍るうへにこよひの
月に心よハかれとよまれたるちから
もおよハす仍右の勝と申へし
左
恋わひてせにふすあゆのうちさびれ
ほねとかわとにはやなりにけり
右
うき身にはかすはつかしくゆふはきの
そのむすひめもあらハこそあらめ
左ハはいかいの哥のすかたにて當世
乃風情にハあらす右何となく
なたらかにてよく〳〵此道を
しれる人乃しわさなるへし大原
里には神のちかひにて男になれ
たるかすをあしのくひにゆふ事乃
侍るとかやそれもあハねはむす
ひめなしとよまれたる心のうちを
しはかられてこゝろくるしく
侍り仍右を勝とす
」
（第十六紙）

左　刀磨
我やとのと水に
やとる
月かけの
あやしや
いかに
さひて
ミゆらん
右　鋳物師
たゝらふむ宿のけふりに
月影の
かすみも
」
（第十七紙）

はてぬ
あり
あけ
の
そら

左右はいつれもたよりありてお
もひわきかたし侍れともかすミ
もハてぬ有明乃空心ハとまり
侍り仍右を勝とす

左

きみゆへにきも、心もときハて、
わか身はかりそきえなかりける

右

たのめしをまつとせしまにまかねふく
きひの中山あとたえにけり
左始より終まてあまりに捨
事なくてき、所なし
右詞つ、きめつらしからすきこ
ゆれ何となたらかに侍りなを
右を為勝

」

（第十八紙）

左　商人

もろこしの入江乃月を
すて
をきて

むかしも
かくや
よを
わたり
けむ

右　海人

月を見てさても
すくへき
身なり
せハ
秋ハは
もし
ほ
乃
けふり
たてしを

左哥しんやう乃江の月をおも
はれたるにまことによをわる心さ

」

（第十九紙）

」

（第二十紙）

」

（第二十一紙）

しむかし今もかハらぬ事
なれははんれいか五湖の浪に
さほさし、事をおもひ出られて
いと、あはれにこそ右哥月を見て
とおかれたる五もしいささかとか
なりといへとも大かたの哥乃
すかたうらさひて心の中や
さしくきこえ侍り仍今すこ
し月に心さし深きに
つきて右を勝とすへし

左

命にも身にもかへんとおもへとも
逢事をうる市乃なきかな

右

もしほくむならひハさそといひなせと
ことのほかなるわかなみたかな
左逢に命をかへんとおもはれたる
さもとハおほえて戀の哥ハ成
やうにこそよま、ほしけれ紀
友則か逢にしかへハおしから
なくにとよミけん事も此心なる
へし右なへて乃人のしはさ
にも見及ハす侍りよのすえにハ
ありかたく出来たる哥にこそ凡
嶺松雨を含て深夜の夢を
やふる左哥よろしけれとももの
にたとふれは玉と瓦とのこと
仍右勝侍らむ

」

（第二十二紙）

左　醫師

むら雲のかゝれる
月乃
くすり
にハ
夜半の
あらし
乃
なるへかり
ける

右　陰陽師

さいはいや
たかまのはらに
すむ
月
に

」

（第二十三紙）

あまの
八重くも
かゝら
すも
かな
左の嵐めつらしくとりよせて心
詞ともにいひしられて侍り右
哥初句みゝに立て侍たかまのハら
といふすゑにあまの八重雲と
むすはれたる病にやされハ左勝
左恋
君ゆへに心とつけるやせやまひ
あハぬつきめに灸治してミん
右
おもひあまり君には鬼気の祭して
しるしみえぬ御神楽そうき
左右いつれも興にきこえ侍
判者のおよふ所にあらす
いつれを勝ともさためかたし
ふたりの男をわきかねて生田
河に身をなけし女の心ち
して

」

（第二十四紙）

左　佛師
きさミをくみそき
あらハに
月
すめハ
ひとへはく
ひく
心ち
こそ
すれ
右　經師
ちひはてゝ
もしかたも
なきすり
かたき
こよひの
月に
あらハ
かさハや
左哥風情よろしく侍り但きさミ
たらむみそきに薄ひきたらんハ
けに〳〵しからすやかねてはく

」

（第二十五紙）

ひく事や侍るへき右月をほめ
たるたよりさもとおほえ侍り
哥すかたもことのほかに左にハたち
まさりてきこしえ侍り仍為勝
左
逢事ハかたゆかミなるいほとけの
なきをたにもたゝはこそあらめ
右
もひあまり露のよすからうつかミの
とにたてゝも人を恋ハや
左哥逢事ハかたしとつゝけむ
ためによしなき佛をゆかめ
よまれたるいさゝかつミふかくや
侍らむ
右哥おもひあまり露のよすから
打かミとつゝけられたるけに〳〵
しからすやしあんましき紙と侍る
おもひあまるとよますともうちてハ
かてたまつさ乃ともたつるにしき
ともあらハこそそのことハの詮にてハ
侍らめ
左哥いますこしきゝところあ
り仍為勝

」

（第二十六紙）

左　巫女
ほかたのさハりも
らすいる月よ
くしめ
わを
こゆな
ゆめ〳〵
右　盲目
くれとも手にも
さハらぬ
月影の
や
けき
半を
そへてそ
しる

」

（第二十七紙）

左哥めつらしくとりよふたり
但あまりに風情をめくらして
月にこゝろさしなくきこゆ
右哥心詞たかふして能々

（第二十八紙）

（第二十九紙）

わかの道をしれり藤はらの
のりなかか山家月のうたに
はつへからす仍右可為勝
左
きみとわれくちをよせてそねまほしき
つゝミもはらもうちたゝきつゝ
右
かくハかりねりちかひたる恋ちにハ
かハらにまよふ心ちこそすれ
左詞すくなくして風情
めつらしく右左心催一
興勝劣不分明為持

」（第三十紙）

左　深草
月ゆへにうちへも
いらてとに
たてはやうのも
乃とや
人の
みるらん
右　壁塗
しらつちをかさねて
しろき
月をミて
もろ
こし
までの
むかしをそ
しる
右哥五もしみみにたちて
侍れとも漢家三十六宮の
心を存せられたりせうもん
たしかなるに付て右をかち
とすへし
左
ひとめ見しかはらけ色のきぬかつき
われにちきりやふかくさのさと
右
しのへともしたちよハなるふるかへの
たゝこほれなるわかなミたかな
左詞乃たよりを存てこひの
こゝろもたしかにきこゆ右
たゝこれなるわかなミたかな
とよみたるすかたみところあり

」（第三十一紙）

」（第三十二紙）

」（第三十三紙）

ておもしろくはんへり
よつて持と為へし

」（第三十四紙）

6．鶴岡放生会歌合

いつれの年にか鶴岡乃放生会ことに
事と、のほり菟園の御行粧いと、めつら
かにて一日乃見物なれは万人きをひこ
る道々の輩ともあるは役にしたかひあるは
友にさそはれてやすらひくらす秋の
なかは月のさかりなれは雲おさまり星まれ
にして南にのそめは海濱茫々たり泰
甸の一千餘里思やられ北にかへり見れは
社壇重々として漢家の三十六宮に
ことならす爰よしつきたる翁二人いひ
けてむかし宮こにて東北院乃念仏九月
十三夜にあたりて諸道の歌合あり
けりいまあつまにして楡柳営の敬神
八月十五夜を照して衆生乃化度を
みそなはすかゝる法会にあひてこの良
辰を得たり舊遊をしたひて新詠を
番はんといひけれはおの〳〵しけき世
つきにあへりけん心地してかつ〳〵題を
思ひ筆をとるに白露点して苗潤うつり
青嵐吹て蕭瑟とかすかなりさて
やかて当社神主を判者としき勝負
をさため優劣をわきまゑ待りけると
なむ

」（第一紙）

歌合
題
月　恋
作者
左方
楽人　宿曜師　持経　遊君
繪師　銅細工　疊差　鏡磨
相撲　猿楽　相人　樵夫
右方
舞人　竿道　念仏者　白拍子
綾織　蒔絵師　御簾編　筆生
博労　田楽　持者　漁夫
講師
読師
判者

」（第二紙）

」（第三紙）

八幡宮神主

一番

左　樂人

もの、ねや月乃宮こにかよふらんのほりし橋の路を尋て
一夜たにあふことしらぬ笛竹乃あなうたてともいひきかせ
はや

右　舞人

たちまふに入日をかへす袖そかしおしまはとまれ山の端の月
立いにも手なるハかりのゆへやあると恋しき人のひさま
きもかな

判云月は左の哥のほりし橋のといへるを思わたるに
羅公遠か事にや侍らんまことに思風をくあふ
きて玄宗乃あそひにかよひ詞露あさやかに
赤人か様を習へり見えて
右哥入日をかへす袖は魯陽公かためしを引て
羅陵王のたすけとなせるとこそ両首ともに」
温故知新と侯へし然而月宮の仙遊ハ猶たかくや
こえ侍らん仍以左為勝恋ハ左乃笛竹のことは
にハいたくめつらしきふしもなくすかたなにとなく
ことこもりてさる手つかひもや侍らんとゆかし
けれは尤以右為勝」

（第四紙）

二番

左　宿曜師

くもりなく星のやとりハみしかとも月乃あはれもすてかたき
哉

うき人のむまれの月日問きけんけにあひかたき事や
見ゆると

右　竿道

なかむれは月のた、ちハ人しらす
みちかけするも我そさたむる
うくつらき数のミおほく
つもりなハをき所なき
物やおもはん
判云月は左右歌いつれも心
ありて詞たらす彼在原朝臣
しほめる色をしたひて残れる
匂をたのむにことならす可為持
にや侍らん
恋は右の哥九々といふより億兆乃
うへにもいくらの数か侍らんをき所
なきやその道の事たらぬ様ニ
なされ侍らん」

（第六紙）

三番

左　持経者

しまきれにし袖の白玉いかにそとおしへかほにもみゆる月
のひかね心を人にそめ紙のくりかへすにも色は見ゆ
らむ
哉

右　念仏者

あはれいつか果す涅槃の心にて
常住世なる月を見るへき
こゑのあやはつる、糸のより
すちり人にかくるハ心
なりけり

判云月は左歌五百弟子品を
さ、け右哥四十八願門をひら
けり教の文句歌の勝劣
定め申かたく侍へし
恋は左哥詞のつ、き心のをきて
歌よみといはんにたらんことなく
まことしくよめる
こそ侍らめ経を
そめかミといへるも
物のゆへしれりとみゆ
右の哥声のあやはつる、
糸のといへるに人思よるへからす
君子なりと申べくや自由ならすして
自由を得たり但た、しからぬ所の侍れハ
為持」

（第七紙）

四番

左　遊女

河頼より影さす月のみなれさほ
船もなかれ乃波のよる〳〵
われなからたのまれかたき契かな
おもひさためぬ人を恋つ、
右　白拍子

秋の思一こゑにてもかそへはや
月見ることのつもる夜頃を
思わび心をせめてふまれけり
つらし〳〵といひかさねつ、
判云月ハ左歌三秋のあはれに
たへす一声の心さしをいふに
侍れと左哥紅衣青袂万人の
往来をたのミ船中浪上一生の
浮沈を思へはよその心もしぬる
ハかりにて勝と申侍ぬる

恋ハ左の哥よしありて
とかなくハ侍れと目なれ
たる様にや侍らん右の歌
ことのさま哥のすかた言猶
感動頗可為勝者歟

五番
左　繪師
おなしくは月のえしまをみにゆかん波のしほ草かきやよする　と
くろかミをやミのうつゝにかきやりて見ぬ面影をうつしかね　つゝ
右　綾織
雲鳥のあやとそ月に」
みなさましたなひく雲　に
はつ雁のこゑ
こよひさへいもかこまくら
よそにしておほとのゐ　にや
ひとりあかさん
判云月ハ雲鳥の綾もをり
えたる心地して侍れとえしまの
波ハ見ところたちまさると申　へし
恋の番も左やみのうつゝは優に
侍へし右はつくろはぬ様に
きこえて歌めきたる事なけ
れハ猶左の勝にこそ　」

（第八紙）

六番
左　銅細工
影しろきめぬきのたちのつか乃まも月にのミこそみかくれに
はなれ行人の心のこハかねをからくりハねてねをのミそ　けれ　なく
右　蒔絵師
月影に水きはのまさこ
かきまぜて浦にまきゑ　の
はこさき乃松
あふことをよそになしちの
数ハかりあハれこまかに
ちる泪かな
判云月乃左右哥心詞あらぬ　」

（第九紙）

七番
左　畳差
躰にして得失ハかハること侍り
恋は両首興あるさまにとり
なせりおほかたまことなるにも
狂たるにもよらす哥と
きこゆる心むけ詞
つかひことなるもの
にて侍なり可為持　」
いつくにか月乃光のさゝさらん波をたゝミの浦のみちしほ
恋すれハこゝろたかくそなりにけるへりもおかすやいひ
きかせまし
右　御簾編
夕まくれこすの間とほる
月影ハくまなきより　も
あはれなるかな
夜な〳〵は思かかくるを
あしすたれなとふし〳〵の
あはすなりけん
判云月ハ左の光
くもりなくあさや
かに侍へし右ハ
時も夕のまきれ
月もかすかなる程
なれはたとへなかる
へきを心ちある
さまのすてかたさに
持と申侍ぬるよの
つねの判者ハあさけり
侍らんかし恋は左の畳
しきしのふさまはみゆれと
さしも侍らす右のすたれ
秀句ニかゝりて侍れと
一ふしあるに似たり為勝　」

（第十紙）

八番
左　鏡磨
おなしくは入江にやかてとりみかけ鏡も水の月をうつして
露深きかたはミ草をたもとにてしほりかくれハおもかけも
右　筆生
水くきの岡へにわれは
家ゐせん月に卯の毛の　みす

（第十一紙）

するをそろへて
人してそおもふ心を
いはすへきふてには
跡のみえもこそすれ
判云月ハ左の鏡を見るに百練乃
銅なるへし所献君王なり不明臣妄
とかや思なしもけたかく侍れと右
ミつくきの岡へをしめて月の卯の
けのといへる事のよせ物の
ゆへありてや侍らん仍
勝と申侍へし
恋ハ右哥つねきく
心地してめさむる所も
侍らす左歌恋の哥はかくこそあらま
ほしけれとみえて切なる様なり可為勝歟
」　（第十二紙）

九番
左　相撲
日ハ入て月こそ空にねり出れ独すまひの心地のミして
とりもあへす心に人をかくれともいさとよそれもうつるならひハ
右　博労
御空行月毛の
こまをひきとめて
ひのくま川に
すそやあらはん
なへて世の人に
たなれのあた心
つけすまひこそ
よしなかりけれ
判云月ハ衆星あれとも一月ニハ
しかすと申とありおかしく思
よそへて侍かなさゝのくまに
かけたにといへる哥をとりて
すそあらはんといひなしたる
興あるへし為持
恋は両方の作者
申なれたる詞つかひ
思ならはしたる
ことくさ哥となり
てもいひしりて侍
へしさるにても
左うるハしく侍り
為勝
」　（第十三紙）

猿楽
よひさへ月の前にハいてて見んうしろとゝこそいひなさる
とハるゝわれとはさらに見えしとておもてかたをもせとも
ほしきまま哉
田楽
ちたゝく中門口乃
すらひにさゝらあふ
て月をこそみれ
章を手たまに
せてつきやらん
れなき人も
りやいるゝと
判云月ハ左たしかに
してすかたをくれ
右けしきつきてことは
あまれりいつれとなくや
侍らん恋は左まことし
からんとよミ右興あらむ
と
おもへりなそらふるに持
なとにて侍へし
」　（第十四紙）

十一番
相人
ねてより月の行ゑのみえしかなふにたかはて雲晴にけり
れといはゝあハんと人や思ふとてこふるあたりニうちなのり
つゝ
持者
とれ月心のくまもなかりけり
をハかさん神の宮つこ
へてには恋の心も
わるらんまことはうなひ
りハおとめこ
判云月左は世のつねの哥
さまなり右やとれ月とて
袖をハかさんといへることから
上手めきて侍へし性を
えすしてまなハんハあしかる
へきにやこれハ始終いひかな
ひて侍れは為勝
恋ハ右たゝありのまゝの
おしはかりて題の心
いたく思入す左は恋
」　（第十五紙）

乃行ゑもいますこし
たよりあるへくやとて
為勝

十二番
左　樵夫
月のミそ帰れは人を送りけり山風たのむ谷の夕暮
恋ち山うきにもいたくこりぬれハ峯の妻木はとし
わすれつゝ

右　漁夫
とる棹の歌のこゑまて
浦さひて月のしほせに
いつる舟人
ふかくとも人の心を
つるハかりあハれいかなる
えをかたつねむ
判云月は左歌は若耶
溪の風のミにもあらす
鳳凰池の月さへ思出
られ侍へし右歌棹歌
一曲釣漁翁と申詩の
心はへなるへしいつれも
よろしくみえ侍かな為持
恋の左ハ義婦坂のさかし
きにつかれて樵路をわ
すれ右の歌は窈娘堤
乃遥を尋て釣處に
まよふ皆いひしりて侍ニ
恋路山や名所ならすハ
おさへて侍らんさらは
右の勝と申へし

」　（第十六紙）

ひくしめの
なかき夜
すから
なかむ
れは
神さひに
けり
袖の
月かけ

」　（第十七紙）

神主

」　（第十八紙）

11・三十六歌仙絵巻

正三位柿下朝臣人麿
大春日同祖天足彦國押人命之後也敏
達天皇御宇依有家門柿樹為柿下
朝臣氏天智天武持続文武元明元正聖武
等御時八十三年間人也從石見國別妻上
來古萬葉集云大寶元季紀伊國行幸時
駕御車作歌
ほの〳〵とあかしのうら乃あさきりに
しまかくれゆく舟をしそおもふ

」　（第一紙）
」　（第二紙）

淡路掾凡河内躬恒
宇多院第四皇子敦慶親王男
母伊勢守藤原繼蔭女号中務
廷喜之比人
いつくとも春乃ひかりハわかなくに
またみよしの、山は雪ふる

」　（第四紙）

中納言從三位兼行春宮大夫大伴家持
大納言旅人男鎮守府将軍
さほしかのあさたつをの、あきハきに
たまと見るまておけるしらつゆ

」　（第六紙）

藏人頭右近衛權中将從四位上在原朝臣業平
平城天皇孫彈正尹阿保親王五男母伊豆内
親王桓武天皇第八女
代の中にたえてさくらのなかりせは
るのこゝろはのとけからまし

」　（第八紙）

律師素性
良峯宗貞二男宇多醍醐二代人
いまこむといひしハかりになかつき乃
ありあけの月をまちいてつるかな

」　（第十紙）

猿丸大夫
持統文武御時人猿丸大大夫從五位上
者弓削皇子異名云々弓削皇子
天武天皇子大江皇女也
おちこちのたつきもしらぬやま中に
おほつかなくもよふことりかな

」　（第十二紙）

中納言從三位兼行右衛門督藤原兼輔
左近衛中将利基六男寛平御時人号堤

中納言
人乃おやのこゝろはやみにあらねとも
こをおもふミちにまよひぬるかな

權中納言從三位藤原敦忠
左大臣時平三男母左衛門佐藤原棟梁女
延喜御時人也号本院中納言
あひ見てののちのこゝろにくらふれは
むかしハものをおもはさりけり

」（第十四紙）

從四位下守右大弁源公忠
大藏卿源國紀（光孝天皇第六源氏）一男太宰大貳近
江守延喜御時人号滋野井弁
行やらてやまちくらしつほとゝきす
いま一こゑ乃きかまほしさに

」（第十七紙）

齋宮女御徽子
二品式部卿重明親王女母貞信公女承
平六年九月成齋宮年八歳三品天暦
三年為女御年廿三歳仍号齋宮女御
又号承香殿女御
ことのねにミねの松風かよふらし
いつれ乃およりしらへそめけむ

」（第十九紙）

正四位下行右京大夫源朝臣宗于
光孝天皇孫南院式部卿是忠親王男
寛平六年改姓為臣
ときハなる松乃みとりも春くれは
いまひとしほ乃色まさりけり

」（第二十一紙）

從四位上行右兵衛督藤原敏行
藏人頭右近衛權中将兼春宮權亮
平八年四月依病不仕辞藏人頭能書
人也母刑部卿正四位下紀名虎女（有常妹云、）
清和陽成光孝宇多醍醐五代人
あきゝぬとめにハさやかに見えねとも
風のおとにそをとろかれぬる

」（第二十三紙）

從五位上行紀伊守藤原朝臣清忠
中納言藤原兼輔二男延喜天暦人天暦
九年左近衛少将
ねのひしにしめつる野邊乃ひめこ松
ひかてやちよのかけをまたまし

」（第二十六紙）

正六位上行下總權大掾藤原興風
参議濱成卿曾孫道成男延喜御時人
松字院藤太彈琴之師管絃人也
たれをかもしる人にせむたかさこの
もむかしのともならなくに

」（第二十八紙）

從五位下行大内記坂上是則
加賀介御書所衆延喜御時人
みよしのゝやま乃しら雪つもるらし
ふるさとさむくなりまさり行

」（第三十一紙）

小大君
三條院東宮時女藏人左近是也或書日醍
醐天皇孫三品式部卿重明親王女母貞信
公女一條院御時人
いはゝしのよる乃ちきりも絶ぬへし
あくるわひしきかつらきの神

」（第三十四紙）

祭主正六位下行神祇大副大中臣能宣
祭主神祇大副從四位下頼基子
千村上冷泉圓融華山一條五代人也
きとせまてかきれる松もけふよりハ
みにひかれてよろつよやへん

」（第三十六紙）

從五位上行駿河守平朝臣兼盛
光孝天皇後一品式部卿是忠親王曾孫
從五位上興我王孫從五位上筑前守篤行
二男母宮道氏朱雀村上冷泉圓融華山
一條六代人
かそふれハわか身につもるとしつきを
おくりむかふとなにいそくらん

」（第三十九紙）

」（第四十一紙）